平成19年度　文部科学省採択
「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」選定取組

活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成

～西宮市・同窓会・NPO法人と連携した実践的人づくり～

最終報告書　平成22年3月

神戸女学院大学 人間科学部

はじめに

神戸女学院大学人間科学部は心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科という文系学科と理系学科から構成されるユニークな学部である。1993年の発足以来、両学科の教員はそれぞれの立場から地域の抱える課題をテーマとして、教育・研究に多くの成果を上げてきた。これらを基盤に学部共通の人材養成プログラムにまとめたものが本取組である。学部長を中心に学科長、関連教員とでブレーンストーミングを重ね、学部教授会での議論を経て、文科省の現代GPプログラムに提案できる形にまとめた。このような作業ができたのも、学部内での教員間の意思疎通と協力関係ができていたことが大きく、教員間で前向きで率直な意見交換ができた。その成果は付録に採録した現代GPプログラム申請書および選定理由書となって結実した。

首尾よく現代GPプログラムに採択されたものの、全てが手探り状態のまま「地域活性化論」、「NPOマネジメント論」、「地域活性化総合実習」、「プレゼンテーション演習」の科目を立ち上げていった。「将来、地域を活性化する活動を自発的に行う人材を養成するために、将来に備えた実践的な練習を学生に行わせること」がこの取組の基本理念であるが、どうすればその基本理念にかなう教育活動ができるのかはよくわからないままのスタートであった。まさしく「走りながら考える」状態ではあったが、3年間の活動を終えて、「適切な機会を与えてやれば、学生は自ら成長していく」という当たり前のことを改めて再認識した。西宮市、神戸女学院教育文化振興めぐみ会、NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）の支援、外部から招聘したゲスト講師の方々の協力なくしてはこの取組の成功はあり得なかった。外部の方々との交流を通じて学生は大学の中では学べない多くのことを学ぶことができたことをここに記して、改めて感謝の意を表したい。この取組では一人の教員が主担当教員として30人の学生を3年間持ち上がる形で指導と助言を与える方式を採用したため、主担当教員は学生の成長していく過程を実感することができた。学生たちは教員の予想を超えて、大活躍し、大きく成長してくれた。

本報告書では教員の立場からの分析や総括はなるべく避けて、できるだけ学生の活動する様子、成長する過程がわかるようなものにした。この取組における私たちの目標は付録の現代GPプログラム申請書の中にまとめられている。神戸女学院大学人間科学部での地域に根ざした人材養成の取組が広く全国に伝わるように、神戸女学院大学の多くの学生がこの教育プログラムに興味をもつように願っている。

平成22年3月

現代GPプログラム取組責任者
人間科学部 教授
寺嶋 正明

CONTENTS

はじめに …… 2

活動概要 …… 5

活動スケジュール …… 11

2年次プログラム

「地域活性化論」 …… 13

「NPOマネジメント論」 …… 23

3年次プログラム

「地域活性化総合実習」 …… 27

平成20年度プロジェクト …… 29

平成21年度プロジェクト …… 41

4年次プログラム

「プレゼンテーション演習」 …… 53

外部交流活動

学外での実績発表報告 …… 64

海外視察レポート …… 67

活動成果　学生手記 …… 73

総括 …… 77

付録

現代GP申請書類 …… 79

取組の概要及び選定理由 …… 93

報道実績 …… 94

PROJECT STAFF一覧 …… 95

活動概要

現代GPとは何か

現代GP（Good Practice）とは、平成16年度（2004年度）より文部科学省で開始された「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」のことです。各種審議会からの提言などを踏まえ、文部科学省が社会的要請の強い政策課題（地域活性化への貢献、知的財産関連教育など）に関するテーマを設定。これに対して各大学、短期大学、高等専門学校が取組計画を応募し、その中から国公私を通じて特に優れたものを選定し、財政支援を行ってくれます。また、選ばれた取組を社会に広く情報提供し、高等教育全体の活性化を促すことを目的としたプログラムとなっています。

この現代GPに、神戸女学院大学人間科学部の取組「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成ー西宮市・同窓会・NPO法人と連携した実践的人づくりー」も採択されました。

本取組の社会的ニーズ

現代GPにおいては、社会的なニーズの強い課題が取組のテーマとなります。本取組のテーマである「地域社会の活性化と、それを推進する人づくり」に関しては、2004年8月23日に「地域づくり支援アドバイザー会議」から提言が発表されています。提言では、「地域コミュニティを回復させ、活気ある地域を取り戻すためには、社会の問題を自分自身の問題として考える新しい『公共』の観点に立った自主的、自立的な地域づくりの取組と、その地域に関わるあらゆる主体との協働による、地域づくりへ向けた継続的な活動が必要である」ことが強調されています。人材育成の課題として「リーダーの専門性の欠如」「リーダーを育成するシステムの不在」を指摘。方策として「専門的なリーダーを育成するための学習方法の確立」や「実践的な学習機会の提供、カリキュラムの開発」が必要だとしています。

選定理由

本取組では環境・バイオサイエンス学科と心理・行動科学科の2学科にまたがる「地域創りリーダー養成コース」を新設。専門の異なる学生に対し、2年次から必修科目4科目（10単位）を含む24単位でカリキュラムが構成され、コース修了時には修了証が与えられます。地元自治体西宮市、NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）、本学同窓会である社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会との連携も大きな要となっています。

2年次には地域創り活動の見学や連携・支援団体の担当者から話を聞くなどして課題発見に取り組みます。3年次には中心的科目「地域活性化総合実習」において、連携・支援団体と協働し、身近な自然を題材とした環境問題、食の安全や安心、子どもの心の問題などをテーマとしながら、「市民が親子で参加できる体験学習型プログラム」の企画・運営を実施。この体験を通して、地域活性化を担うリーダー的人材を養成することを目指しています。

このプログラムの地域貢献度、教育プログラムとしての完成度が高く評価され、同時に、これまでの本学の地元における活動から十分に実現が可能と判断されました。また、地元の卒業生（めぐみ会）の協力による取組の実施という、女子大ならではの新規性も認められ、地域社会の子育てに十分貢献するとの評価をいただきました。

本取組の目的・目標

〝地域が抱える問題と積極的に関わる人材を育てたい。〟

2つの学科で培った西宮市との連携を学部単位の活動へ。

現在、各地の地域社会は、自然環境の保全や子育て支援、食の安全性や老人介護など、さまざまな問題を抱えています。解決のために今強く求められているのが、地域創りを推進する専門知識とスキルを持ち合わせたリーダーです。

そもそも、本学が位置する西宮市は、わが国で初めて「環境学習都市宣言」を行うなど、地域の環境問題に積極的に取り組んでいます。人間科学部は以前からそれらの活動を支援し、95年の阪神・淡路大震災後の復興事業に協力して以来、「にしのみやパートナーシップ」に認定され、緊密な関係を培ってきました。学科単位で行ってきたそれらの活動を、学部単位に発展させて誕生したのが、現代GP「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」です。

プログラムのねらいは、地域活性化に向けてリーダーシップを発揮できる人材の育成。これまでの実績と信頼関係を基に、西宮市・NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）・神戸女学院教育文化振興めぐみ会と連携して展開しています。

広く深く学内外と協働し、人づくりをサポートする総合実習。

プログラムでは3年次に総合実習を実施。地域社会に向けたイベントを学生自身が企画・運営することが特長です。受講した学生が地域に根ざした課題を見つけ、幅広い視野から問題解決を考える能力や、多くの人と協働して取り組む能力、地域のリーダー的役割を果たす能力を身につける、実践的学習のステップとなっています。

企画内容によって、西宮市やNPO法人LEAF、神戸女学院教育文化振興めぐみ会と協働でイベントを運営。学外から社会的視点を取り入れ、地域社会のリーダーに必要な資質を育成します。

また、大学院でも「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」「環境と健康のために行動する女性科学者養成」のプログラムを文部科学省の大学院GPとして開講。進学すればさらに高い専門性を身につけることができます。

社会で必要な力を身につけ、継続的に活動を。

もっとも、受講した学生全員を地域のリーダーに、とは望みません。しかし、総合実習を含む3年間のプログラムを通して、「与えられた仕事を責任を持って果たす」「リーダーシップがとれる」など、社会のどんな場面でも必要とされる能力を身につけてほしいと思います。

また、卒業後もめぐみ会のネットワークを通じて活動を継続することができます。国内のみならず海外の支部も通して、西宮市以外でも地域や社会でリーダーとして活躍してくれる女性が誕生することを期待しています。

まなびの目標

この取組では、学生が実践的な知を育むことで、

1. 地域に根ざした課題を見つける能力
2. 幅広い視野から問題の解決を考える能力
3. 多くの人と協働して事に当たる能力
4. 地域のリーダー的役割を果たす能力

を身につけることを目標とします。

そのために、心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科の学生を対象に、2年生後期からのスタートとなる定員30名の「地域創りリーダー養成コース」を開設しました。

「地域創りリーダー養成コース」の受講の流れ

2年生後期から始まり、必修科目の10単位（4科目）を含む24単位以上を取得すると修了証が交付されます。各学年ごとに教育目標を定め、それに応じた講義内容としています。

2年生　教育目標「現状と問題点を知る」

「地域活性化論」では、地域活性化に取り組む行政や企業、連携・支援団体などからゲスト講師を迎え、地域活性化活動の現状を具体的に学習。高齢者施設の施設長として活躍している卒業生から現場の話を伝えてもらうなど、実践的な知識が身につく講義となっています。地域創り活動の見学なども講義に含まれ、3年生の地域活性化総合実習で取り組む課題を自ら発見し、そのプランをレポートとして提出します。
また「NPOマネジメント論」ではNPO法人LEAFの事務局長を非常勤講師に招き、NPO法人の立ち上げ、マネジメント、広報活動に関する知識、さらにESD（持続可能な開発のための教育）の考え方を学びます。

3年生　教育目標「自ら問題に取り組む」

この取組の中核である「地域活性化総合実習」を通年の講義とし、講義時間にとらわれない教育活動を展開します。
自然現象を合理的に説明する方法を学ぶ環境・バイオサイエンス学科の学生と、心の働きや人とのコミュニケーション手法を学ぶ心理・行動科学科の学生が協働し、「西宮市民が親子で参加する体験学習プログラム」を連携・支援団体とともに実施。学生自らが企画し、体験学習プログラムの作成、連携・支援団体との折衝、体験学習を行います。
異なる領域を学ぶ学生たちが協働することで、広い視野から幅広い世代の地域住民を対象とした体験学習プログラムの企画・実施が可能になり、この取組の軸となる実習となっています。

4年生　教育目標「さらに深く研究し、成果を発表する」

「プレゼンテーション演習」を開講。パワーポイントのコンテンツ作成を通じて、自らの活動を広く発信する有効な方法を学びます。
また、「地域活性化総合実習」実施報告を、西宮市が推進する生涯教育の拠点である西宮市大学交流センターで行い、西宮市民に向けて直接呼びかけ、討論することで活力ある地域社会の実現を目指します。
この取組を経験した4年生はステューデントアシスタント（SA）として採用され、2、3年生の後輩にアドバイスをする役割を果たすことで、さらに理解を深めていきます。

以上の3年間の取組は、それぞれの専門分野での卒業研究へと展開することも可能です。また、大学卒業後に大学院に進学し、さらに専門的な教育を受けることもできます。

■授業担当教員一覧

	地域活性化論	NPO マネジメント論	地域活性化総合実習	プレゼンテーション演習
平成 19 年度	寺嶋 正明	小川 雅由 （非常勤講師、LEAF 事務局長）		
平成 20 年度	水本 誠一	小川 雅由 （非常勤講師、LEAF 事務局長）	寺嶋 正明（主担当） 水本 誠一 山本 義和 西田 昌司 小林 哲郎	
平成 21 年度	遠藤 知二	小川 雅由 （非常勤講師、LEAF 事務局長）	水本 誠一（主担当） 寺嶋 正明 西田 昌司 遠藤 知二 奥田 紗史美	寺嶋 正明 水本 誠一

カリキュラム

		1年 前・後期	2年 前期	2年 後期	3年 前期	3年 後期	4年 前期
地域創りリーダー養成コースの講義科目	両学科の学生が共通して履修する科目	● 女性学（理論編） ● 女性学（実践編） ● 環境科学概論 ● 生物の適応と進化 ● 人権論 ● 認知科学概論 ● 情報科学基礎演習	● 食品環境学 ● ジェンダーの心理学 ● 認知心理学 ● 情報科学応用演習Ⅰ	● 植物生態学 ● 動物生態学 ● 消費者問題論 ● 認知心理学 ● 健康心理学 ● 家族臨床心理学 ● 新設 地域活性化論 ● 新設 NPOマネジメント論	● 環境生態工学 ● 食品学 ● 文化心理学 ● 集団力学 ● 新設 地域活性化総合実習	● 環境保護論 ● 文化と人間行動 ● 食文化論 ● 都市環境論 ● 新設 地域活性化総合実習	● 環境政策学 ● 健康医学 ● 新設 プレゼンテーション演習
	環境・バイオサイエンス学科の学生が受ける実習	● 環境科学基礎実習（前期） ● バイオサイエンス基礎実習（後期）	● 生命の科学実習	● 微生物学実習	● 食品機能解析実習 ● 生態学実習	● 食品学基礎実習	
	心理・行動科学科の学生が受ける実習科目		● 心理行動科学実験実習 a	● 心理行動科学実験実習 b	● 臨床心理学実習Ⅰa ● 臨床心理学実習Ⅱa	● 臨床心理学実習Ⅰb ● 臨床心理学実習Ⅱb	● 臨床心理学実習Ⅲ

※ 新設 は2007年度に新設した科目
※必修を含む24単位を取得した履修者には修了証を発行します。

大学院教育との連携

「地域創りリーダー養成コース」を履修した学生が神戸女学院大学大学院の人間科学研究科に進学すると、将来自分の力をより発揮できるように、専門的な教育を受けることができます。

人間科学研究科では、文部科学省の平成19年度（2007年度）大学院教育改革支援プログラムに、次の2つのプログラムが採択されました。いずれも地域との連携、環境と健康、ESDに関連したプログラムであり、現代社会で必要とされる人材養成を目的としています。

大学院教育改革支援プログラム1（人社系）

「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」

（対象：臨床心理専門分野　取組責任者：山口 素子教授）

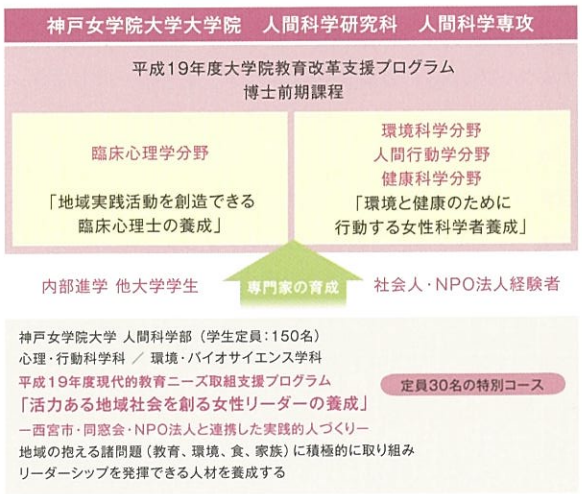
与えられた職務を果たすだけでなく、地域のニーズを自ら探り、地域の関係機関と連携して働くことのできる臨床心理士を養成します。そのために、人間科学研究科付属の心理相談室に地域実践部を設け、大学院生によるアウトリーチ（大学の外に出て、社会の中に活動範囲を広げる）活動を支援します。

大学院教育改革支援プログラム2（理工農系）

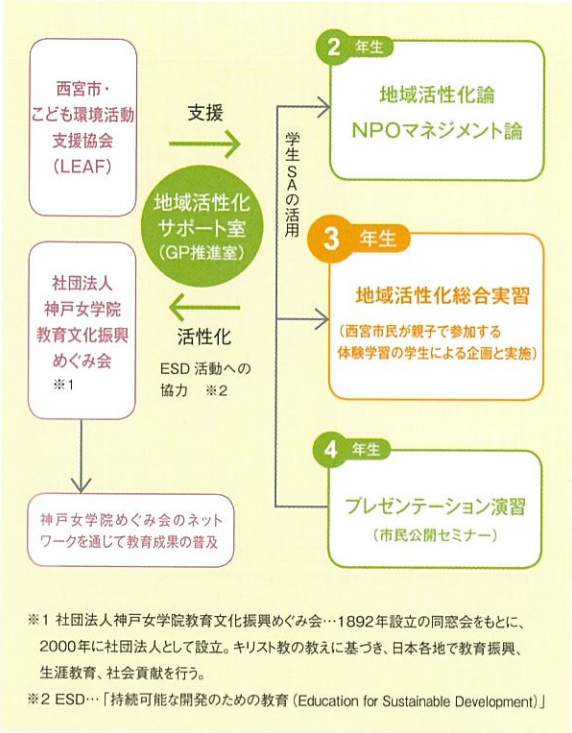
「環境と健康のために行動する女性科学者養成」

（対象：環境科学・人間行動学・健康科学専門分野　取組責任者：遠藤 知二教授）

環境や健康について、科学的なアプローチから地域に根ざした活動ができる人材を養成することを目的に、サイエンス・アウトリーチ、語学研修、インターンシップ、大学院セミナーなどを加えた取組を展開します。



取組図



取組のポイント

1.専門分野が異なる両学科の学生が一緒に学ぶこと

心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科の両学科の学生たちが、講義でのディスカッション、実習の相談などを通じて、お互いに違ったものの見方をしていることに気づき、専門領域を超えた幅広い視点で考えることの重要性を学びます。

2.幅広い世代の市民を対象とした体験学習プログラムの企画と実施を行うこと

「西宮市民が親子で参加する体験学習プログラム」の企画と実施（地域活性化総合実習）を行うことで、環境学習都市・西宮市が推進するESDに協力。この実習を通して、将来、地域創りのリーダーとして活動するために要求される「各団体と市民との間をコーディネートする力」「地域を活性化する活動をマネジメントする力」を持つ学生を養成していくことができます。

3.神戸女学院の同窓会組織「めぐみ会」と連携すること

多くの卒業生が日本各地で、神戸女学院の教育の精神を生かしたさまざまな社会奉仕活動を行っています。学生たちは卒業後もこの取組での「まなび」を生かし、めぐみ会の国内外に広がるネットワークを通じて活動を継続することができます。各々の地域社会で「活力ある地域を創る活動」を実践すると期待できます。

連携・支援団体との関係

西宮市・NPO法人LEAFとの関係

神戸女学院大学が位置する西宮市は、平成15年12月に我が国で初めて「環境学習都市宣言」を行いました。「参画と協働の環境学習を通じて、21世紀の世界に誇ることのできる持続可能な都市を実現」することを目的とし、NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）を中心に地元企業の協力も得て、子どもたちの環境学習を通じた地域創りを進めてきました。

さらに、西宮市とNPO法人LEAFは、文部科学省、環境省が中心となって進めている「持続可能な開発のための教育（ESD）」にもいち早く対応。環境教育を軸に、福祉教育、子どもの人権教育にも教育内容を広げており、本学前学長の川合真一郎教授（生態毒性学）もESD活動に協力する「環境計画推進パートナーシップ会議」の委員長を務めるなど、深く関わっています。

このような環境のなか、人間科学部の2つの学科は、西宮市、NPO法人LEAFと緊密に連携した教育を行うなど、以前から西宮市の活性化に継続的に協力してきました。

環境・バイオサイエンス学科の教員・学生は、卒業研究や演習科目の一環として、西宮市の環境調査や住民と一体となった環境保全の取組、食品の安全と安心に関する市民対象セミナーの開催などを積極的に実施。心理・行動科学科の教員・学生は、近隣地域の児童相談所や病院福祉施設で学外実習を行っています。さらに、大学院の臨床心理学専門分野は臨床心理士養成課程としての役割も果たしていますが、人間科学研究科付属の心理相談室では、担当教員・大学院生が心のケアを必要とする地域の児童や家族の相談にあたっています。

めぐみ会との関係

1892年に設立された神戸女学院大学の同窓会に端を発し、2000年に社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会を設立。キリスト教主義に基づく本学の立学精神を重んじ、教育振興、生涯教育、社会貢献を行うことを目的とする団体で、約30,000名の会員がいます。

日本各地で、高齢者の介護、ベビーシッター、育児相談、手話通訳などさまざまな社会奉仕活動を行う卒業生は、学生の身近なロールモデルとしての役割が大きく、この取組の履修生は卒業後もめぐみ会の一員として、日本各地で地域創りリーダーとして活躍すると期待できます。

学内のサポート体制

この取組を支援するために、人間科学部長、両学科長と、各学科の教員数名からなる「地域創りリーダー養成コース」運営委員会を組織。地域活性化サポート室（GP推進室）を開設し、専従スタッフを採用。地域活性化サポート室が教育課程のマネジメントを行っています。

取組の成果と効果

この取組は、これまで神戸女学院大学が追求してきた人間科学に関する教育を生かし、地域創りのリーダー（担い手）の養成、西宮市のESDへの協力という社会ニーズに応えるものです。
それをふまえ、この取組を行うに際して、特に創意工夫したのは以下の4点です。

1.異なる専門分野を学ぶ心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科の学生が協働して、活力ある地域を創る活動に取り組むための実地訓練を行う点

2.西宮市の推進するESDに協力する点

3.西宮市の生涯教育プログラムと連携した市民セミナーを行う点

4.めぐみ会会員を身近なロールモデルとする点

これは、学生だけでなく、連携・支援団体、そして教育改革への成果・効果ももたらすものとなっています。

学生への成果・効果

学生はESDの理念を理解することができ、多様な面から地域創りに貢献するという明確な視点を持つことができます。
また、学生自らが外部の連携・支援団体と協力して、「西宮市民が親子で参加する体験学習プログラム」の企画・実施に取り組むことは、将来の地域活性化活動を推進するための貴重な体験となり得ます。
この取組を行った学生は、卒業後に社会経験、生活体験を積み重ねながら、めぐみ会のネットワークを通じて日本全国で活力ある地域創りの女性リーダーとして活躍することが期待できます。そうなれば、この取組の成果を全国に広めながら、社会ニーズに応える効果を持つこととなります。

連携・支援団体への成果・効果

連携・支援団体の担当者にも、この取組との連携を通じて「自然とこころと体を科学する」という視点から自らの活動を再認識してもらうという、再教育・生涯教育の側面も持ち合わせていると言えます。また、現代GPの取組以降も連携・支援団体と学生とのつながりが継続され、新たな発展をする可能性もあります。

教育改革への有効性

この取組は、自然科学と社会科学の学際的な（複数の学問分野にかかわる）領域での教育が進展するという教育改革が見込めます。
例えば、「食の安全と安心」では、残留農薬・環境汚染の農作物や魚への影響、遺伝子組換え食品に関する自然科学的な理解と、市民にそれをどのように説明するかというリスクコミュニケーションに関する社会科学的な理解がないと、一般消費者には説明できません。
また、「心のケアを必要とする人の自然とのふれあいを通じた癒し」や「理科離れの進む子どもたちの自然に対する興味の育成」なども、学際的な視野が必要な教育分野であり、効果的な教育方法が確立されていない部分です。
この取組をきっかけに、心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科の教員が協力して、効果的な学際的教育方法の確立に取り組むことが大いに期待できます。

評価体制

神戸女学院大学では、授業、教員の評価を行うFDセンターを設置し、全開講科目において、各学期中に学生による授業評価アンケートを実施しています。その結果は各授業で公表され、受講する学生と意見交換を行っています。
それに加えてこの取組では、3年生の体験学習への学外参加者に対するアンケートを実施。4年生の市民向けセミナーでは、市民と直接対話をした上でのアンケート調査を行います。それらを「地域創りリーダー養成コース」運営委員会を通じて、次年度以降の取組に反映させます。

■人間科学部教員（平成19-21年度）

〈心理・行動科学科〉

出口 弘 教授／生野 照子 教授／石谷 真一 教授／
小林 哲郎 教授／國吉 知子 教授／水田 一郎 教授／
森永 康子 教授／山 祐嗣 教授／山口 素子 教授／
小林 知博 准教授／三浦 欽也 准教授／水本 誠一 准教授／
田島 孝一 准教授／奥田 紗史美 専任講師

〈環境・バイオサイエンス学科〉

遠藤 知二 教授／張野 宏也 教授／川合 真一郎 教授／
中川 徹夫 教授／西田 昌司 教授／野嵜 玲児 教授／
塩見 尚史 教授／寺嶋 正明 教授／山本 義和 教授／
金沢 謙太郎 准教授／三宅 志穂 准教授／高岡 素子 准教授

活動スケジュール

2007年度

10月	2日	地域活性化論　講義開始
	3日	NPOマネジメント論　講義開始
11月	3日	地域活性化論　学外実習
2月	9日～10日	平成19年度 大学教育改革プログラム合同フォーラム
3月	5日～9日	EWC環境パネル展　参加
	25日	平成19年度 西宮市環境まちづくりフォーラム　参加

2008年度

4月	17日	地域活性化総合実習　開始
	27日	甲山農地にて初農作業（苗植え）
5月	8日	地域活性化総合実習　第1回中間発表
	17日	ひょうご・こども環境会議にてボランティア体験（農地作業）
	18日	同上（兵庫県公館でのエコメッセージフラッグづくり）
6月	12日	地域活性化総合実習　第2回中間発表
	21日	サツマイモの苗植え
7月	10日	地域活性化総合実習　第3回中間発表
8月	2日	大学オープンキャンパスにて展示
	15日～20日	バーリントン市視察
	23日	第1回「親子で作ろうベジタブル!」イベント開催
9月	13日	第1回「早めのメタボ予防大作戦!!」イベント開催
	23日	第2回「親子で作ろうベジタブル!」イベント開催
	27日	第2回「早めのメタボ予防大作戦!!」イベント開催
10月	15日	JICA環境技術研修員　来校
	18日	第3回「親子で作ろうベジタブル!」イベント開催
11月	3日	「みんなでecoクッキング!」イベント開催
	22日	第4回「親子で作ろうベジタブル!」イベント開催
		地域活性化論　学外実習

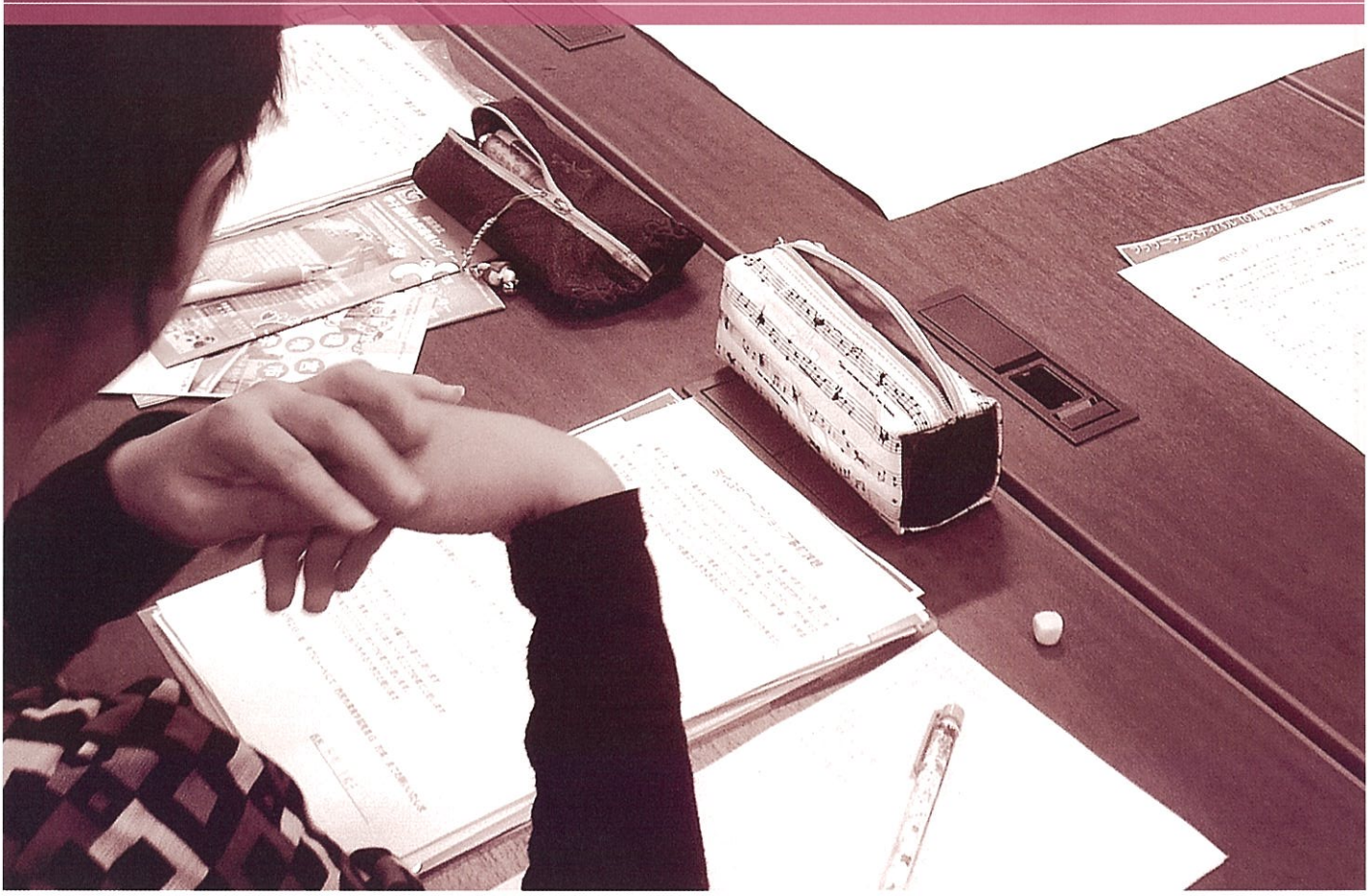
12月	11日	反省会
	16日	「都市近郊における農地の役割と持続可能な地域づくりを考える国際シンポジウム」参加
1月	12日～13日	平成20年度 大学教育改革プログラム合同フォーラム
2月	28日	平成20年度 西宮市環境まちづくりフォーラム　参加
3月	6日	華南師範大学 ESD訪日ツアー団　来校
	8日～14日	モントレー市・バーリントン市視察

2009年度

4月	10日	プレゼンテーション演習　講義開始
5月	14日	地域活性化総合実習　第1回中間発表
6月	11日	地域活性化総合実習　第2回中間発表
7月	2日	地域活性化総合実習　第3回中間発表
	10日	プレゼンテーション演習「2008年度 活動報告会」リハーサル
	18日	プレゼンテーション演習「2008年度 活動報告会」開催
8月	3日	「わくわく!ぶんぶん!はちみつ採集」イベント開催
	6日～12日	バーリントン市視察
9月	5日	第1回「親子で収穫体験♪」イベント開催
	21日～22日	「自然と考えよう!」イベント開催
	23日	第2回「親子で収穫体験♪」イベント開催
10月	14日	JICA環境技術研修員　来校
	31日	第3回「親子で収穫体験♪」イベント開催
		地域活性化論　学外実習
12月	3日	地域活性化総合実習　第4回中間発表
	5日	持続可能な社会のための環境学生会議第2回　参加
		第4回「親子で収穫体験♪」イベント開催
1月	7日～8日	平成21年度 大学教育改革プログラム合同フォーラム
2月	27日	平成21年度 西宮市環境まちづくりフォーラム　参加

2年次プログラム

「地域活性化論」



「地域活性化論」概要

この現代GPプログラムは「地域創りリーダー養成コース」とも呼ばれている。このコースに取り組む学生は、まずこの「地域活性化論」で自分たちの住む地域にどんな問題があるのかを知る必要がある。高齢化社会にともなう福祉の問題、少子化社会の中での子育ての問題、地球温暖化などの環境問題、健康と医療の問題、すべてに地域の「現場」があり、そこでの課題を知らずして地域社会で活動することはできない。この科目は、地域の問題についてさまざま視点から学び、それを3年次の「地域活性化総合実習」での体験学習プログラムの企画を発想するための基礎としてもらうことを狙いとしている。

授業では、毎回、行政、めぐみ会、NPO、企業などさまざまな組織の中で地域の活動を推進されている方をゲスト講師として招き、活動内容、現場の課題、市民活動の難しさや楽しさなどを語ってもらっている。例えば、環境学習都市宣言をしている西宮市からは、市役所の環境学習推進グループの佐々木秀樹係長、的場直樹主事を招き、西宮市の環境学習活動の取組を紹介していただいたり、本学の「めぐみ会」の石割初子会長には、同窓会組織を超えた公益法人としてのめぐみ会の歴史や活動を伺ったりしている。

ゲスト講師の講義からいろいろな分野の問題点を理解し、地域のために何ができるかを考えるための基礎的な知識、それも書籍やニュースから得た知識ではなく現場の生きた知識を学びとってもらいたいと思う。地域で活躍する先輩でもある講師の方々の生き方をも学ぶことは、学生にとって貴重な体験となるはずであり、長い目で見れば1つのキャリア教育にもなりうるのではないだろうか。

15回の授業のうち、1度は土曜日に「学外実習」を行い、案内役の講師をNPO法人LEAFの小川雅由事務局長にお願いして、西宮市甲山農地や2カ所の西宮市立自然環境センターでの見学を実施している。これは、実際に西宮市の環境の現場を知ることと、体験学習プログラムの候補地の下見を兼ねている。

■2007年度 後期「地域活性化論」

講義日	講義内容	講師名	所属
10.9	「市民・事業者・行政の参画と協働による 環境学習を通じた持続可能なまちづくり ～“人を育み 人が育む 環境学習都市にしのみや”の実践紹介～」	大成 広毅 氏	西宮市 環境局 環境緑化部 環境都市推進グループ 主事
10.16	「身近な地域福祉を考えよう ～ 住民福祉活動の重要性について ～」	植村 弘巳 氏	社会福祉法人 西宮市社会福祉協議会 地域福祉課 課長
10.30	「地域を支える福祉活動とは」	筒井 恵子 氏	社会福祉法人 鴻仁福祉会 特別養護老人ホーム 愛光苑 施設長
11.3	学外実習	小川 雅由 氏	NPO 法人 こども環境活動支援協会 事務局長
11.6	「『子育てするなら西宮』を支える施策 ～西宮市次世代育成支援行動計画～」	杉田 水脈 氏	西宮市 健康福祉局 福祉部 子育て支援グループ 係長
11.13	「ライフスタイルの変化と新しい地域づくり・まちづくり」	狭間 恵三子 氏	サントリー次世代研究所
11.20	「地域の一人ひとりの体験は宝物！ 体験を伝え、人をつなぎ、行動に繋げる地域情報紙のまちづくり」	武地 秀実 氏	有限会社とも も 代表取締役
11.27	「服とコミュニケーション ～「服育」から広がる繋がり～」	有吉 直美 氏	株式会社チクマ キャンパス事業部 企画課
12.4	「適応教室 Palたからづかの実際」	小山 智朗 氏	宝塚市立教育総合センター教育支援課 教育相談員
12.11	「めぐみ会の歩み ―「めぐみ」を覚えて115年―」	石割 初子 氏 山田 賀世子 氏	社団法人 神戸女学院 教育文化振興 めぐみ会 会長 社会活動ネットワーク委員会 委員長
12.18	「テクノシップの活動を通して」	児嶋 みち子 氏	NPO 法人テクノシップ 理事長

■2008年度 後期「地域活性化論」

講義日	講義内容	講師名	所属
10.7	「市民・事業者・行政の参画と協働による 環境学習を通じた持続可能なまちづくり ～“人を育み 人が育む 環境学習都市にしのみや”の実践紹介～」	佐々木 秀樹 氏 的場 直樹 氏	西宮市 環境局 環境緑化部 環境学習推進グループ 係長 環境学習推進グループ 主事
10.14	「身近な地域福祉を考えよう ～ 住民福祉活動の重要性について ～」	植村 弘巳 氏	社会福祉法人 西宮市社会福祉協議会 地域福祉課 課長
10.21	「地域を支える福祉活動とは」	筒井 恵子 氏	社会福祉法人 鴻仁福祉会 特別養護老人ホーム 愛光苑 施設長
10.28	「『子育てするなら西宮』を支える施策 ～西宮市次世代育成支援行動計画～」	杉田 水脈 氏	西宮市 健康福祉局 こども部 子育て企画・育成グループ 係長
11.4	「子どもと家族に寄り添うために ～社会的養育の役割を考える～」	側垣 一也 氏	社会福祉法人三光事業団 常務理事 児童養護施設三光塾 総合施設長 ひかり保育園 園長
11.11	「サントリーの CSR」	内貴 研二 氏	サントリー株式会社 CSR・コミュニケーション本部 部長
11.22	学外実習	小川 雅由 氏	NPO 法人 こども環境活動支援協会 事務局長
11.25	「テクノシップの活動を通して」	児嶋 みち子 氏	NPO 法人テクノシップ 理事長
12.2	「服とコミュニケーション ～「服育」から広がる繋がり～」	有吉 直美 氏	株式会社チクマ キャンパス事業部 企画課
12.9	「公益法人として「めぐみ」に応えることを目指して」	石割 初子 氏 浦邊 純子 氏	社団法人 神戸女学院 教育文化振興 めぐみ会 会長 社会活動ネットワーク委員会 委員長
12.16	「適応教室 Pal たからづかの取り組み」	織田 泰史 氏 山本 佐登子 氏	宝塚市立教育総合センター教育支援課 教育相談員 宝塚市適応教室「Pal たからづか」指導員

■2009年度 後期「地域活性化論」

講義日	講義内容	講師名	所属
10.6	「市民・事業者・行政の参画と協働による 環境学習を通じた持続可能なまちづくり ～“人を育み 人が育む 環境学習都市にしのみや”の実践紹介～」	佐々木 秀樹 氏 的場 直樹 氏	西宮市 環境局 環境緑化部 環境学習推進グループ 係長 環境学習推進グループ 主事
10.20	「身近な地域福祉を考えよう ～ 住民福祉活動の重要性について ～」	植村 弘巳 氏	社会福祉法人 西宮市社会福祉協議会 地域福祉課 課長
10.27	「地域を支える福祉活動とは」	筒井 恵子 氏	社会福祉法人 鴻仁福祉会 特別養護老人ホーム 愛光苑 施設長
10.31	学外実習	小川 雅由 氏	NPO 法人 こども環境活動支援協会 事務局長
11.10	「西宮市の子育て支援 ～子育てするなら西宮～」	杉田 水脈 氏	西宮市 健康福祉局 こども部 子育て企画・育成グループ 係長
11.17	「適応教室 Pal たからづかの取り組み」	織田 泰史 氏 山本 佐登子 氏	宝塚市立教育総合センター教育支援課 教育相談員 宝塚市適応教室「Pal たからづか」指導員
11.24	「公益法人として「めぐみ」に応えることを目指して」	石割 初子 氏 杉本 雅代 氏	社団法人 神戸女学院 教育文化振興 めぐみ会 会長 社会活動ネットワーク委員会 委員長
12.1	「服とコミュニケーション ～「服育」から広がる繋がり～」	有吉 直美 氏	株式会社チクマ キャンパス事業部 企画課
12.8	「NPO 法人シニア自然大学校の取り組み」	齊藤 隆 氏	NPO 法人シニア自然大学校 理事長
	「川がきクラブの取り組み」	浅倉 景子 氏	川がきクラブ
12.15	「テクノシップの活動を通して」	児嶋 みち子 氏	NPO 法人テクノシップ 理事長
12.22	「森と海と川を守るための仕事 ～ OG が語る市民活動～」	林 裕美子 氏	「てるはの森の会」会員 「ひむかの砂浜復元ネットワーク」代表

「市民・事業者・行政の参画と協働による環境学習を通じた持続可能なまちづくり ～“人を育み 人が育む 環境学習都市にしのみや”の実践紹介～」

平成19年10月9日　西宮市 環境局 環境緑化部 環境都市推進グループ 主事　大成 広毅 氏

平成20年10月7日／平成21年10月6日　西宮市 環境局 環境緑化部 環境学習推進グループ 係長　佐々木 秀樹 氏／主事　的場 直樹 氏

現在、地球は深刻な地球温暖化の危機に瀕している。この温暖化の被害を食い止めようと、世界、国レベルでさまざまな取り組みがなされている。こうしたなか西宮市でも積極的に対策に乗りだしている。

西宮市は平成13年に環境マネジメントシステム「ISO14001認証」を取得し、平成18年からは西宮独自のシステムを運用している。また、平成15年に市役所庁内の温室効果ガス削減を明記した「西宮市地球温暖化対策実行計画」が策定された。平成22年には、市民・事業者・行政といった西宮市域全域で温室効果ガス削減を目指す計画が策定される予定である。

平成15年、西宮市は「環境学習都市宣言」をおこなった。環境問題は人と人の関わりのなかで政治や経済がこじれた結果生まれるとの考え方から、人と人が学び合うことが重要であるとして「学習」という文字を入れた。

西宮市では、環境学習への個人の取り組みとして、地球ウォッチングクラブ（EWC事業）を進めている。これは環境庁のモデル事業にもなったもので、子どもたちが地域でさまざまなエコ活動を進める事業である。子どものエコ活動に大人がスタンプを押すことでかかわり合い、子どもと大人が互いに学び合うことができる。

地域を対象とした取り組みとして進められているのがエココミュニティ会議である。エココミュニティ会議では、マイバッグ運動、ごみ減量運動など、地域住民が地区ごとに特色のある環境活動に取り組んでいる。このエココミュニティ会議は地域の団体や、環境衛生協議会、社会福祉協議会、自治会といった横のつながりを生み、さらに世代間のつながりを生むといった役割も果たしている。

地球規模で起きている温暖化の流れを食い止めるのは容易ではない。一人の小さな力で食い止めることは困難である。しかし、世界レベルの大きな取り組みも、私たち一人一人の気付きと行動がなければ実現は不可能である。また、一人一人の力は小さくとも、地域グループであればできる取り組みもある。これからも市としてできる環境問題に積極的に取り組んでいきたい。

「身近な地域福祉を考えよう ～住民福祉活動の重要性について～」

平成19年10月16日／平成20年10月14日／平成21年10月20日　社会福祉法人 西宮市社会福祉協議会 地域福祉課 課長　植村 弘巳 氏

戦後すぐ、貧困対策として始まった福祉政策は、1998年の社会福祉基礎構造改革により、高齢者介護、障害者福祉へと大きく方向転換した。2000年に始まった介護保険制度や「障害者自立支援法」といった制度は、すべてこの社会福祉基礎構造改革に基づいてつくられている。長きにわたり続いてきた福祉事業は大きな改革をとげたといえよう。

この改革によって、行政と利用者の立ち場が平等になった。行政からの「措置」であった福祉は、利用者が主体的にサービスを選ぶことができるようになった。また福祉サービスを提供する事業者が増え、さまざまなサービスが提供されるようになった。

福祉の対象者も時代の変化と共に変わってきた。高齢者に加え、心身障害者、社会的弱者といった方が増えている。また、問題も非常に複雑かつ多様化している。ホームレス問題、社会的孤立、そこから起こる孤独死、暴力、自殺、若年層の不安問題。こうした要素が複雑に絡み合っているのである。

このように福祉の対象者や問題が多様化するなか、行政主導の福祉には限界が見え始めた。そこで、いま盛んに言われているのが「地域福祉」という言葉である。地域福祉とは、「誰もが」「住み慣れた地域で」「自分らしく」「安心して」「心豊かに」「暮らせるまちづくり」を目指すものである。年齢や障害の有無に関係なく、住み慣れた場所で当たり前に生活できる社会。その社会の実現を地域の人々が支え合うことによって実現していこうとするものである。そして、その地域福祉の舵取りの役目を担っているのが社会福祉協議会である。現在、西宮市内には34の社会福祉協議会があり、地区ごとにさまざまな活動が行われている。独居高齢者の昼食会から学童保育など、子どもから高齢者までを対象としたさまざまな取り組みがボランティア中心に進められている。

地域福祉は支え合いによって実現可能となる。あるときは助けられ、あるときは自分がボランティアする側に回る。一人一人の小さな力が地域の大きな力となって地域福祉を実現していくのである。

「地域を支える福祉活動とは」

平成19年10月30日／平成20年10月21日／平成21年10月27日

社会福祉法人 鴻仁福祉会 特別養護老人ホーム 愛光苑
施設長　筒井 恵子 氏

日本は現在、人口が減少し、少子高齢化が非常に進んでいる。今後、いわゆる団塊の世代が高齢者となり、高齢者の数はさらに増加していくことが見込まれている。少子高齢化が進むということは、若者が高齢者を支えるといったこれまでの制度の存続が難しくなるということである。このように人口構造や世帯構造が変化していくなかで、今後、どのように高齢化社会を支え、安心、安全ネットワークをつくり上げていくかということが大きな課題となっている。

平成12年、介護保険制度が制定された。その背景には、家族だけで高齢者をささえていくことが難しくなったことがある。現在は介護保険制度のもと、社会全体で高齢者をささえていくかたちとなっている。

住み慣れたところに住み続けたいという希望を持つ高齢者の方には、デイサービスやショートステイ、訪問介護サービス等で、食事、入浴、排泄の介助から、掃除、洗濯、調理まで希望に応じたサービスを受けることができる。また、自立した生活が困難になった場合には、施設に入所し、生活のサポートを受けることもできる。特別養護老人ホーム愛光苑は、常時介護が必要で、家庭での生活が困難な方々に対して日常生活を支援し自立を援助している。また、「ついのすみか」としての役割もはたしている。人間としての尊厳を大切にし、人間らしく最期を迎えられるようにをモットーとし、みとりもおこなっている。

しかし、今後も増え続ける高齢者を事業者だけで支えていくことは難しい。地域全体での支えが必要不可欠である。隣に誰が住んでいるのかもわからないという状況を変え、地域全体で助け合う力を高める必要がある。

地域包括支援センターでは総合的な高齢者の相談を受け付けるほか、地域一体となって包括的、継続的なマネジメントができるように、民生委員や町内会長などと連絡を取り、調整しながら地域でケアできる体制づくりを目指している。地域ケアには地域住民の理解と協力が必要である。ボランティアなど自分にできることを見つけ、積極的に加わってほしい。

「『子育てするなら西宮』を支える施策　～西宮市次世代育成支援行動計画～」（平成19年・20年）
「西宮市の子育て支援　～子育てするなら西宮～」（平成21年）

平成19年11月6日／平成20年10月28日／平成21年11月10日

西宮市 健康福祉局 こども部 子育て企画・育成グループ
係長　杉田 水脈 氏

西宮市は、大阪市と神戸市のちょうど中間に位置する山と海に囲まれた自然環境に恵まれたまちである。市内を東西に3本の鉄道が走る交通の便のよい住宅都市であり、また、10の大学・短大を抱える文化教育都市でもある。

昭和38年、西宮市は文教住宅都市宣言をおこない、美しい住環境を守るという理念を明確に打ち出した。その背景には、西宮浜コンビナート建設に対する市民の反対運動がある。自然保護よりも産業の発展に重点が置かれていた当時、西宮市は工業化よりも自然との調和、共生を選択したのである。

西宮は、阪神・淡路大震災によって甚大な被害を被り、一時38万6千人にまで人口が減少した。その後、震災で倒壊した住宅の跡地にマンションが建ち、ファミリー層が転入してきたことにより、西宮は一挙に子育てのまちへと変わった。日本の少子高齢化とは反対に西宮市の子どもの数は増え続けている。

西宮市は、「子育てするなら西宮」をキャッチフレーズとし、「子育ての不安が解消され、楽しさを持続できるまちへ」を方針に、「安心して妊娠・出産を迎えられる環境づくり」を目標に施策を進めている。

これまでの子育て施策は、保育所の整備など、母親が出産後も働くことのできる環境を整えることが主であったが、むしろ働いていない母親の悩みのほうが深刻であることがわかってきた。また、アンケート調査結果によると、子育てに対しての不安や負担を感じると回答した人が実に5割を超える。こうしたことが子どもへの虐待や引きこもりにつながりかねないことから、西宮市では赤ちゃんの個別家庭訪問の実施や、母親交流会を実施するなど、不安、負担軽減のための対策に乗りだした。また、夫の子育てへの協力を啓発するなど、さまざまな方面から子育て中の方々を支援している。

少子化が進む昨今、出生率向上のためにさまざまな施策が取り組まれているが、ただ単に子どもの数が増えればいいというものではない。幸せな生活を送ることができる子どもが増えるよう力を注いでいかねばならないと考えている。

「ライフスタイルの変化と新しい地域づくり・まちづくり」

平成19年11月13日　　サントリー次世代研究所　狭間 惠三子 氏

戦前生まれの人は男女の役割を守り家族のために犠牲になることをいとわなかったが、戦後は個人の自由が認められ、社会の価値観に縛られることなく自分の人生を選択できるようになった。ではその子ども世代である今の若者はどうかというと、個食などが問題になっているように自由を通り越して孤立してしまい、その弊害が顕著になってきている。最も大きな問題は、情報化社会で育ったために、どんなことでもマニュアルで解決しようとするところにある。両親や祖父母に直接教わらなくてもパソコンのキーボードを叩けば簡単に情報を入手できるが、自分が積み上げたものではないので応用が利かない。プロセスを省略すると実体験の豊かさを身に付けることができなくなる。

次世代研究所では、このような問題を抱える子どもや若者を育む社会環境を、どのように整えていけばよいかを模索している。当研究所の「共立のデザイン研究会」は、学者、行政、NPOの協力を得て、地域活性化のための活動について調査し、議論を重ねてきた。行政が一方的にサービスを提供し、市民がそれを受けるということでは、豊かな社会を建設することはできない。多くの事例を集め、成功例の共通項を分析した結果、市民、行政、企業などが協力してうまくいっているところでは、活動の場が地域の人々の居場所となっており、メンバー同士が対等で信頼関係が生まれているということがわかってきた。一部の人に犠牲を強いるのではなく、各メンバーが自分にできることを考え、力を合わせて実績を積み上げるうちに、誰かの役に立つことに喜びを覚えるようになる。とりわけ子どもや若者がこうした喜びを知り、積極的に地域社会の活動に参加して経験を通して学ぶことができれば、地域づくりが次世代育成に一役買うことになるだろう。実は奉仕活動を通して人とつながることを求めている若者は少なくない。無理なく続けられる活動の形態とはどのようなものかを調べることも今後の課題だ。

「地域の一人ひとりの体験は宝物!
体験を伝え、人をつなぎ、行動に繋げる地域情報紙のまちづくり」

平成19年11月20日　　有限会社ともも 代表取締役　武地 秀実 氏

『ともも』は2001年に発刊された地域情報紙である。広告を主に掲載している地域情報紙が多い中、『ともも』にはあまり広告を載せていない。編集長である私の独断で、私が取材したもの、言いたいことを中心とした読み物を主体としている。例えば、「ともも人物図」というコーナーで取りあげる人は有名な人であるかどうかは関係がない。この地域にお住まいの方で、私の目から見て素敵だな、この人の話を聞きたいと感じた方に登場いただいている。これまでにも、芦屋浜でリンゴをつくっている90歳のおじいさん、西宮浜の菊池貝類館の91歳の菊池館長といった方々に登場いただいた。また地域のお店情報のコーナーや、昔の作家から現代の作家までを取りあげている文学散歩特集もある。

現在の私の原点になっているのが、震災当時につくった被災者220人の証言集『街がかわった心がかわった』である。震災後1カ月後から1年間ずっと歩いて220人の方々にインタビューしてつくり上げたものである。その後、5冊の本を発行し、現在に至っている。

私はまちづくりにも携わっている。阪神・淡路大震災で崩れた西宮中央商店街は、えべっさんの門前町である。震災前は肩と肩とがすれるほどたくさんの人が訪れる商店街だったのだが、いまは閑散としていてほとんど人が通らない。非常に残念である。西宮の中心地である門前町がこれではいけないということで、盛り上げようとあれこれ手立てを講じている。

『ともも』をつくり、まちづくりに参加する中で常に感じていることは、人は人につながることで存在意義があるということである。私の根底にあるのは、人と人とをつなぎたいという思いである。私にとって『ともも』は、「つながり」を感じるためにつくるものであり、『ともも』によって「つながり」を表現している。自己表現の手段でもあるわけである。私にとってまちづくりは『ともも』と同様、つながりを実現する方法の一つである。私はつながりの末、出会った人たちに支えられて、いまこうして仕事ができているということを実感している。

「服とコミュニケーション ～「服育」から広がる繋がり～」

平成19年11月27日／平成20年12月2日／平成21年12月1日　　株式会社チクマ キャンパス事業部 企画課　有吉 直美 氏

繊維業界の環境問題への取り組みは、残念ながら他業界に比べて遅れている。業界特有の問題も絡み合い、なかなか進まないのが現状である。繊維リサイクル法もまだ制定されていない。そんななか株式会社チクマは、繊維業界では環境問題に対して先進的な取り組みを進めてきた。着終わった服やユニフォームのリサイクルシステムを確立し、ISO14001、環境マネジメントシステムの認証を取得した。また、どこよりも早く産廃処理にかかわる広域認定制度を取得した。

現在、チクマでは「服育」という言葉をキーワードに環境への取り組みを進めている。服育とは、服を通して世の中のことを考えていこうとするものである。服は第二の皮膚といわれ、人間の健康や皮膚に与える影響も多い。そして、私たちと外界を隔てる部分であると同時に外へのアピール方法という面も持っている。服は、相手に与える印象を大きく変える。服の選び方ひとつでいろいろな効果を持たせることができるのである。

また、服は地球環境問題と密接なつながりを持っている。例えば、綿の栽培には非常に多くの農薬を使うため、土壌汚染が問題となる。栽培にはエネルギーも使う。水も大気も汚染しているかもしれない。化学繊維は、石油を原料とするため資源問題に関係する。服を燃やせば大気汚染につながる。いま自分の着ているこの服が環境問題とかかわりを持っていて、遠くで起きている砂漠化とつながっているかもしれない。そう考えると、地球に起きているさまざまな問題が身近なことに感じることができるだろう。そういった気付きを人々に伝え、環境問題への理解を深めていきたいと考えている。

服は人と人とのコミュニケーションツールでもあり、文化や歴史を伝えるものである。そして、人と自然、人と歴史といったつながりや、出会いをつくりだすクリエイトな部分も持っている。このさまざまな可能性のある服を、単なる着るものとしてだけでなく、さまざまなものとつながることのできるツールといったプラスアルファの視点で見てほしいと思っている。

「適応教室 Palたからづかの実際」（平成19年）
「適応教室 Palたからづかの取り組み」（平成20年・21年）

平成19年12月4日　　宝塚市立教育総合センター教育支援課 教育相談員　小山 智朗 氏

平成20年12月16日／平成21年11月17日　　宝塚市立教育総合センター教育支援課 教育相談員　織田 泰史 氏

宝塚市適応教室「Palたからづか」指導員　山本 佐登子 氏

病気など、特別な事情がないのに学校に行くことのできない子どもが増えている。宝塚市の不登校の中学生は140名、全生徒の約2.8パーセントにあたる。不登校の理由は、小学生はいじめなどの外部要因が多く、中学生では人間関係や学業不振など、自分自身の内面に係わることが大きく影響している。行政はこうした不登校生のためにさまざまな取り組みを行っているが、その一つに適応教室がある。適応教室とは、不登校児童、生徒の学校復帰を支援し、社会的自立を促すよう努めるところである。

適応教室Palたからづかは、常勤、非常勤スタッフ、そしてPalふれんどという大学生ボランティアの総勢20名のスタッフによって運営されている。不登校の子どもは対人関係の弱さを持っている場合が多い。また、自己評価が非常に低い、または異様に高い子どもが多く、そのため、本来発揮できるはずの実力を発揮できていない場合が多い。こうしたことから、Palでは対人関係のスキルを身につけることと、自己評価を高めることを目標として指導を行っている。

現在、Palに正式に入級している子どもは24名。ときには子どもの数よりも大人のスタッフの数が多いときもある。大人は子どもの良き見本の役目をはたす。スタッフやPalふれんど同士が仲良くする姿や人を思いやる様子を見ることは、子どもたちにとって人間関係の勉強になる。また、気持ちの整理の仕方や気分転換の方法なども大人から学び取る。大人の目が多くあれば、たとえけんかが起きたとしても、事態の深刻化は避けられる。また一人一人の問題点がよくわかるため、指導員がその子どもに応じた適切な対応をすることができる。しかるときはしかり、ほめるときはほめる。そうしたきめ細かい指導によって、自分の嫌なところと向かい、それを乗り越えることができるのである。

Palは決して理想郷ではない。トラブルも多い。しかし、そのトラブルこそが子どもたちの成長をうながすものだと考えている。Palには人とのつながり、そして、自信をなくした子どもたちの居場所がある。それが回復に大きな手助けとなる。

「めぐみ会の歩み　―「めぐみ」を覚えて115年―」（平成19年）
「公益法人として「めぐみ」に応えることを目指して」（平成20年・21年）

■めぐみ会について

平成19年12月11日／平成20年12月9日／平成21年11月24日　　社団法人 神戸女学院 教育文化振興 めぐみ会 会長　石割 初子 氏

1892年、第一回卒業生によって神戸女学院同窓会が設立された。こんにちの社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会の前身である。卒業して数年、27歳前後の若い女性たちが立ち上げた同窓会であったが、設立当初から後輩に対する奨学金制度を設けるなど、本学の建学の精神である「愛神愛隣」の精神を豊かに受け継いだ同窓会だったことが当時の文献からうかがえる。

神戸女学院同窓会は、1929年、社団法人として認可され、2000年、社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会と名称を変更した。名称変更は、当時の文部省の指導を受けてのものであったが、同窓会というよりは、神戸女学院の教育を振興することを通して社会に役立つ活動を進めることに主眼を置いていたため、名称変更は会の活動を正しく言い表すこととなったといえる。

「めぐみ」という言葉は、キリスト教の教えに由来する。私たちには命が与えられ、毎日生かされている。これは大きなめぐみである。そうした、あらゆる神のめぐみに対して感謝をあらわすとき、私たちは、常に神様のめぐみを覚えて行動を起こしているのだという意味が込められている。めぐみ会はこれまで愛校バザーやめぐみ会賞や奨学金の授与など、神戸女学院を支援することによって社会に対して貢献してきた。これからも社会への貢献につながるはたらきを続けていきたいと考えている。

■めぐみ会社会活動ネットワーク委員会について

平成19年12月11日　　めぐみ会 社会活動ネットワーク委員会 委員長　山田 賀世子 氏
平成20年12月9日　　めぐみ会 社会活動ネットワーク委員会 委員長　浦邊 純子 氏
平成21年11月24日　　めぐみ会 社会活動ネットワーク委員会 委員長　杉本 雅代 氏

めぐみ会社会活動ネットワーク委員会は、愛神愛隣の精神を持ってネットワークをつくり、神戸女学院卒業生であるめぐみ会員が手助けを必要とするとき、また、交流や情報を求めているときに役立つことを目的としてつくられた組織である。語学や楽器の演奏技術などを教える活動提供者と利用希望者とのマッチングをするほか、社会活動グループの立ち上げに関しての相談も受け付けている。神戸女学院の卒業生には、人の役に立ちたいと行動を起こそうとしている人も多い。めぐみ会社会活動ネットワーク委員会では、そうした方々の活動を続けて応援していきたい。

「テクノシップの活動を通して」

平成19年12月18日／平成20年11月25日／平成21年12月15日　　NPO法人テクノシップ 理事長　児嶋 みち子 氏

平成5年、港養護学校初代校長だった冨岡達夫氏は、発達障害児の社会的自立にパソコン操作の技能習得が役立つと気付き、当時小学校通級学級に通っていた児童の母親3名に呼びかけてテクノシップを創立した。明治学院大学心理学科の助教授だった金子健氏の協力を得て、その年の夏から研究室で3人の子どもに対してパソコンを利用した教育訓練を試行。翌年4月には白金台にあるビルの一室を借りて本格的な活動を開始し、平成14年1月にNPO法人の認証を受けた。テクノシップという名前には、パソコンなどのテクノロジーを使って、共に仲良く社会という荒波に漕ぎ出そうという冨岡校長の願いがこめられている。発達障害とは脳の高次機能の問題が18歳までにあらわれたものを指し、大きく「知的発達障害」「広汎性発達障害」「注意欠陥多動性障害」「発達の部分的障害」の4つに分類される。発達障害児・者は、学習や人付き合いに困難をきたし周囲を困惑させることが多いが、適切な対応があれば社会に適応できる。テクノシップでは、発達障害児・者の認知発達に焦点をあて、一人一人に合わせて発達を促す指導をするとともに、生涯にわたってきめ細やかな対応を必要とする彼らのために、地域社会の理解と協力を求める活動をしてきた。平成15年度と16年度には港区NPO活動助成事業に選ばれ、区との協働事業として「ボランティア養成講座」を開催した。平成16年に私、児嶋みち子が2代目理事長に就任し、18年からは港区の補助金を得て発達障害児・者の就労支援、ソーシャルスキルトレーニング、教育支援、余暇活動支援などの活動を、地域デイサービス事業としておこなっている。テクノシップの生徒も決して受身ではなく、積極的にボランティア活動に参加する。例えば港区には地域住民が公共スペースを養子のように愛情をかけて面倒をみるアドプト事業という制度があるが、公園の花壇の一つを生徒が管理している。活動の真の目標は、障害の有無にかかわらず、みんなが共に地域のなかで生き生きと暮らせる社会をつくることにある。

「子どもと家族に寄り添うために　～社会的養育の役割を考える～」

平成20年11月4日

社会福祉法人三光事業団 常務理事
児童養護施設三光塾 総合施設長
ひかり保育園 園長　側垣 一也 氏

児童養護施設三光塾は、1946年4月、戦争で親を失った子どもたちを保護して育てることを目的として設立された。現在、2歳から18歳までの36名の子どもが入所している。

入所理由は時代を経るごとに変化してきた。設立当初は戦争孤児、貧困、親の行方不明など、社会の混乱のなかで親のいなくなった子どもが中心であったが、1950年代に入ると死別、離婚、病気、貧困、犯罪といった理由が多くなった。1970年代は、両親の不和、長期療養、離婚、1980年代に入ると不登校や情緒障害、家庭内暴力や犯罪といった子ども自身が問題を持っているケースが多くなった。現在は、虐待を受けた子どもたちが非常に増えている。虐待件数は増加の一途をたどっている。深刻な虐待として報告された件数を見てみると、1995年は2千722人だったのが、2006年には3万7千656件と急激に増加している。現在、全国の児童養護施設で生活する3万数千人の子どもたちの62.1パーセントが虐待を入所理由としている。主な虐待者は、実の母親が63パーセント。次いで実父、継父、継母となっている。虐待の種類としては、身体的虐待、育児放棄、心理的虐待、性的虐待である。

心理的虐待を長く受け続けると、成長ホルモンの分泌異常を起こし、年齢相応に発達しないといった愛情遮断症候群を引き起こす。また、虐待は子どもに常に不安や抑鬱をもたらす。さらに、怒りの感情をコントロールできなくなることもある。

児童養護施設は、虐待などで心に深い傷を負った子どもたちを預かり、安全で安心して暮らすことができる環境を提供している。また、子ども自身が自分はここで守られているという感覚を持てる場所にしたいと考えている。

親はなぜ虐待に走るのだろう。虐待を防ぐことはできないのか。虐待に走る親は概して孤独である。孤独が親を虐待に向かわせる。親は虐待に至る前に助けを求め、サインを出している。そのサインに早く気が付いて援助するための社会的なシステムが必要である。子育ては個人的な責任と考えず、社会的な養育、つまり社会の子どもであるという考え方が必要だと考えている。

「サントリーのCSR」

平成20年11月11日

サントリー株式会社 CSR・コミュニケーション本部 部長　内貴 研二 氏

企業は利潤を追求していればよいと考えられていたのは昔のことで、特に20年ほど前から企業に対しCSR（企業の社会的責任）を果たすべきだという社会の要請が強くなった。企業にとって最も重要なCSRは商品の品質を保証することだが、地球環境の保全、地域社会発展への寄与、法令遵守、安定した雇用など、企業が義務としてなすべきことはすべてCSRだと考えてよい。ただし、それは一方的な寄付やボランティアではない。企業はCSR活動を通して社会からの信頼を得ることで、経営に利することを期待している。

実は、サントリーにとってこのような考え方はなじみ深いものだ。1899年創業以来、当社は利益を社会、顧客サービス、事業拡大の3つに分配するという「利益三分主義」を経営哲学の柱としてきた。企業は社会に支えられているのだから、利益を社会に還元するのは当然のことだという信念を持って、創業者鳥井信治郎は社会貢献に尽力した。実際に大正年間に創設した社会福祉法人は現在も老人ホームを運営しているし、太平洋戦争後は学校や音楽ホール、美術館なども建設し、教育支援、文化振興に力を入れてきた。だが、社会状況の変化に伴い社会が必要とする活動も変わってきたため、新たな方針を打ち出す必要があると考え、2005年にはCSR推進部をつくってサントリーらしい活動の展開を目指した。当社の企業理念は「人と自然と響きあう」だ。この理念を実現するために、具体的に何をすればよいかと問い続けた結果、酒類やソフトドリンクを主力商品とするサントリーにとって最も大事なものは「水」であることがわかった。「水と生きる」という企業メッセージを掲げ、地球上での水の循環を支えるために、水源涵養活動として工場の水源となるエリアにある森を整備、保全。工場では水のReduce Reuse Recycleを徹底し、排水をきれいにして自然に返す工夫をしている。地道な努力が認められ、2008年には環境ブランド調査で第2位を獲得した。これからも社会のなかで、なくてはならない「水」のような存在となるべく、質にこだわる経営を心掛けていきたい。

「NPO法人シニア自然大学校の取り組み」

平成21年12月8日　　NPO法人シニア自然大学校 理事長　齊藤 隆 氏

NPO法人シニア自然大学校は、「平和で豊かな社会の実現をめざし、自然環境教育と社会文化活動を積極的におこなうこと」「人と自然を大切に」「仲間と行動を起こす」ことをミッション（使命）として活動している。現在の会員数は1千750名。年間活動回数は約3千回を数える。主な活動内容は、自然環境に関する講座の開講や、高槻、武庫などの支部活動、自然に関する調査研究活動などである。奈良の支部では国有林や里山の整備、生駒の支部では棚田の整備、水田の復活支援といった地域に密着した活動をしている。地域活動推進のポイントは、それが地域にとって本当に役立つ活動であるのか、地域に受け入れられることなのかということである。地域の人々の理解と、行政との強い関わりが事業成功のカギとなる。

また、子どもたちの健全なる精神と身体づくりにも力を入れている。ジュニア自然大学では、一年を通して農業体験や自然観察会などの活動を行い、若々しい心、情感ゆたかで自然に感動する心を育みたいと考えている。

NPO運営には、強いリーダーシップとコミュニケーション力が必要である。リーダーは固い信念のもとに行動し、地域の方々と十分に意思疎通を図ることが求められる。

「川がきクラブの取り組み」

平成21年12月8日　　川がきクラブ　浅倉 景子 氏

川がきクラブは、平成13年、仁川の自然をこよなく愛する人々が発起人となって発足した。現在の会員数は150名。「自然を愛する人なら誰でもみんなで山や川で楽しく遊ぼう、自然を大切にしよう」をモットーに活動している。

川がきクラブのフィールドは甲山森林公園である。身近にある自然に親しみ、親子で気持ちの良い空気を一緒に楽しみ、発見の楽しさを共有することが大切だと考えている。自然工作教室や大人の自然研究も行っている。

最近の子どもたちは危険から過剰に守られすぎている。大人が先回りして危険を回避するのではなく、子どもたち自身が危険を認識し、予知する力を付けなければならない。そうした力を自然での体験を通して身につけてほしいと考えている。

「森と海と川を守るための仕事 ～OGが語る市民活動～」

平成21年12月22日　　「てるはの森の会」会員・「ひむかの砂浜復元ネットワーク」代表　林 裕美子 氏

照葉樹林は比較的温暖な地域に生える常緑の広葉樹である。戦後の拡大造林政策のもと多くの地域で伐採が進んだが、その後、保護活動が始まった。私の住む宮崎県には伐採をまぬがれた大きな照葉樹林が残る。

近年、日本の多くの川では水がにごり、水量が減っている。私は宮崎県にある綾南川の水生昆虫の調査をするうちに、照葉樹林は保水力に優れ、渇水期にも安定した流量があることをつきとめた。植林地を照葉樹林に転換していくことにより水の質がよくなり、水量が安定する。こうした情報を人々に示すならば照葉樹林復元事業に対する関心も高まるだろう。現在の照葉樹林の復元事業のように伐採や再生方法のみを議論するのではなく、復元によって享受されるメリットも考え併せ、計画を進めていくべきだと考えている。

宮崎県は東側が広く太平洋に面しており、川が注ぐ海岸線にはたくさんの砂浜やレキ浜が広がっている。その海岸にウミガメが産卵にやって来る。ところが最近、その海岸が浸食されて狭くなり、せっかく産卵したウミガメの卵が水につかったり流されたりする恐れがでてきた。そこで保護団体は卵を掘り起こし、安全な場所に移植する活動を始めた。しかし、ほんとうの保護とは野生で暮らしていける環境を整えることである。私たちがすべきなのは卵の移植ではなく、自然の状態で卵がふ化できるような砂浜の確保であると思い、砂浜保全活動にのりだした。

調査の結果、港にある防波堤や離岸堤が砂の自由な動きをさまたげ、湾内に砂の滞留を引き起こしていたことがわかった。砂浜を管理する行政は、湾内の砂の滞留を止めるという名目で、さらにコンクリート構造物を建設する計画を立てた。私はこの計画に、ひむかの砂浜復元ネットワークという団体を立ち上げて反対運動を始めた。

行政との話し合いは困難と思われがちであるが、対話に努め、良好な関係を構築し、自らの主張を論理的に伝えることによりスムーズに進めることができる。科学的データを集め、事実を論理的に整理し、わかりやすくアピールすることが非常に有効である。

2年次プログラム
「NPOマネジメント論」

「NPOマネジメント論」概要

これまでの社会では、地域が抱える諸課題を解決するのは、行政が中心になり地域住民で構成する自治会や福祉、防犯、青少年育成、環境衛生などといった課題ごとの団体により諸活動が行われてきました。しかし、こうした団体のお世話をする住民の高齢化や役員不足といった問題が生じたり、人口流動による旧住民と新住民の確執が起こるなど地域運営もこれまで通りの手法では立ち行かなくなってきました。また、社会や市民のニーズも多様化し、行政だけではこれらに対応できなくなっています。

こうした地域や社会の諸課題に取り組む「新たな公」として注目されてきたのが、特定非営利活動団体（NPO）という存在です。13年前に、この組織形態を発展させようとNPO促進法ができ、一定の要件を満たしておれば法人格が与えられるようになりました。

これからの地域社会で諸活動を進めようとするときには、行政や既存の地域団体との連携だけではなく、NPOという組織の役割や活用方法についても理解しておく必要があります。

「NPOマネジメント論」については、こうした社会状況を踏まえ、本講義を受講する学生たちが実際に地域社会で活躍する時には、否応なくNPOという存在を考慮しなければならない社会環境になっているであろうという認識から、NPOという組織形態についての理解やその現状、抱えている課題、今後の可能性などについての基礎知識を持っておく必要があるものと考え、本プログラムに組み入れました。

授業概要

到達目標	一人ひとりの市民が社会の一員として持続可能な地域づくりに貢献することの必要性及びNPOの役割について理解する
テーマ	多様な主体の参画と協働で進める環境学習を通じた持続可能なまちづくり

授業構成にあたっての基本的な考え方

市民や行政職員などの多くには、地域団体やNPOを通じて地域社会に関わる人々は無償のボランティアで働いているといったイメージがあります。しかし、NPOが地域や社会の諸課題に取り組み、行政もその社会的役割を「新たな公」として認めるなら、そこで働く人々には公務員と同様の社会的保障がなされてもいいはずです。

このように日本のNPOについての考え方はNPO自身も含めて二極化しており、NPOという組織をどのように運営していけばいいのかについては、各団体の考え方に任されているのが現状です。

今回のNPOマネジメント論では、西宮市で活動する「こども環境活動支援協会（LEAF）」というNPO法人の立ち上げから今日に至るまでの経過や組織運営や財務管理などを紹介。社会的な活動を行うことによって給与を得るという職場としてのNPO法人の実情を理解してもらいたいと考えました。

講義は基本的に日本や兵庫県におけるNPO法人の現状や課題、西宮市における行政やLEAFが行っている環境まちづくりの取り組み、今日の社会的な課題となっている「持続可能な社会」に向けた教育や考え方についてお話ししました。

また、学生が今後、就職し様々な分野で働いたり、地域に関わったりするときに、「社会が求める大切なこと」とは何かについて、他者とも関わりながら自分自身の考えをしっかりと持って前向きに向き合っていけるようになるために、グループワークを交えて自分自身を振り返る授業形式も取り入れていました。最終的には、自分自身が「どのような生き方をしたいのか」を考える機会にしてもらえることを目指しました。

活動内容

実施期間

平成19年度:　平成19年10月3日～平成20年1月23日

平成20年度:　平成20年10月1日～平成21年1月21日

平成21年度:　平成21年10月7日～平成22年1月20日

実施時間（各年度とも共通）

5時限目（午後4時40分～6時10分）

講　師（各年度とも共通）

小川 雅由（NPO法人こども環境活動支援協会 事務局長）

シラバス内容（各年度とも共通）

第1回	講義:「NPOって何だろう」	第8回	グループワーク:「持続可能な暮らし方」
第2回	講義:「西宮市におけるNPO事情」	第9回	講義:「市民社会への参画・協働(1)」
第3回	講義:「事例紹介　LEAFの成り立ち」	第10回	講義:「市民社会への参画・協働(2)」
第4回	講義:「事例紹介　LEAFの活動と運営」	第11回	グループワーク:「持続可能な地域づくり」
第5回	グループワーク:「NPOが社会の中で果たす役割は」	第12回	講義:「これからの社会に求められるもの」
第6回	講義:「西宮市に関する理解(1)」	第13回	グループワーク:「どんな生き方が大切」
第7回	講義:「西宮市に関する理解(2)」		

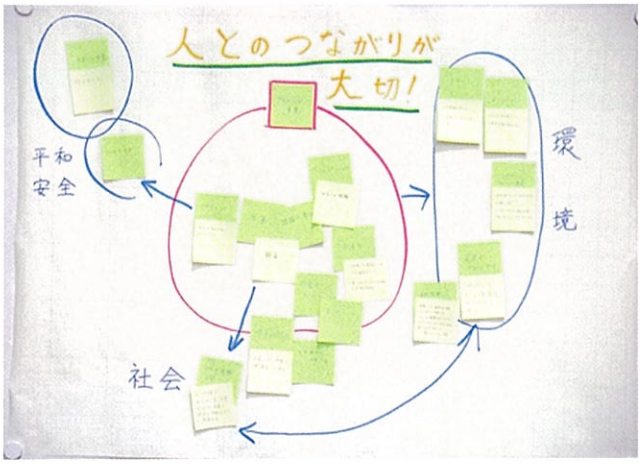
教授法（各年度とも共通）

講義とグループワーク

持続可能な地域づくりをテーマとしたグループワーク

グループディスカッションでアドバイスを受ける学生達

持続可能な地域づくりプランを発表



発表プランの一例

JICA研修員から自国の環境問題について発表

JICA研修員の発表を受けて感想を述べる学生

3年次プログラム

「地域活性化総合実習」

「地域活性化総合実習」概要

本プログラムでは将来、地域社会の中で中心的に行動できるリーダーシップを実践的に養うことが中心課題となっている。2年次の「地域活性化論」、「NPOマネジメント論」を履修し、地域を活性化することについての知識を吸収した後の実践練習と位置付けられる科目である。実践的教育を効果的に行うために、「西宮市民が参加する体験学習プログラムの企画、準備、実施を行う」という課題を学生に与えた。

この講義では5名の教員が担当し、学生はいくつかのグループに分かれて「西宮市民が参加する体験学習プログラムの企画と実施」に取り組む。4月の講義開始後、学生は話し合いで、体験学習の大まかな方向性を決めて、グループをつくり、講義時間やそれ以外の時間に各グループで体験学習プログラムの企画を話し合う。月に1度、教員の前で企画について発表し、教員の意見を聞く。教員は企画の目的と意義、実施可能性、安全面での配慮など、学生が考慮するべきことを次々に質問する。教員の指摘に次回の発表会で答えるべく、学生は自分たちの企画について様々な面からさらに検討していく。この過程で学生はグループ内でかなり突っ込んだ議論を行うが、これによってお互いの個性を把握することができ、チームとしてのまとまりが作られていく。7月にはそれぞれの企画に教員のゴーサインが出て、実施準備に入る。「体験実習プログラム」の実施時期は8月～12月になるため、学生は夏休み中も協力して、参加者募集のための広報、企画を進めるための大学外の協力者との連絡、体験学習プログラムの実施案の作成、プログラムで使う資料の準備など、企画を実施するために必要な準備を自分たちで進める。GP推進室の専任スタッフ2名が、学生への助言、大学外の協力者との連絡役などを務めるが、教員は具体的指示を与えることをさけ、助言にとどめ、学生自らが考えるようにした。

平成20年度および平成21年度ともに、学生は期待に十二分に応え、学外の多くの協力者のサポートを受け、自分たちの個性を活かしたユニークなプログラムを実施した。学外の協力者からも学生との関わりを持つことで、新しいアイデア、活力を持つことができたと高い評価を受けた。学外の協力者から今後もこの教育プログラムに対して協力したい旨の申し出を受けているが、これも学生の働きが高く評価されたためであると考えている。

平成20年度地域活性化総合実習　プロジェクト

	プロジェクト名	学生メンバー数	実施期間
Project no.1	「親子で作ろう ベジタブル!」	11名	2008.04～12
Project no.2	「早めのメタボ予防大作戦!!」	6名	2008.04～12
Project no.3	「みんなで eco クッキング!」	10名	2008.04～11

平成21年度地域活性化総合実習　プロジェクト

	プロジェクト名	学生メンバー数	実施期間
Project no.1	「親子で収穫体験♪」	9名	2009.04～12
Project no.2	「自然と考えよう! ～ふれて、遊んで、泊まって、学んで～」	7名	2009.04～12
Project no.3	「わくわく!ぶんぶん!はちみつ採集」	6名	2009.04～12

平成20年度
地域活性化
総合実習
（3年次）

Project no.1

親子で作ろう ベジタブル！

野菜を育てて食物の自然な姿や尊さを知ろう!
親子の絆も深まる全4回の農作業イベント。

Data

- 実施日　2008.08.23／09.23／10.18／11.22
- 実施場所　甲山農地（兵庫県西宮市）
- 参加人数　11家族36名（子ども17名・大人19名）
- 企画・活動期間　2008.04～12
- 学生メンバー数　11名
- 協力先　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）

Staff

〈学生〉
友田 麻子／橋田 佳奈／畑田 真紀子／井手 恵／森元 智子／中田 有美／坂本 美菜子／瀬尾 磨諭／東郷 菜穂子／山口 真里奈／安本 有希

〈こども環境活動支援協会（LEAF）〉
久世 竜氏／小川 哲生氏／農地ボランティアの方々

● プロジェクト概要

幼児、小学生低学年の親子11家族を対象に、NPO法人LEAFに管理を委託した甲山農地を利用した農業体験実習である。農地で実際に野菜を育てることで、季節感を体感し、食の大切さを考え、親子の楽しい思い出作りを支援するなどを目的とした。8月から11月まで、月1回の活動日を設け、野菜の種まきから収穫までを体験するものである。野菜の育て方、共同作業のルールに始まり、野菜を育てる楽しさなどを農作業だけでなく、昼休みのクイズ、レクチャーなどでわかりやすく参加者学習させた。また、学生自身も農作業体験がないため、5月以降、企画準備を進めながら、講義の合間を縫って農地に出かけNPO法人LEAFのスタッフ、農地ボランティアから農作業の手ほどきをうけ、草とり、水やりなどの経験を重ねた。最初のイベントで植えつけた野菜の世話も学生が引き受け、野菜の成長の過程をホームページで参加者に知らせることも行った。最初はぎこちなかった活動日運営も回を重ねるごとにいろいろな工夫が生まれ、円滑に進むようになった。また、最初の企画にはなかった「稲刈り体験」を参加者から希望され、急遽、最初の企画を一部修正して、対応したこともあった。幼児、小学生低学年が対象ということもあって、その日の活動を終えるときに印象に残ったことを絵日記に書いてもらい、最後の活動日には修了証とともに、観察日記にまとめて参加者にプレゼントするなど、教員では思いつかないようなアイデアいっぱいの企画となった。

この活動で学生は多くのことを学んだ。学生メンバー11人での徹底した話し合い（このグループでは多数決で決めることは止めにしたという）、メンバー間での情報の共有が重要であることに気づき、学外の協力先とのコミュニケーション（自分たちの考えを正確に伝え、協力者の言葉をきちんと聞くこと）、チームとしての団結力が体験学習プログラムの実施の成功の鍵であったことを、活動後のレポートなどで報告している。

● 詳細スケジュール

企画～準備
2008年4月～8月
内　　容：イベント企画立案、レクチャーやレシピ資料の準備、夏野菜の種まき、間引き、水やり等の手入れ、広報、リハーサルなど

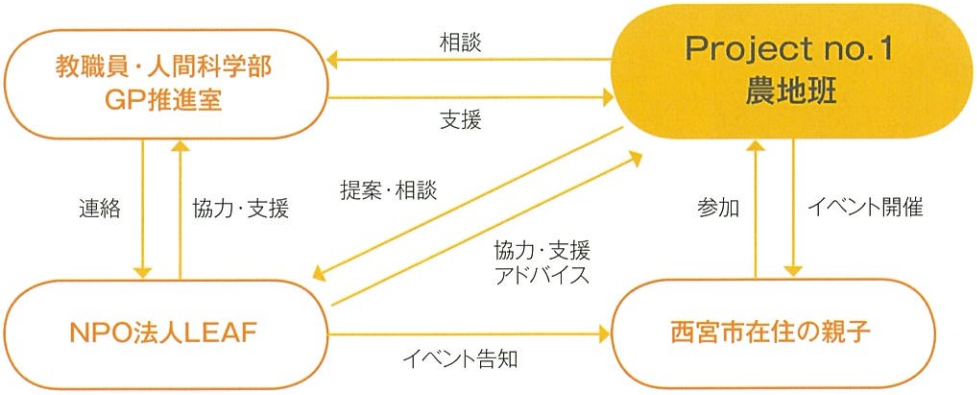
第1回
2008年8月23日（土）
内　　容：夏野菜の収穫、夏野菜レクチャー、冬物根菜の種まき
参加人数：6家族15名（子ども8名・大人7名）

第2回
2008年9月23日（火・祝）
内　　容：冬物根菜の間引き、葉物冬野菜の種まき、冬野菜レクチャー、稲刈り
参加人数：11家族33名（子ども17名・大人16名）

第3回
2008年10月18日（土）
内　　容：葉物冬野菜の間引き、芋掘り、冬野菜レクチャー、脱穀
参加人数：9家族27名（子ども12名・大人15名）

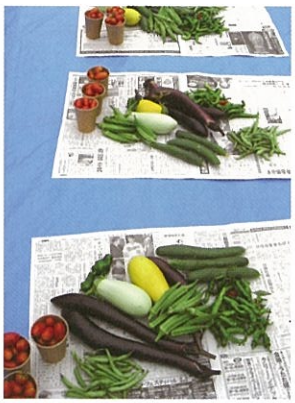
第4回
2008年11月22日（土）
内　　容：冬物根菜の収穫、葉物冬野菜の収穫、総まとめ
参加人数：9家族31名（子ども15名・大人16名）

● 運営関係図



企画〜準備／
一つ一つ全員で意見交換しながら決定。

第1回／
マイクを使わず、大きな声でレクチャーを進行!



第1回／
夏野菜がたくさん収穫できました。

第2回／
親子で初めての稲刈りに挑戦!

第2回／
畑で採れた茄子の炒め物と南瓜の煮物で
お昼ごはん。

第3回／
昔ながらの脱穀方法を体験。

第3回／
手で土を掘り起こしながら芋掘りを。

第4回／
自分で種をまいた大根が
こんなに立派に!

第4回／
毎回つけていた観察日記を
1冊にまとめてプレゼント。

● プロジェクトリーダーのコメント

食べ物は命や育てた労力だと、親子で実感してほしい。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　友田（ともだ） 麻子（あさこ） さん

都市化・核家族化が進み、子どもたちはスーパーにある野菜の姿しか知らないのではないか。そんな問題意識から、私たちは農地で野菜を育て収穫するイベントを企画しました。食べることは、命や育てた労力をいただくこと。子どもたちに食べ物の大切さをもっと知ってもらいたい。それが、命や地球を大切にする心にもつながると考えたのです。また、共同での農作業を通して他人と接したり、親子の絆が深まることも重視しました。
イベントは全4回で、種まきから収穫までを体験。野菜の育て方や旬、共同作業のルール等を学び、植物を育てる楽しさを感じてもらいました。また、クイズなどのレクチャーで知識を深め、昼食には採れたて野菜を味わいました。運営はNPO法人LEAFにご協力いただき、農地を借りて、共同ミーティングを実施。アドバイスを元にメンバー全員でイベント内容を作り込みました。また、メンバー間ではメーリングリストで常に情報を共有。成功の鍵は、協力先とのコミュニケーションとチームの団結力だと感じています。

● メンバーのコメント

共に成長できる仲間と出会い、協調性が磨かれました。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　山口（やまぐち） 真里奈（まりな） さん

「主体的に動くことができる人になりたい」。その想いから、「参加型」の授業形式に興味を持ちプログラムを受講しました。イベント運営を通して最も成長したのは、納得した上で自分の考えを全体の意向に合わせられるようになったこと。話し合いが煮詰まった時、いつも聞き手に回るメンバーに意見を求めると、新たな視点が加わって議論がより充実したことがきっかけでした。それ以後、話し合いで多くの考え方に触れる中、自然と相手の意見を受け入れられるように。聞き手側だったメンバーも活発に発言するようになり、チーム全員で成長している実感が得られました。本音をぶつけ認め合える仲間と出会えたことで、自分の枠を広げられたと思います。
また、イベントでは、レクリエーション等の際に、相手のバックグラウンドを理解する必要性と、相手に合わせた話し方やレジュメの作成方法を学習。スキルと人間性の両方から、主体となるための成長ができ、受講して良かったと心から感じています。

● 参加者の声

- 子どもが稲の実物を手にしたのはこの日が初めてでした。食卓のごはんを見る目も変わってくると思います。
- 親子とも初稲刈りができ、大変貴重な体験でした。あの“ぬかるみ”は気持ちよかったです。
- 野菜っておもしろい。地上と土の中が全く違い、それぞれ立派に育ってる！　また、お茶碗一杯のごはんが出来るまでに多くの工程と愛情が詰まっておいしくなるんだと改めて感じました。
- レクチャーでマメ知識を知り、家族の会話も増えました。

● 反省・感想

- 大切なのは全体への配慮と個人への配慮。適切な関わり方が参加者の満足に繋がると感じました。
- 自分の得意なことを把握し、他のスタッフと役割を分担して助け合うことの大切さを実感。
- イベントは多くの方々の協力が必要で、言葉でのコミュニケーションができて初めて実現できることを学びました。
- 4回目のイベント終了後にLEAFさんから「チームに団結力があるね」と褒めていただき、自信がつきました。

平成20年度
地域活性化
総合実習
（3年次）

Project no.2

早めのメタボ予防大作戦！！

食事・運動・生活面で家族の健康を守る女性にエール!
基礎知識+トランポ・ロビクス運動でメタボを防ごう。

※トランポ・ロビクス…ミニトランポリンを使い、足腰に負担が少ない
エアロビクスエクササイズ。

Data

- 実施日　2008.09.13／09.27
- 実施場所　神戸女学院大学（S-19、第三体育館、ケンウッド館）
- 参加人数　8名
- 企画・活動期間　2008.04～12
- 学生メンバー数　6名
- 協力先　大学体育研究室

Staff

〈学生〉
小西 くみこ／平山 智子／笠松 彩／尾野 安希子／
塩見 嘉奈子／安廣 琴恵

〈補助スタッフ（学生）〉　畑田 真紀子（第1回イベント補助）
〈教員〉　井上 紀子教授／高岡 素子准教授

● プロジェクト概要

地域の活性化のためには住民が身体も心も元気でいることが大事であるとの思いから、家族の健康を担う女性を対象に、メタボリックシンドロームの予防に対する意識を高めてもらうことをテーマとした。

体験学習は第1回の活動日に体脂肪、BMI、筋肉量などの測定と本学の高岡素子准教授によるメタボリックシンドロームに関する講義を行い、第2回の活動日には本学の井上紀子教授がミニトランポリンを使った足腰に負担が少ないエアロビエクササイズ（トランポ・ロビクス）を行った。中高年女性の参加者8名と学生メンバー6名によるアットホームな企画となった。さらに、体験学習後、2ヶ月にわたって、参加者に自宅でダイエットダイアリーを付けてもらい、学生はそれを続けられるよう支援することにした。学生は企画準備段階でメタボリックシンドロームは深刻な病気であることに気づき、参加者の設定、活動の内容などをよく考えて企画を進めた。講義の準備をする担当者は病気の解説、運動方法、食事レシピの例やダイエットダイアリー記入用紙など20ページ以上の資料を準備した。また、運動を担当する学生は井上教授からトランポ・ロビクスの指導法に関するトレーニングを受けて、実施に備えた。第2回の活動の後には学内で懇親会を開催し、井上教授、参加者、学生メンバーで健康のこと、神戸女学院のことなどの話をする機会をもった。さらに、2回の活動終了後には参加者と学生メンバーがペアとなり、2ヶ月間ダイエットダイアリーを付けてもらう試みを行った。2週間ごとにダイアリーを送ってもらい、学生が分析し、食生活へのアドバイスなどを行い、参加者が2ヶ月間継続できるようサポートした。このやり取りを通じて、体験学習への参加者と学生メンバーの交流が深まり、体験学習の内容をより深く参加者に伝えることができた。単発的なイベントになってしまいがちな体験学習において、参加者をフォローアップしていく新しい形を提案できた。

● 詳細スケジュール

企画～準備
2008年4月～9月
内　　容：イベント企画立案、レクチャー資料等の準備、トランポ・ロビクスの練習、広報、リハーサルなど

第1回
2008年9月13日（土）
内　　容：体脂肪・ウエスト・BMI・筋肉量・水分量・生活チェックなどの測定、メタボの基礎知識と対策の講座、レコーディングダイエットのワークショップ
参加人数：8名

第2回
2008年9月27日（土）
内　　容：体脂肪・ウエスト・BMI・筋肉量・水分量・生活チェックなどの測定、トランポ・ロビクスでの運動、懇親会
参加人数：6名

終了後
2カ月間サポート
参加者とペアになり、2週間ごとにダイエットダイアリーの分析や食生活のアドバイス、質問への回答、ダイエット情報の提供など2ヶ月間サポートを継続実施

● 運営関係図

企画〜準備／
話し合いながらレクチャーや資料の準備を。

企画〜準備／
トランポ・ロビクスの厳しい特訓!

企画〜準備／
メタボに関する資料や
ダイエットダイアリーなどを作成。

第1回／
メタボの基礎知識と対策を講義。

第1回／
熱心に聞き入る参加者の皆さん。
講義後のワークショップでは目標を設定。

第2回／
音楽に合わせてストレッチ。

第2回／
ほぼマンツーマンでトランポ・ロビクスを指導。

第2回／
運動後は和気あいあいと懇親会を。
「また参加したい」との声も!

終了後／
ダイエットダイアリーを
通して約2ヶ月間サポート。

● プロジェクトリーダーのコメント

住む人の心身の健康が地域活性のカギと考えて。

人間科学部 心理・行動科学科 3年生　小西（こにし） くみこ さん

イベントのコンセプトは、地域の健全な発展に貢献すること。では、「地域活性化」とは何か―私たちはまずそこから考え始めました。答えを探す中見えてきたのは、地域が活性化するためには住民が身体も心も元気でいることが大事、ということ。そこで、家族の健康を担う女性に意識を高めてもらい、地域の発展の土台づくりを目指しました。
イベントは、メンバーが協力し互いの強みを出せるよう企画。メタボ予防の講義と運動の2回のイベントに、終了後も2ヶ月間継続してサポートを実施。授業でも採用されているトランポ・ロビクスを取り入れ、女性を対象とするなど、女学院カラーにもこだわりました。
講義や運動は教授にご参加いただき、知識不足を補いながらの運営。メンバーの努力と周囲の方のご協力があったからこそ、成し遂げられたイベントです。

● メンバーのコメント

イベントの運営自体が、自分を変える大きな第一歩に。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　安廣（やすひろ） 琴恵（ことえ） さん

地域活性化を図るこのプログラムの魅力は、「参加者」ではなく「企画者」として参加できること。私は元々積極的に物事を進める方ではなかったため、客観的に物事を捉えた上で自分の意見を持ち、主体的に行動していけるようになりたいと思っていました。
3年次のイベント運営の中では、各内部機関へのアポ取りや調整などを経験できたことで社会的マナーが身に付きました。一方で、コンセプト設計や告知等でつまずきも多く、イベントを企画・実施することの難しさと、責任を背負うことの厳しさを実感しました。
ただ、一つ確実に言えることがあります。それは、意見を話し合ってイベントを作り上げ、「0」から「1」へ進むことができたということ。何もしなければ何も変わりません。考えているだけでも何も進みません。これまで私は初めの一歩をなかなか踏み出せずにいましたが、まず行動してみることこそ自分を成長させるための近道だと、このイベントを通して強く感じました。今の私にとって、この体験は何事にも代えがたい貴重なものとなっています。

● 参加者の声

- 具体的なお話が多く、私にもできるかなと思いました。
  立派な機械で身体測定してもらい、今後の参考になりました。
- ダイアリーが付いていてよかった。
  資料も詳しく書いてあり、役に立つと思います。
- トランポ・ロビクスの内容はあまり負担がかからず、楽しく身体を動かせてよかったです。
- 「Diamonds」などかかっていた音楽が、年代を考えてくださったナイスな選択でした。

● 反省・感想

- 一つのイベントには多くの人が関わることを知りました。
  周囲の人たちに支えられ、感謝の気持ちでいっぱいです。
- 喜んでくださる参加者を見て、これからももっと人の役に立ちたいと強く思うようになりました。
- 言葉遣いを気にするようになり、人前で話すことに自信がつきました。
- 多角的な視点がよりよいイベントを生むと知り、自分とは異なる意見も柔軟に取り入れられるようになりました。

平成20年度
地域活性化
総合実習
（3年次）

Project no.3

みんなでecoクッキング！

子どもたちが地域との繋がりを感じ、環境問題を考えるきっかけづくり!

Data

- 実施日　2008.11.03
- 実施場所　芋掘り：甲山農地（兵庫県西宮市）
  調理：西宮市立中央公民館 調理室
- 参加人数　小学4～6年生18名と見学者2名
- 企画・活動期間　2008.04～11
- 学生メンバー数　10名
- 協力先　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）

Staff

〈学生〉
植田 久珠子／別枝 茉紘／畑 冴子／伊賀 梓／池本 成美／石田 未来／礒部 泰菜／片山 翠／曽我部 智子／寺坂 悠

〈こども環境活動支援協会（LEAF）〉
久世 竜氏／小川 哲生氏／農地ボランティアの方々

● プロジェクト概要

自分ひとりで体験学習に参加できる小学4～6年生を対象に、「子どもたちと交流し、地産地消の考え方を教える」ことをテーマにした。甲山農地で栽培したサツマイモを素材に、大学生と小学生が一緒に調理し、勉強する体験学習プログラムである。この中で子ども、大学生、農地との「つながり」を中心課題とした。

10名の学生メンバーは体験学習のコンセプト作りに苦労したが、NPO法人LEAFの方から「地産地消」のキーワードをヒントにいただき、面白い企画にたどり着いた。体験学習は11月3日の開催をめざして、その時に使うサツマイモの植えつけを6月に行うことから始まった。小学生に「地産地消」の考え方を教える教材づくり、小学生と一緒に調理するための献立作りやリハーサルなど、1日限りの活動でやり直しはできない状況なので、学生メンバーはサツマイモ班と調理班に分かれ、準備は万全になるように心掛けた。

朝はバスで甲山農地に出かけ、みんなで芋掘りを体験し、掘った芋はお土産にした。移動中のバス内ではサツマイモに関するクイズ形式を行って、初対面の小学生も調理をするペアが仲良くなれるよう工夫した。場所を西宮市立中央公民館の調理室に移し、小学生2人と大学生がチームとなって、調理に取り組んだ。メニューはなるべく調理ゴミが出ないエコ・メニューで、芋ご飯、サツマイモ汁、ホイコーロー、芋まんじゅうとした。事前のリハーサルで、「小学生が熱くなった鍋などに触らないように」、「包丁はセラミック包丁をつかうように」など十分な配慮を行った。みんなで楽しく昼食を食べた後は、メンバーが用意した教材を使って、「地産地消」の学習を行った。小学生は自ら芋を掘り、調理して、食べるという経験を通じて、普段何気なく食べている食事にはいろいろな課題があることを知ることができた。学生メンバーもメンバー同士の協力と入念な準備がこのような体験学習を実施する際に非常に重要であることを実感できた。

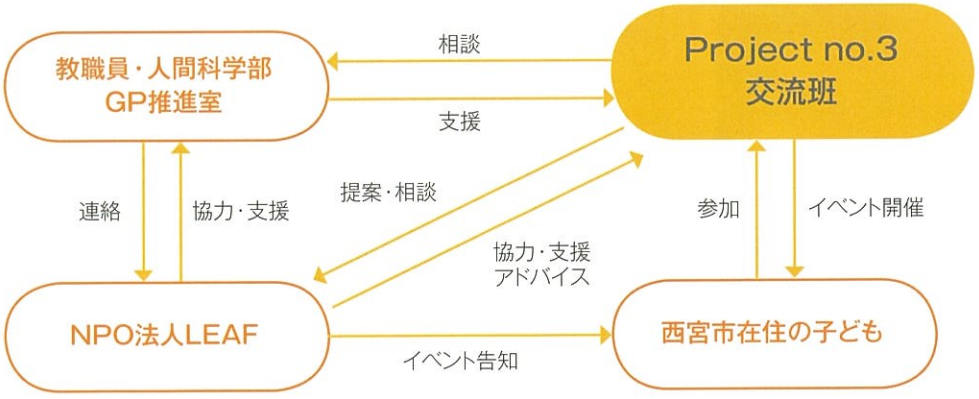
● 詳細スケジュール

企画～準備
2008年4月～11月
内　　容：イベント企画立案、芋の植え付けとその後の手入れ、レクチャーやレシピ資料等の準備、広報、リハーサルなど

芋掘り体験
2008年11月3日（月）
10:00～11:00
内　　容：芋掘り、クイズ（芋に関する知識の確認）
参加人数：小学4～6年生18名（見学者2名）

ecoクッキング
2008年11月3日（月）
11:30～14:00
内　　容：ecoクッキング、地産地消のレクチャー
メニュー：芋ごはん・サツマイモ汁・ホイコーロー・芋まんじゅう

● 運営関係図



企画〜準備／
現地でリハーサルをし、問題点の確認を。

企画〜準備／
ecoクッキングのしおりを作成。

芋掘り体験／
芋掘りの前に生い茂ったツルを整理。

芋掘り体験／
芋掘りが楽しくて、思わず笑顔に。

芋掘り体験／
おいしそうなサツマイモが
たくさん採れました!

クイズ／
調理場へ移動するバスの中は
芋に関するクイズで大盛り上がり。

ecoクッキング／
真剣な表情で芋まんじゅうの形を整えます。

ecoクッキング／
元気に楽しくクッキング!
芋ごはん、サツマイモ汁、ホイコーロー、芋まんじゅうができました。

プロジェクトリーダーのコメント

地産地消を実践し、まずは身近な環境問題に関心を。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　植田（うえだ） 久珠子（くみこ） さん

イベントの大きなテーマは「子どもたちとの交流」。中でも身近な「食べること」に注目し、西宮市の小学４～６年生の子どもを対象に、地域や農家との繋がりが感じられるイベントを企画。また、食材へ感謝の気持ちを持つことで、環境問題への意識も変えてほしい、とも考えました。

このテーマは、２年次に受講した「地域活性化論」から生まれたもの。現代の子どもたちは、お店で欲しい物がすぐ手に入るため、生産者や自然との交流が薄れていることを知り、意識を変えるきっかけづくりが必要だと感じたのです。

イベントの軸としたのはクッキング。「地産地消」を実践し、学生と交流しながら、地元の畑で育てられた野菜を収穫して調理。ゴミを出さない調理方法を通して、身近な環境問題を伝えました。イベント自体は一度きりのため、参加者にはレシピを配布。当日はイベントで気づいたecoのポイントや、今後家でもできる活動を自分で考え、しおりに記入してもらいました。

実はコンセプトがまとまらず、途中で企画をすべて白紙にしたことも。そんな中、LEAFの方から「地産地消」のキーワードをいただくなど、メンバーだけでは考えつかないことも、多くの方と協力すると達成できることを今回何よりも学びました。

メンバーのコメント

立場や状況を考え、的確に行動する力を身に付けました。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　畑（はた） 冴子（さえこ） さん

私がこのプログラムを受講したのは、イベントの企画を通して、自分自身を成長させたかったため。持ち前の行動力をグループ内でも活かせるよう、特にチームワークを身に付けたいと考えていました。

受講してまず感じたのは、これまで知らなかった仕事や世界を学ぶ楽しさ。様々な分野で活躍中の方のお話を聞いたり、ミーティングで意見を共有でき、価値観が広がりました。一方、イベントの企画では、参加者をどれだけ満足させられるか、どう関わるべきなのか、と悩むことが多々ありました。このとき、物事の全体像を把握し、複数の視点から見ることの大切さを実感。相手の目線や違う角度から考えることを心がけるようになりました。視野が広がったことで、自分が置かれている立場や周囲の状況からやるべきことを判断し、より的確に動けるように。活発なだけではなく、チームにきちんと貢献できる行動力が身に付きました。

新しい世界を知り、仲間と協働でイベントを実現するこのプログラム。社会的な視点から長所を伸ばす大切な経験になりました。

参加者の声

- さつまいものツルが食べられるなんて知りませんでした！
  久しぶりの芋掘りもおもしろかったです。
- 初めてわかったことがたくさんありました。
  また家族と一緒にさつまいもの料理を作りたいです。
- 芋や虫が元気だったので自然が生きているなと思いました。
- 班で料理したり、大学生の人達ともたくさんお話ができて楽しかった。

反省・感想

- 困難が生じても準備の段階から多くの人の協力が得られたからこそイベントが成立したと感じました。
- イベントを企画する際は、スタッフ一同が目的意識を明確に揃えることがとても大切でした。
- 企画側の経験がなく、講義で学んでいたのと実際は大変さが違い、何事も経験が必要だと身にしみて感じました。
- 「地産地消」について学ぶうちに農業や地域活性化への意識が高まり、私たちの後輩をはじめ多くの人々に、その意識を高めてもらいたいと考えるようになりました。

平成21年度
地域活性化
総合実習
（3年次）

Project no.1

親子で収穫体験♪

親子で野菜を種から育てて収穫しよう!
自然の姿と採れたての味を知って、好き嫌いをなくす第一歩に。

Data

- **実施日**　2009.09.05／09.23／10.31／12.05
- **実施場所**　甲山農地（兵庫県西宮市）、神戸女学院大学（ケンウッド館）
- **参加人数**　10家族36名（子ども16名、大人20名）
- **企画・活動期間**　2009.04～12
- **学生メンバー数**　9名
- **協力先**　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）

Staff

〈学生〉
岩﨑 有美／青山 恵／岡本 真奈／砂川 絢香／上山 祐佳莉／山口 友理／山本 文子／八束 絵美／養田 唯

〈こども環境活動支援協会（LEAF）〉
久世 竜氏／農地ボランティアの方々

〈学生SA〉
小西 くみこ／友田 麻子／植田 久珠子／山口 真里奈

● プロジェクト概要

～多様なニーズと価値観への対応から生まれた市民の主体性～

このプロジェクトは、里山に広がる農地を活用した季節野菜の栽培と収穫を通し採れたての味を知ってもらうことを目的に、小学校高学年の児童と親子を対象とした企画が組まれかけたが、兄弟姉妹を考慮して対象学年は敢えて示さずに「小学生」とし、1家族の参加者を2～3名を目安として広報された。しかし応募49組の中から選ばれた10組の家族構成は就学前幼児から祖父にわたる3世代で40名を超えた。学生たちは、年齢層の開きと参加者の多さに、当初準備していたプログラムをそのまま実践することに戸惑いを覚えた。しかし毎回アンケートを実施することにより、プログラムへの評価と参加者のニーズを確認し、次回プログラムではその期待に応えた内容に修正しつつ展開することを心がけた。この結果、夏期という厳しい気象条件や2ヶ月以上にわたるハードなプログラムにもかかわらず、参加姿勢は回を重ねるごとに積極性を増した。さらに次回プログラムの修正に参画していただくことにより参加者自身の主体性や学生との協働意識も高まり、当初は3回の予定であった企画は大学内でのフォローアップを含めた4回シリーズに変更されていった。

～活動グループとしての凝集性と持続可能な活動基盤への発展～

このプロジェクトのもう一つの成果は、学生たちの希望により、プロジェクトを支援いただいてきたNPO法人LEAFとの活動を継続することになった点である。参加者との良好な関係構築が学生たちにとって自らの凝集性の高まりにつながり、その結果授業の一環として展開していた活動が、学生たちの自主的な活動グループとして再編成され、現代GPの取組が終了した後も“持続可能な活動グループ”に発展した。

● 詳細スケジュール

企画～準備
2009年4月～9月
内　　容：イベント企画立案、レクチャーやレシピ資料等の準備、農地の手入れ、田植え、夏野菜の種まき・間引き・水やりなどの手入れ、広報、リハーサルなど

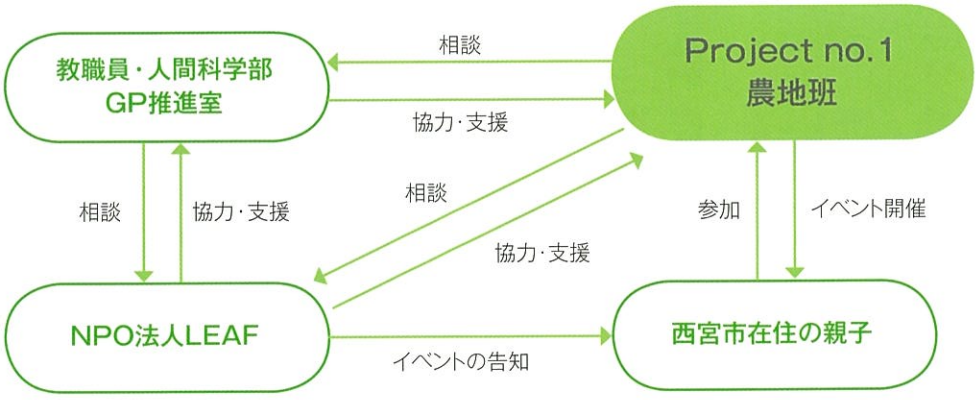
第1回
2009年9月5日（土）
内　　容：夏野菜の収穫、冬野菜の種まき、夏野菜のレクチャー&クイズ、料理レクチャー&試食
参加人数：10家族31名（子ども15名、大人16名）

第2回
2009年9月23日（水・祝）
内　　容：もち米の稲刈り・稲干し、冬野菜の観察、米作りのレクチャー&クイズ、料理レクチャー&試食
参加人数：10家族33名（子ども16名、大人17名）

第3回
2009年10月31日（土）
内　　容：脱穀、冬野菜の収穫、芋掘り、野菜の旬のレクチャー&クイズ、料理レクチャー&試食
参加人数：10家族33名（子ども15名、大人18名）

第4回
2009年12月5日（土）
内　　容：手作りアルバムの制作と贈呈、神戸女学院大学内ツアー、交流会
参加人数：7家族23名（子ども11名、大人12名）

● 運営関係図



企画～準備／
イベントに間に合わせるため、夏野菜の種まきを。

企画～準備／
レクチャーの練習で話し方、声、時間など、
細かくチェックし合いました。

第1回／
野菜の育ち方クイズに
子どもたちは真剣!

第1回／
夏野菜を収穫。
初めての体験に、にっこり!

第2回／
クイズもレクチャーも
慣れてきてスムーズに進行。

第2回／
子どもたちもカマを使って稲刈り。
ルールを守って安全にできました。

第3回／
絵を使って旬の野菜をわかりやすく紹介。

第3回／
種まきしたにんじんを収穫!
豚もち汁に入れました。

第4回／
大学で交流会を開催。
手作りアルバムをプレゼント。

● プロジェクトリーダーのコメント

野菜を育て、収穫し、味わう感動体験を親子で。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　岩﨑（いわさき） 有美（ゆみ） さん

食べ物があふれている今の時代、スーパーに並ぶ野菜しか見たことがない子どもは多いと思います。そこで種から作物を育て、どのように成長していくのか、採れたての無農薬野菜がどれほどおいしいかを知ってもらおうと企画。ここで得たことを日常生活にも取り入れてほしかったので、子どもだけでなく親子で参加してもらうことにしました。

農地でのイベントは3回実施。野菜の種まき、観察、間引き、収穫などの他、もち米の稲刈りや脱穀も体験。また、作物や農作業についてのレクチャーやクイズ、採れたて野菜を使った料理の試食もしました。毎回最後に、子どもには絵日記、大人にはアンケートをお願いしたのですが、これが次回イベントの内容や進行のよい参考に。回を重ねるごとに参加者との距離も縮まり、楽しそうに来てくださることが本当に嬉しかったです。

実はイベントは3回で終了予定だったのですが、メンバー全員の希望で交流会を追加開催。学内ツアーをしたり、野菜ケーキを食べながら、最終日にプレゼントした種の成長具合をお聞きしたり、充実した時間を過ごせました。

このような成功が遂げられたのは、教職員の皆さん、LEAFの方々の支えとご協力があったからこそ。そして、チームワークの賜だと思います。思っていることを発信する大切さを知り、たくさん話し合って、信頼できる仲間になれたことが私への最高の贈り物でした。個人的にも、あきらめずに挑戦しようと考えるチャレンジ精神や、主体的に行動する力が養われ、成長を感じられる経験となりました。

● メンバーのコメント

新しい考え方を持てたことで、成長できたと実感。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　山口（やまぐち） 友理（ゆり） さん

先生に導かれるのではなく、学生が主導者となってイベントを運営することに不安もありましたが、私はむしろわくわくしていました。実際には大変なことも多かったですが、それ以上に学ぶことが多く、実りの多い授業でした。

例えば、GP推進室の方々やボランティアの方々と一緒にイベントの準備をしていくなかで気づいたのは、人に頼ることの大切さです。自分たちだけで全てをやり遂げようと無理するより、頼れるところは頼った方がより良いイベントができることを体験し、「頼るイコール甘えるではない」とポジティブにとらえられるようになりました。

また、チームワークが重要となるこの授業では、作業を分担し、責任の所在をしっかりと決める必要があります。しかし分担するだけでなく、1人でやった方が効率的でも、情報共有のために時間をかけてでも一緒に作業することが大切なときもあると知ることもできました。

このように新しい考え方を持つことができたことは、私の大きな宝です。今後、社会に出ても、積極的に地域社会と関わり、ずっと成長し続けていきたいと考えています。

● 参加者の声

- ナスが食べられない娘に自分の経験を話して励ましてくださり、一口だけ食べることができ、嬉しかったです。
- 日常食べているお米の成り立ち、食べられるまでの大変さを学び、改めて食物の大切さを実感。
- 学生の皆さんも楽しそうに積極的に参加されていました。「女性リーダー」を意識した行動がとれていたと思います。
- 野菜の栄養や旬などが話題にのぼるようになり、以前より身近に感じてくれているようです。

● 反省・感想

- ひとり一人が動かなければイベントはできないと学びました。「誰かがやってくれる」「リーダーに頼めばいい」といった「誰か」頼みでは9人の力は発揮できませんでした。
- やる前から無理だと決めつけず、未知なことにもチャレンジする勇気を持てました。
- マイペースで視野も狭かった私が、メンバーからのアドバイスでいろいろなことに気づいたり、人と何かをする協調性が養われたことが大きいです。

平成21年度
地域活性化
総合実習
（3年次）

Project no.2

自然と考えよう！

～ふれて、遊んで、泊まって、学んで～

心から「いただきます」「ごちそうさま」が言えるようになってほしい。
自然の中で生活することで、当たり前と思わず感謝する気持ちを育もう!

Data

- 実施日　2009.09.21～09.22（1泊2日）
- 実施場所　神戸市立六甲山牧場、西宮市立甲山自然の家
- 参加人数　12名（小学4～5年生の男女各6名）
- 企画・活動期間　2009.04～12
- 学生メンバー数　7名
- 協力先　神戸市立六甲山牧場、ドギーバッグ普及委員会
  NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）

Staff

〈学生〉
萩原 淳／堀 仁美／金城 京子／岡田 佳奈／重本 万里子／田村 典子／安田 朱里

〈協力者〉
久米 正彦氏（神戸市立六甲山牧場）

〈学生SA〉
小西 くみこ／友田 麻子／植田 久珠子／山口 真里奈

● プロジェクト概要

～凝縮されたふれあいとグループワークの活用からネットワークづくりへ～

このプロジェクトは、食のありがたさ・命の大切さを再認識し、食事への感謝の気持ちを学ぶことを目的に、小学生4～5年生の男女12名を対象として企画された。他の企画との大きな違いは、児童のみを対象とした点、宿泊によりプログラムを集中させたことである。体験学習の開始当初、学生たちは親元から離れた児童たちをまとまりのある集団として捉え運営していくことに戸惑いを感じていたようである。しかし参加児童を4班にグループ化し、準備したプログラム課題をグループ単位で検討・発表させていく過程で児童たちの中にグループへの所属意識が生まれ、やがてまとめ役も誕生した。進行を妨げようとする子どもたちの動き（サブグループ）が見受けられる場面もあったが、学生たちの適切な働きかけによりグループとしての力が上手く機能し、目的に向かった正の方向に導かれた。個人として参加した子どもたちだが、共通目的のもとで小グループ化され、さらに中グループとして組織化されていく過程を体験（実践）できたことは、これからの地域社会づくりをリードしていく上で意義深いこととなった。また参加児童たちの成果として、学校区を超えた仲間意識が連絡網づくりに発展、ネットワークへの展開が期待される。

● 詳細スケジュール

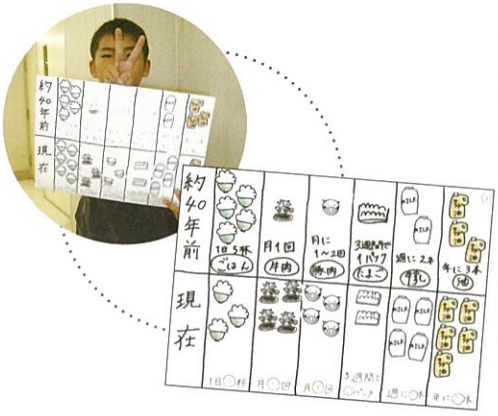
企画～準備 2009年4月～9月	内　容：イベント企画立案、レクチャー資料やクイズ等の準備、現地下見、広報、リハーサルなど
宿泊1日目 2009年9月21日（月・祝）	内　容：動物とのふれあい、牛の生態の学習、アイスクリーム作り体験、食についてのレクチャー、ゲーム大会
宿泊2日目 2009年9月22日（火・休）	内　容：食糧問題についてのレクチャー、川遊び、まとめ
フォローアップ 2009年9月～12月	内　容：手作りアルバムの制作と発送

● 運営関係図

企画～準備／
現地で準備&リハーサル。

宿泊1日目／
六甲山牧場でアイスクリーム作り。
牛への感謝の気持ちを忘れずに。

宿泊1日目／
食生活の変化や自給率を
レクチャー。子どもたちも興味津々。



宿泊2日目／
子どもたちにわかるように
工夫しながら食糧問題をレクチャー。

宿泊2日目／
ドギーバッグの組み立て競争にトライ!

宿泊2日目／
仁川上流で川遊び。
身近な自然とふれあう経験も大切です。

宿泊2日目／
2日間のまとめを書いてもらい、
後日アルバムにしてプレゼント。

● プロジェクトリーダーのコメント

食べ物はあるのが当たり前ではないと、知ってほしい。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　萩原（はぎわら） 淳（じゅん） さん

近年、食糧問題が世界に広がる一方で、日本では食べ物があふれ、年間2千万トンもの食べ残しが出ています。小学生の多くがそのことを知らずに「食べ物はあるのが当たり前」と思い込んでいるのは問題ではないか。そう考えた私たちは、子どもたちに食のありがたさ、命の大切さを伝えようと企画を練りました。記憶に強く残し、自立心も育てたいと宿泊イベントに決定。先生方から実現に向けて多くの課題が示され、その解決に時間を費やしましたが、おかげで視野も広がり、成功させたいという思いが一層強まりました。1日目は六甲山牧場で牛の生態を学んだ後、牛乳でアイスクリーム作りに挑戦。牛も私たちと同じ一つの命であり、そのおかげでアイスが食べられるということを知ってもらいました。その後、宿泊施設に移動。2日間で食に対する命の大切さと、食糧問題についてのレクチャーを行いました。最後は川遊びを計画。遊びを通して、自然を大切にしようという思いを育んでもらうのが狙いです。子どもたちは勉強の時間も遊びの時間も生き生きと過ごしてくれ、手応えを感じました。

このイベントを通して、柔軟かつ広い視野で調査・考察・計画をする重要性や、臨機応変に行動する大切さ、協力先の方々のありがたさを痛感しました。また、リーダーとなったことで責任感が生まれたと同時に、自分の班だけど自分だけの班じゃない、だからみんなでがんばろうと考えられるようになったのは大きな成長です。

そして今、私の中には「地域社会のために何かがしたい」という思いが自然にわきあがっています。

● メンバーのコメント

コミュニケーション能力と実行力が自然に高まりました。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　堀（ほり） 仁美（ひとみ） さん

3年次のイベント運営では、さまざまな場面でコミュニケーションの大切さに気づかされました。特に印象的なのは、なかなか一つにまとまらなかった班が、宿泊を伴うリハーサルを機に一致団結したこと。夜中までじっくり話し合ったことでコミュニケーション不足が解消され、信頼関係が築けたからでした。イベント当日は子どもの目線で話すように心がけたおかげでなかよくなれ、レクチャーも理解してもらえました。このような経験を積むうちに、コミュニケーション能力が着実にあがっていきました。

もう一つ、自然と身についたと感じるのは実行力。人任せにせず、自分ができること、やるべきことを積極的に見つけて行動に移せるようになったのは大きな進歩です。

神戸女学院大学でしか経験できないことにチャレンジして自分を成長させたいと思い、このプログラムの受講を決意したわけですが、まさに私にとっての成長の場となりました。今後は、コミュニケーション能力や実行力を活かして、社会に貢献できる仕事に就いたり、ボランティア活動をしていきたいと思っています。

● 参加者の声

- 牧場に行って牛も人間と同じ命なんだとわかりました。本当に楽しかったです。
- 私たち人間は生き物の命をいただいているということを勉強して、私たちはとても感謝しなければいけないと思いました。
- アイスクリームを作って楽しかったしおいしかった。寝るところはホテルみたいですごかった。
- お話でたくさん説明してくれて、理解しやすかった。

● 反省・感想

- 固定観念や先入観にとらわれることなく、柔軟に、臨機応変に行動する術が身についたような気がします。
- 役割分担をきちんとして責任を持って行動することと、コミュニケーションをとることの大切さに気づきました。
- イベントは子どもたち同士の出会いの場となり、私たちの成長の場となることを実感。人とのつながりがイベントを通して広がっていくと思いました。
- 何をすべきか考え、先を見て行動できるようになりました。

平成21年度
地域活性化
総合実習
（3年次）

Project no.3

わくわく！ぶんぶん！
はちみつ採集

自分ではちみつを採集して、ミツバチのことをたくさん知ろう!
子どもたちが「自然と人との在り方」に興味を持つきっかけになりますように。

Data

- 実施日　2009.08.03
- 実施場所　神戸女学院大学理学館（S-34、屋上）
- 参加人数　10名（小学5～6年生の児童とその保護者5組）
- 企画・活動期間　2009.04～12
- 学生メンバー数　6名
- 協力先　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）

Staff

〈学生〉
山崎 慧／北川 真理子／森本 静／西條 衣美／山本 佳奈／山崎 有美子

〈学生SA〉
小西 くみこ／友田 麻子／植田 久珠子／山口 真里奈

● プロジェクト概要

～細やかな計画と予行、リスクマネジメントの徹底による企画の実現とファシリテーターの誕生～

このプロジェクトは、学内で養蜂されているセイヨウミツバチからもたらされる蜂蜜を通してミツバチのはたらきを学び、さらに自然と人との在り方を考えることを目的として、小学生5～6年生とその保護者5組10名を対象に企画された。他の企画との大きな違いは、一度限りの実施という点で次回プログラムとしての修正がきかないこと、さらに採蜜に伴う危険性や酷暑の中での屋上活動など様々な視点に基づいた課題が提起されたことである。学生たちはハチに刺されないための装備も検討しつつ、同時にハチの習性など専門的知識に基づいた行動によって担保できる安全性を、予行の繰り返しから確認し実施に結びつけた。選択肢のひとつとして別企画への変更という手段もあったが、専門知識を高めリスクマネジメントを徹底することにより実践に結びつけた意義は大きい。

さらに参加者の中から、この体験学習を地域としての取り組みにつなげていきたいとの声があがった。活力ある地域社会創りに向けた女性リーダーの養成とともにファシリテーターが誕生したことは想定を超える成果であり、同時にこれからの展開に大きな期待を寄せるところである。

● 詳細スケジュール

企画～準備
2009年4月～8月
内　容：イベント企画立案、レクチャー資料等の準備、ミツバチについての学習、採蜜練習、広報、リハーサルなど

はちみつ採集体験
2009年8月3日（月）
9:00～13:00
内　容：採蜜方法などのレクチャー、面布の着方の練習、はちみつ採集、巣箱・女王蜂の観察、はちみつビンのラベル作り

ミツバチの勉強
2009年8月3日（月）
14:00～16:30
内　容：ミツバチのレクチャー、ミツバチクイズ、はちみつの試食、はちみつビン詰め作業

フォローアップ
2009年8月～12月
内　容：手作りアルバムの制作と発送

● 運営関係図

企画～準備／
本番に備えて、学生役と参加者役に分かれてリハーサル。

企画～準備／
手順を頭にたたきこみながら、
採蜜方法をしっかり練習。

企画～準備／
5分刻みのスケジュールや
当日配布する手作り絵本などを作成。

はちみつ採集体験／
安全のため、採蜜方法や
注意事項を十分に説明。

はちみつ採集体験／
ミツバチの多さに
驚く参加者たち。

はちみつ採集体験／
巣板を遠心分離機にかけて、
はちみつを採集してろ過。

ミツバチの勉強／
ミツバチの習性などのレクチャーにも
真剣に耳を傾けてくれました。

ミツバチの勉強／
はちみつの食べ比べと
採集したはちみつの瓶詰め作業を。

フォローアップ／
写真、レシピ、豆知識などを
1冊にまとめて郵送。

● プロジェクトリーダーのコメント

ミツバチの世界を、自然について考える初めの一歩に。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　山崎（やまざき） 慧（けい） さん

現代の子どもたちは自然と触れ合う場所も機会も少なくなっています。そこで私たちは、親子で自然を感じ、興味を持ってほしいと考え、神戸女学院で飼育しているミツバチのはちみつ採集を企画。採蜜体験をしながら、ミツバチ一匹が一生に作れるはちみつの量はスプーン1杯ほどしかないということも知ってもらい、自然の恵みに感謝できるようになってほしいという願いも込めました。

イベント当日はハチの習性と熱射病の危険に配慮し、午前中は2班に分けて進行。はちみつ採集・巣箱の観察と、はちみつビンのラベル作りとを交代で行い、午後はミツバチのレクチャー、はちみつの食べ比べ、はちみつのビン詰め作業などを行いました。子どもたちからもどんどん質問が出て、レクチャーの時間も真剣な眼差し。後日、「僕は学校でハチ博士なんだ」という嬉しいお手紙も届き、子どもたちの心に何か大切なものを届けられたのではないかなと思っています。

今回のイベントは、ミツバチを飼育管理されている教授、健康医学の教授、保健室の先生などのご指導・ご協力をいただくことで、事故のない安全な運営が成し遂げられました。募集の際はLEAFの方にもお世話になり、たった1日のイベントにも多くの力が必要であると知ったことは大きな収穫でした。常に先を読んで行動できるようになったり、苦手意識を克服し、人前で発表する力がついたりと、自分自身の成長を感じられたことも嬉しいかぎりです。また、将来、地域活性化につながる規模の大きなイベントを行いたいという意欲も生まれ、大変有意義な経験となりました。

● メンバーのコメント

積極性が身につき、人として一回り大きくなれました。

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生　西條（さいじょう） 衣美（えみ） さん

このプログラムを受講した理由は2つあります。1つは自分から参加し、自分の手で作り上げる授業に興味があったこと。もう1つは、地域ともっと関わっていくために、西宮市のさまざまな活動を知りたいと思ったことです。

実際に受講してみると、2年次の地域活性化論では株式会社チクマの「服育」という興味深い取り組みを知ることができたり、3年次にはちみつ採集のイベントを企画・運営したり、想像以上に充実した内容で、受講を決めた2つの理由に十分応えるものでした。

しかも、知識を増やすだけでなく、私を人として一回り大きく育ててくれたように思います。これまではグループの中にいるとつい甘えてしまい、自らアクションを起こすことはあまりありませんでした。それが、周りの状況を見て、今自分が何をすべきかを考え、誰かがやるのを待つのではなく、自分から積極的に動けるようになったのです。

私は今後、地域活性化に貢献できる活動をしたいと考えています。また、いつか親になったら子どもと一緒に参加し、地域活性化の輪を広げていきたいと思っています。

● 参加者の声

- すごく楽しかったです。ハチさんはとても働き者でした。見つけた女王バチがたまごを産んでいました。1日に100個以上産むなんて知りませんでした。ぼくもハチさんみたいに、いっぱい働きたいです!
- 西宮に知らなかった場所を知り、久しぶりに時間の流れが心地よく、親子で学べて満足しています。
- 資料などのプリントが子どもにわかりやすく、とても興味が持てました。帰宅後も家族に体験してきたことを上手に話してくれました。

● 反省・感想

- 1つの企画を実現する大変さを実感。さまざまな事態を想定して準備する重要性も知りました。
- メンバー全員が何をしているかを把握して、進行具合や負担のバランスをとれるようになりました。
- 当たり前と思っていたことが小学生にはわからなかったり、その逆もあったり。参加者の立場に立って、その目線で考えることの大切さを学びました。
- 参加者のいきいきとした表情を見て達成感を覚えました。

4年次プログラム
「プレゼンテーション演習」

「プレゼンテーション演習」概要

3年次に履修した「地域活性化総合実習」の中で自ら企画・実施した体験学習プログラムを振り返り、体験学習プログラムの意義を改めて考え、その中での経験が自分にとってどのような意味を持つのかを考えさせることを目的として、この科目を設置した。この科目は2年生後期から始まる「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」プログラムの最終段階のまとめを行うものとして位置づけられている。

学生は、この講義の中で、「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」における学習内容の総まとめを行うこと、自分の考えを広く伝えるためには、発表する内容を深く掘り下げ、発表方法を十分に吟味しなければならないことを実践的に学ぶことが望まれている。

自らの体験を深く掘り下げる手法として、この講義では「他人に自らの経験を説明する」という方法をとることにした。パワーポイントを利用した10分程度のプレゼンテーションに自らの主張を盛り込むためには内容を吟味し、発表の論旨を明確化する必要がある。その作業を通じて、自らの体験を深化することを期待した。そこで、広告プランニングを主要な業務とする株式会社オレンジフリーの吉田ともこ社長、蒲原久美氏をゲスト講師として招き、プレゼンテーション作成の実践的指導を依頼した。授業では、「地域活性化総合実習」での個人的な体験をまとめ、3年生に対するアドバイスとなるようなプレゼンテーションを作成すること、西宮市民を対象にした公開セミナーで「地域活性化総合実習」の意味と自らの経験について、イベントを企画したチーム毎に発表することの2つを課題にした。

学生は大学としても初めての試みとなる「プレゼンテーション演習」に積極的に取り組み、自分の個性を生かしたユニークで素晴らしい発表を行った。公開市民セミナーは2009年7月18日に西宮市大学交流センターで行ったが、参加者からも非常に高い評価を得ることができた。

この経験と達成感が、大きな自信になるでしょう。

株式会社オレンジフリー代表取締役
広告戦略プランナー、広報コンサルタント、神戸女学院大学非常勤講師
（2008 NIKKEI NET 広告賞・2008 企業ウェブグランプリ）
吉田 ともこ 氏

「プレゼンテーション演習」は、3年間の学習の集大成としての位置づけです。単にプレゼンテクニックだけを学ぶだけの場ではありません。

まず、学生は企画実施したイベント（体験学習プログラム）を振り返り、その過程で起こったこと、気付いたことを詳細に思い出す作業を行いました。そうすることで、自分の個性や能力、適性が把握できます。また、チームは個性の異なる者同士が助け合う場であり、多様な感性や能力をかけ合わせることでイベントを達成できたのだと理解でき、他者への感謝が生まれます。その後、2種のプレゼン―「個性を引き出し、自信をつける」ための個人プレゼンと「チームの強みを遺憾なく発揮し、競う」チームプレゼンの実習を行いました。翌年は社会人となる学生も多いため、ビジネスの場でも役立つデジタルプレゼンのテクニックやシナリオの作り方も添削指導しました。

驚いたのは、短期間で飛躍的に学生が伸びたこと。「型にはまりたくない」と徹底討論して独創的な試みをしたチームもあり、「チーム全員がやる気になれば、想像を超えた成果物を生み出せる」ことを実証してくれました。また、これらの経験を通して、「リーダー像は決して画一的ではない。自分の個性や能力を活かし、適材適所でリーダーとして活躍することが可能である」ということに多くの学生が気付きました。

現代は、多様な個性を持った人たちが協働しあっているネットワーク型社会です。

「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」プログラムを履修した学生たちが、自分の個性や能力を活かして活躍してくれることを楽しみにしています。

平成21年度 プレゼンテーション演習（4年次）

平成20年度　Project no.1

親子で作ろう ベジタブル！

● 発表内容

イベント概要、リアル体験談、まとめの3つで構成。リアル体験談ではチームのメンバーがイベント時のおそろいのピンクTシャツを着て劇を披露。

● 発表のポイント

3グループのうち最後の発表だったため、淡々とした発表の仕方では心に残らないのではないかと考え、リアル体験談の中で劇を実施。インパクトを与えると同時に、イベントの大変さ、難しさ、喜び、11人の絆など私たちの思いをたくさん伝えるのに有効な手段でした。そして、ただ単にイベントをやり終えたのではなく、学んだこと、感じたことを大切にし、新たな自分として前に進もうという決意を示すために、「続く」という言葉で締めくくりました。

● メンバーのコメント

人間科学部
心理・行動科学科 4年生
瀬尾（せお） 磨諭（まゆ） さん

プレゼンテーション演習では、1年間かけて行った実習をほんの数分にまとめあげないといけないことが最も難しかったです。1年を通して1つの目標に向かって11人という大人数で話し合う大変さ、イベントでのトラブルやそれを解決する苦労など、多くのことを伝えたいという強い思いがありました。そこで、インパクトと臨場感を与えられる劇を選択し、時間をかけて準備を進めていきました。考えや思いを「形」にするのは大変難しく、また形になったものをメンバーだけでなくイベントの参加者、プレゼンテーションの聴衆など関係者全員で「共有、共感」する重要性を痛感しました。

思いをうまく形にして他者に伝えることこそ、コミュニケーションの原点です。私たちはその方法をイベントとこの演習で訓練してきました。人前で話すのが苦手で聞いているばかりだった私が、いつの間にか堂々と意見を述べられるようになったのは、話す場と話せる雰囲気を作ってくれたメンバーのおかげでもあり、感謝の気持ちでいっぱいです。

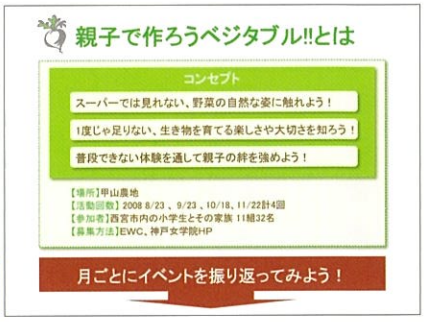
意見の口頭発表、人との協調、情報の共有の重要性を学んだことを力とし、社会に出たときに思う存分発揮したいと思います。

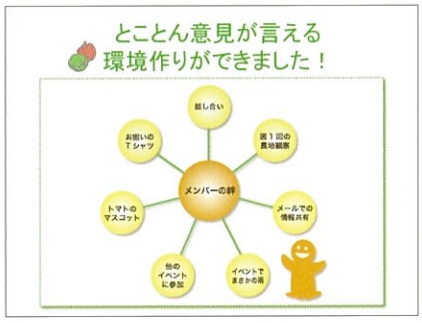
人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
森元（もりもと） 智子（ともこ） さん

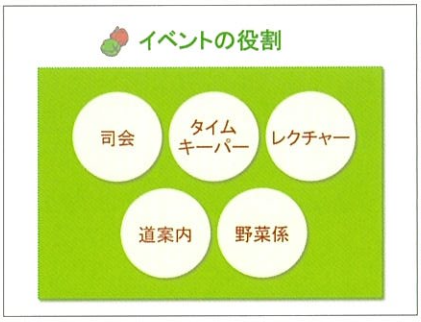
自分の思いを言葉にし、パワーポイントというツールに載せるのは簡単なことではありません。伝えたいことを簡潔かつわかりやすくストーリー化し、自分らしくまとめるのは本当に大変でした。多くのことを伝えたくても限られた時間では伝えきれません。コンテンツを盛り込みすぎれば、軸がだんだんぶれてしまいます。しかも、私は、頭の中でアイデアを練るのは好きなのに、それを人に伝えるために文章化するのが苦手だったため、なかなか形にすることができませんでした。試行錯誤を繰り返すうちに、ようやく、大切なのは相手の目線に立つことだと思い当たりました。私は常に「自分らしく」と考えていましたが、それが「自分本位に」ではなく、「相手に何を伝えたいか」を大切にし、表現方法や文章構成など相手への配慮を十分にしたものが本当の「自分らしいプレゼンテーション」なのだと気づいたのです。

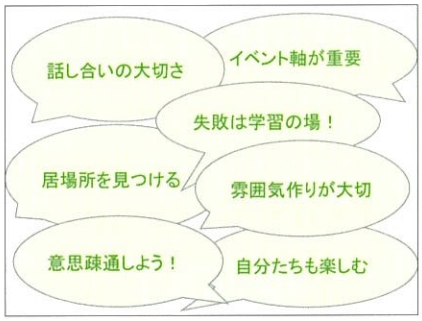
この授業で学んだことを今後、どのように活かしていけるかはまだわかりません。しかし、聞く側に立ち、物事を考えることはどの場面でも必要なことだと思います。自分の考えを言葉にするのが苦手な私にとって、それに気づくことができたのは本当に貴重な体験でした。

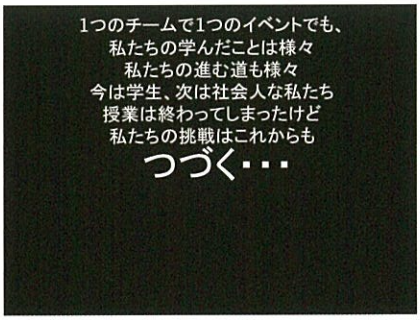
Project no.1　親子で作ろうベジタブル！　学外グループ発表資料（power point）





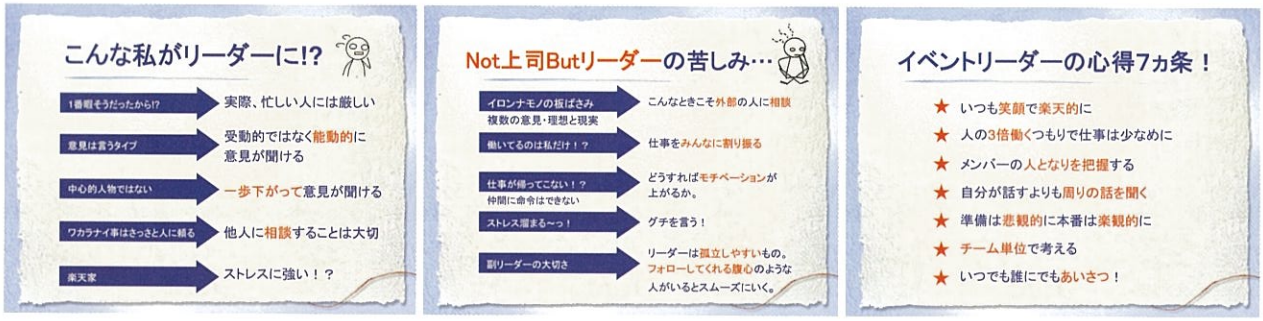






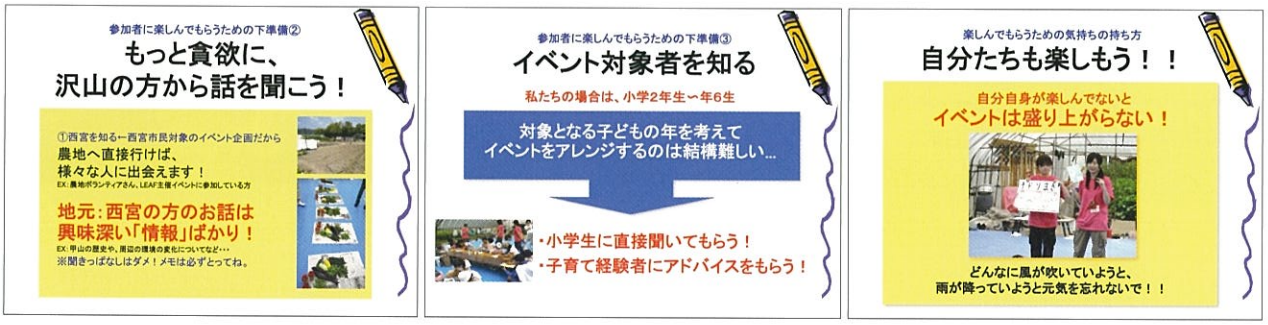
Project no.1　親子で作ろうベジタブル！　学内個人発表資料（power point）抜粋

「イベントリーダーの心得7ヵ条」
友田 麻子（ともだ あさこ） さん



「スケジュール管理が全てを決める！【上手な時間の使い方！】～農地班の秘密～」
中田 有美（なかた ゆみ） さん

「参加者に楽しんでもらうために！～もちろん自分たちも楽しんで！！～」
瀬尾 磨諭（せお まゆ） さん



平成21年度 プレゼンテーション演習（4年次）

平成20年度　Project no.2

早めのメタボ予防大作戦！！

● 発表内容

メタボリックシンドロームについてクイズを盛り込んで説明し、イベントの内容、実際のお便りを元にした感想を披露。3名が舞台で説明。

● 発表のポイント

理論的な説明が得意な人はメタボの説明、心のこもった体験の感想を述べるのはそういうことが得意な人というように、発表者の性格にあった内容を発表した点がポイントです。適材適所にして、聞く人に感動を与えるような内容を心がけました。また、ただ説明するのではなく、イラストを増やして視覚的にも楽しんでもらったり、クイズを盛り込んで参加型にしたりと、聞く人を退屈させない工夫も凝らしました。

● メンバーのコメント

人間科学部
心理・行動科学科 4年生
塩見（しおみ） 嘉奈子（かなこ） さん

もともと人前で話すのが得意ではなかったこともあり、自分が何を伝えたいのか、何を伝えられるのかを考え、パワーポイントという目に見える形にする作業は大変でした。しかし、この演習を通して、普段、自分の心や頭にある感情や思考など、形のないものを形にする作業を意識的に行っていないことを知り、どうすればよいのかを学ぶことができました。

プレゼンテーションとは特に難しい問題ではなく、日常的に自分が誰かに何かを説明するときに必ず必要なことだと今では理解しています。相手にわかりやすく伝えられるように、日頃からものを考えて行動、発言しようと思うようになれたことは大きな収穫です。

また、プレゼンテーション演習も含め、この現代GPプログラム全体を通して、私は忍耐力や人の話を聴く力、そして理解しよう、解決しようとする姿勢も身につけることができました。「もっとこうならよいのに」と思うだけでなく、「どうすればそうすることができるのか」と目的までの道筋も考えられるまでに成長でき、この授業に参加して本当によかったと思っています。

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
安廣（やすひろ） 琴恵（ことえ） さん

イベントを企画・運営したことで、地域活性化には継続できるイベントの計画が必要であり、たとえ小さなことであっても、長いスパンで取り組んでいくことが大切で意味があると、強く感じるようになっていました。その想いを伝えることができればと、プレゼンテーション演習に取り組みました。コンセプトを統一し、ターゲットを絞ること。そして、メンバー内での役割を分担し、効果的な発表方法を考えること。これが私たちの想いをしっかり伝えるための課題ととらえたものの、どうすればよいのか手探りの毎日でした。そんな私たちを導いてくれたのは、オレンジフリーの先生によるパワーポイントの効果的な作り方や発表方法などの指導です。思いつかなかった方法を知ることができたり、そこから新しい発想が生まれたり。プレゼンテーションもコミュニケーションであると改めて感じ、軌道に乗せることができました。このプログラムで、私は「0」から「1」への大きな一歩を踏み出せたと考えています。社会に出れば、さまざまな場面でコミュニケーションをとることや、主体的に取り組むことが求められるでしょう。そういったことにも自信を持って応えていきたいと思います。

Project no.2 早めのメタボ予防大作戦！！ 学外グループ発表資料（power point）

現代GPプログラム
地域活性化総合実習

早めのメタボ予防大作戦!!

メタボ対策班

イベントの概要

【内容】
食や運動、健康に関する
理解を深めるイベント
【対象】
メタボについて関心のある女性
【開催日】
2008年9月13、27日
【場所】
神戸女学院大学
（S-19／GⅢ、ケンウッド館）
【参加者】8名
【参加費】無料

メタボクイズ

A メタボリックシンドロームの判定は、腹囲のサイズで決まる。

B 一度ついてしまった内臓脂肪は、減らすのがむずかしい。

C メタボリックシンドロームでは、心臓病、脳卒中、がん等の危険がぐんと高まる。

メタボクイズ

A メタボリックシンドロームの判定は、腹囲のサイズで決まる。

B 一度ついてしまった内臓脂肪は、減らすのがむずかしい。

C メタボリックシンドロームでは、心臓病、脳卒中、がん等の危険がぐんと高まる。

メタボリック症候群は深刻な社会問題

40～74歳でみると、男性の２人に１人、女性の５人に１人が、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）が強く疑われる者又は予備群と考えられる者。

早めのメタボ予防大作戦！

イベントコンセプト
「地域の健康増進」を促し、
「地域の活性化」を促進する

・地域の活性化は、「健康」から。
ターゲットを家族の健康を担う「主婦層」に決定。
・神戸女学院大学という女性教育の場でこのイベントを行うことに意義がある。

脱メタボの味方は？

A バナナ

B バーベル

C ペン

「0」から「1」への大きな一歩

イベント終了後の大きな達成感
↓
行動こそが、自分を成長させる近道

地域の方のご意見・イベントへのご参加・
温かな助言…
大学の中だけでは学べない、
たくさんのことを学びました。

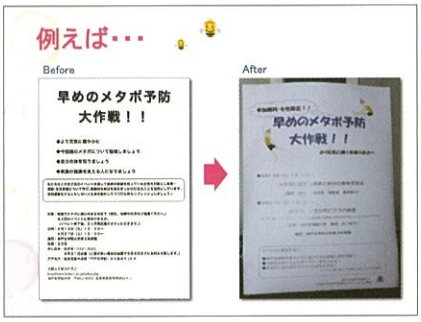
地域が活性化するためには

- 地域の課題に向き合う人がたくさんいること
- 地域と学生、大学が一体となった取り組みが継続しますように…

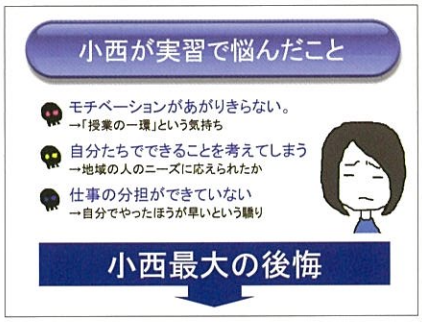
私たちは、これからも地域と向き合い、
課題を考えて行動していきます！

Project no.2　早めのメタボ予防大作戦！！　学内個人発表資料（power point）抜粋

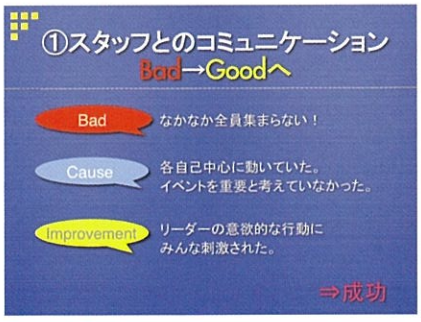
「『相手目線』の大切さ～広報活動を中心に～」
笠松（かさまつ） 彩（あや） さん

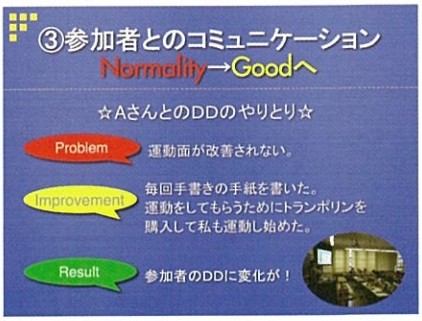


「小西の後悔　2008年度実施イベントの状況把握とセルフマネジメントに伴う対策と課題」
小西（こにし） くみこ さん



「FOR meじゃなくFOR you コミュニケーションが私にくれたもの」
尾野（おの） 安希子（あきこ） さん





平成21年度 プレゼンテーション演習（4年次）

平成20年度　Project no.3

みんなでecoクッキング！

● 発表内容

イベント概要、イベントまでの道のり、この企画にした目的や思い、そして参加者の方々と後輩へのエールを発表。イベント中に撮影したビデオも上映。

● 発表のポイント

ただ発表を聞いてもらうだけでなく、イベントの参加者、イベントの報告を聞いた方、そして後輩の心の中にも何か芽生えてほしかったので、バトンタッチといったニュアンスを含めて発表しました。またビデオ上映によって、参加者の笑顔や私たちの奮闘ぶりを臨場感をもって伝えたり、発表者を2人にして掛け合いのようなテンポのよい発表形式にしたので、楽しんでいただけたと思います。

● メンバーのコメント

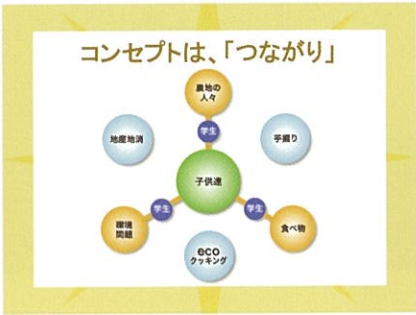
人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
池本（いけもと） 成美（なるみ） さん

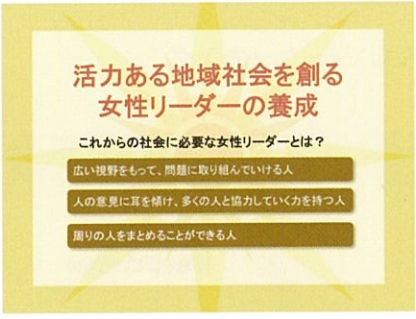
自分の言いたいことは山ほどあるのに、スライド上にはすべて載せられません。最初は、それでは伝わらないと焦りを感じ、言いたいことを何とかスライドに並べようと悪戦苦闘。何を文字にするのがベストなのかよりも、1つでも多く載せることを考えていたのです。ところが、ある日、拝見した先生の見本プレゼンに私は強く引き込まれました。相手をいかに納得させ、夢中にさせるプレゼンをつくるには、たくさんの言葉選びとレイアウトの仕方があることを教えてもらいました。そのおかげで、これは絶対に文字にして載せるべきもの、ここは自分の口で説明した方が効果的である、など言葉を厳選できるようになっていきました。ただ思いを述べるだけでは相手に正確に伝わらず、心も動かせません。プレゼンテーションに限らず、日常生活の中においてもです。そのことを心にとめ、どうすればよいか頭の中で練り倒し、言葉選びをしていきたいと思います。また、このプログラムを通して味わったすばらしい達成感を忘れず、社会に出ても世の中の問題に目を向けて、関わりを持つ人間でありたいと考えています。

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
伊賀（いが） 梓（あずさ） さん

私たちのチームは発表テーマを「つながり」とし、私たちのイベントをただ報告するだけでなく、そこで取り上げた環境問題や食べ残しの問題など、さまざまな問題が自分にも関わっているのだということを、プレゼンテーションを聴きに来てくださった方にも感じてほしいと考え、準備に取り組みました。その準備の中で一番大変だったのは、パワーポイントを使ったスライドを作ることでした。見やすく、わかりやすく、しかもインパクトを与えられるものを作ろうとしても、なかなか思い通りにはいきません。そんな状態から望むような形へと持っていけたのは、効果的なスライドの作り方や、心をつかむ文章の作り方を教えていただいた授業のおかげです。なかでも文章の中に一般論だけでなく、身近な視点から捉えたことを入れると、聴いている人々の興味・関心をひきやすいというアドバイスは大変ためになりました。
私はここで学んだ手法を、早速、卒業論文に活かすことができました。社会人になってからもきっと役に立つという自信にもつながり、この授業は私にとって非常に有意義なものであったと感じています。

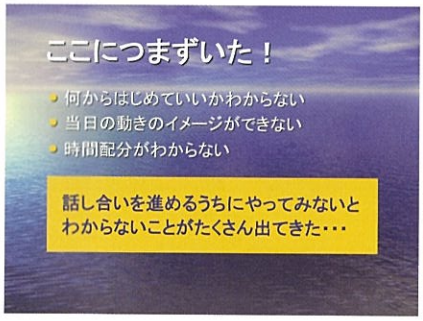
Project no.3　みんなでecoクッキング！　学外グループ発表資料（power point）

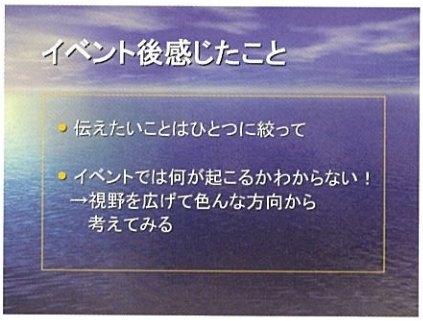


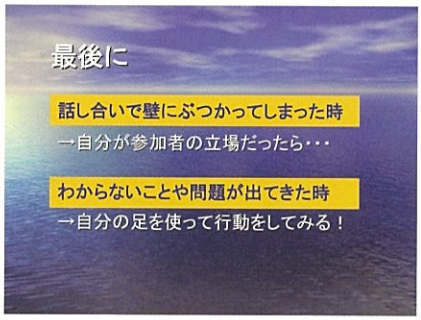


Project no.3　みんなでecoクッキング！　学内個人発表資料（power point）抜粋

「行動力を磨け」
片山（かたやま）　翠（みどり）さん

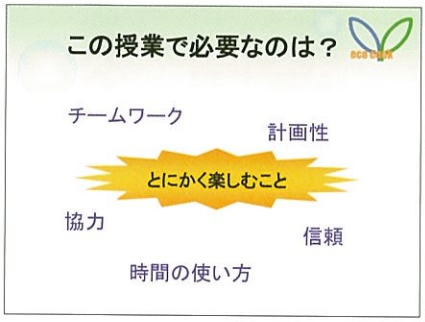


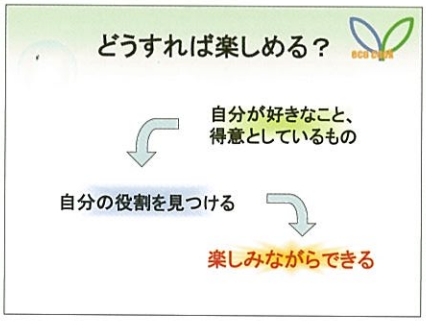


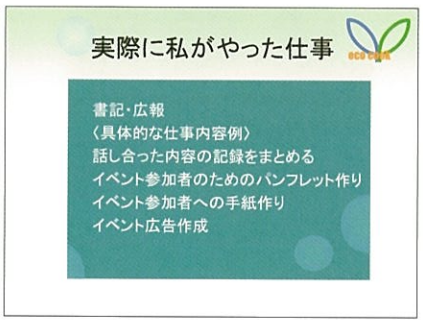


「バトンタッチ　～これから総合実習する皆さんへ～」
池本（いけもと）　成美（なるみ）さん

「私にできることは何？　Team:みんなでecoクッキング！」
石田（いしだ）　未来（みき）さん

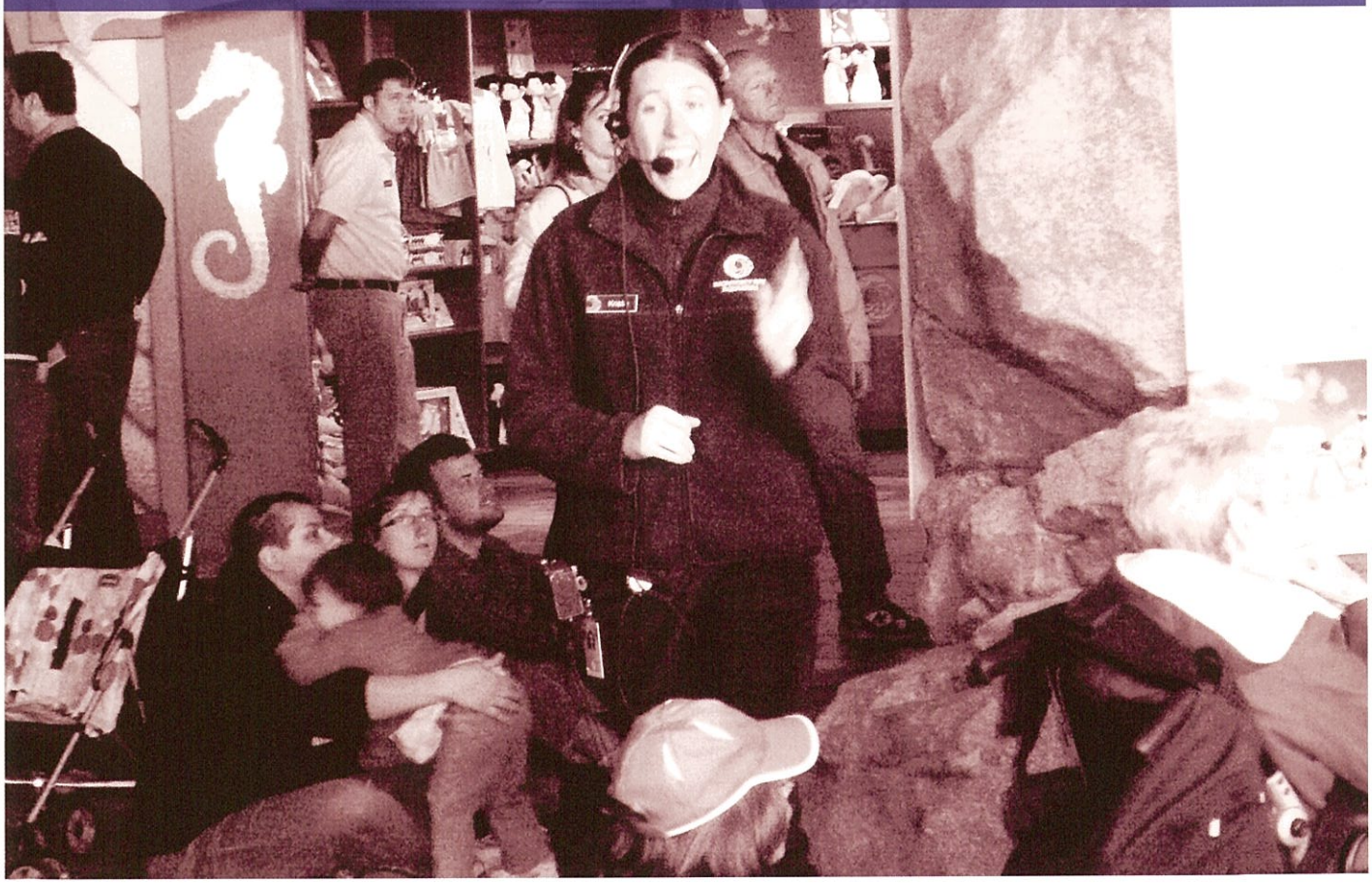






外部交流活動

学外での実績発表報告・海外レポート



学外での実績発表についての紹介

本取組を進めるにあたっては、広く情報を発信することが求められた。取組の概要、学生たちの活動を専用ホームページ（http://humangp.kobe-c.ac.jp/university/）で情報発信した以外にも、担当教員、受講学生が地域の会合に出席して、活動内容を報告した。本取組は地域との連携による人材養成が主たる活動内容であるため、特に西宮市やNPO法人LEAFが主催する市民向けの啓発活動には積極的に参加し、本取組の概要と学生たちの活動内容を講演で紹介したり、ポスター発表を行ったりした。さらに、「プレゼンテーション演習」の一環として本取組の受講生自身が主催する西宮市民向けの公開セミナーも行った。

海外を対象にした実績発表も積極的に行った。本取組で調査した米国バーリントン市（バーモント州）では行政、大学、NPO法人の関係者に本取組の概要を説明し、お互いの地域でのESDの進め方について意見交換を行った。また、JICA研修員の神戸女学院大学訪問という機会を利用して、アジア・アフリカ地域、大洋州、チリの環境教育、ESDに関心をもつ政府関係者、大学関係者にも本取組の概要と神戸女学院大学における女子教育について講演した。2009年には担当教員がアジア諸国を回る機会を得たため、アジア諸国の6大学において、女子学生を対象に講演し、本取組の概要を紹介した。

このような実績発表と参加者との質疑応答によって、本取組の有効性を改めて確認できた。また、1年目に比べると「地域活性化総合実習」で企画した体験学習プログラムへの参加希望者が飛躍的に増えるなど、この取組の西宮市民への浸透も図ることができた。さらに、大学院人間科学研究科において、2009年から始まったアジアからの留学生を対象にした「地域からESDを推進する女性リーダー」プログラム（文科省科学技術振興調整費助成プログラム）とも連動した広報活動を進めた。

1 西宮市主催の会合

◇2007年度EWC環境パネル展

日程：2008年3月5日～9日(展示期間)

出展数：西宮市内より491点、海外13ヶ国より88点

◇2007年度環境まちづくりフォーラム

日程：2008年3月25日

参加者・規模：西宮市民128名

◇2008年度環境まちづくりフォーラム

日程：2009年2月28日

参加者・規模：西宮市民170名

◇2009年度環境まちづくりフォーラム

日程：2010年2月27日

参加者・規模：西宮市民170名

以上内容は「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」に関するポスター発表

※2007年度環境まちづくりフォーラムは講演も実施

2 大学教育改革プログラム合同フォーラム

日程：2008年2月9日・10日

主催：文部科学省

参加者・規模：のべ約8000名

内容：「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」に関するポスター発表

3 LEAF主催の会合

◇JICA環境技術研修

日程：2008年10月15日

参加者・規模：アジア・アフリカ地域のJICA研修員
12名程度

◇都市近郊における農地の役割と
持続可能な地域づくりを考える
国際シンポジウム

日程：2008年12月16日

参加者・規模：西宮市民約100名

◇JICA環境技術研修

日程：2009年10月14日

参加者・規模：大洋州5ヶ国からのJICA研修員12名程度

◇JICAカウンターパート研修

日程：2010年2月17日

参加者・規模：チリからのJICA研修員12名程度

以上内容は「活力ある地域社会を創る
女性リーダーの養成」に関する講演

4 持続可能な社会のための環境学生会議第2回

日程：2009年12月5日

主催：大学コンソーシアムひょうご神戸

参加者・規模：阪神地域の大学生、
大学院生19団体

内容：「活力ある地域社会を創る
女性リーダーの養成」
に関するポスター発表

5 海外でのセミナー

主催：バーリントン市（米国）バーリントン・レガシー・
プログラム

日程：2008年8月18日

参加者・規模：シェルバーン・ファーム、バーモント大学、
バーリントン市関係者7名

主催：South China Normal University
（華南師範大学）（中国）

日程：2009年8月5日

参加者・規模：女子大学院生12名

主催：Universiti Putra Malyasia
（UPM）（マレーシア）

日程：2009年8月17日

参加者・規模：女子大学院生30名

主催：Sam Ratalangi大学（インドネシア）

日程：2009年8月19日

参加者・規模：女子大学院生20名

主催：Danang University of Technology
（ダナン工科大学）（ベトナム）

日程：2009年8月25日

参加者・規模：女子大学院生30名

主催：Miriam College（フィリピン）

日程：2009年8月27日

参加者・規模：女子大学院生20名

主催:De La Salle University, Manila（フィリピン）

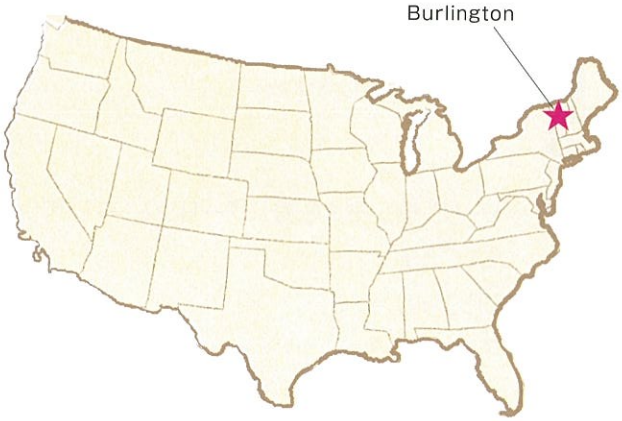
日程：2009年8月27日

参加者・規模：大学院生40名

以上内容は「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」に関する講演

Miriam Collegeのスタッフ・学生たち

海外視察レポート1 ―アメリカ バーリントン市―



1 はじめに

2008年8月15日～20日、西田昌司教授、寺嶋正明教授、水本誠一准教授は米国バーモント州のバーリントン市を訪れて環境教育の実際について調査した。バーリントン市は、市、NPO法人、大学が連携して環境教育に取組んでいることで著名であり、全米からも多くの人が訪れる地域でもある。バーリントン市では、1980年代から『持続可能な開発（sustainable development）』を推進するために、以下の6つの原則を定めた。(1)地域の経済持久力を高める。(2)利益と負担を平等に分配する。(3)若干の公的資金を投入して資源を活用する。(4)貴重な環境資源の保護や維持の重要性を認識する。(5)住民の完全参加を確保する。(6)NPO(またはNGO)による第3セクターを育成し、地域に不可欠なサービスを提供する。これらは現在の視点から見ても非常に合理的なもので、我々の進める教育活動と地域への貢献を考える上で非常に参考となる。また、これらの活動には多くの女性たちが積極的に関わっていることを知り、現代GPの取組で目指す「女性リーダー像」を明確なものとするためにも参考になると考えられた。

西宮市も「環境学習都市宣言」を通じて、バーリントン市と交流を続けており、お互いに持続可能な社会作りをめざしつつ、地域を活性化するための方策を模索している。今回の調査では、NPO法人シェルバーンファーム、インターベールセンター、バーモント大学を視察し、意見交換を行った。

2 ECHO

バーモント大学の施設であるLake Aquarium and Science Center ECHOを見学した。本施設はダウンタウンから歩いて10分程度のシャンプレーン湖岸にあり、地元の子ども、観光客らが気軽に訪問できるような施設である。ECHOという名称は施設のミッション：To educate and delight visitors about the Ecology, Culture, History, Opportunities for stewardship of the Lake Champlain Basin. から採られたものである。湖にすむ魚の生態を紹介するほか、湖を侵す外来生物の紹介、どうすれば環境を守れるかなど小学生以下の子どもを対象にした展示を行っていた。また、ミニ実験などの説明にはバーモント大学の学生や大学院生があたっており、これは環境教育におけるアウトリーチ活動の一環として行われていた（図1）。本学でも、西宮市の環境学習施設である甲子園浜自然環境センター、甲山自然環境センター、環境学習サポートセンターなどでのアウトリーチ活動を行い、講義に組み込むことも可能であると考えられる。

図1 バーモント大学大学院生による説明

3 シェルバーンファーム

シェルバーンファームは1886年にウエブ（Webb）家によって始められた農場を出発点にしている。先駆的な農業を研究、実践してきたが1970年代にシェルバーンをNPOにゆだね、以来環境教育の発展に大きく貢献してきた。シェルバーンファームのミッションはShelburne Farms' mission has evolved too: to cultivate a conservation ethic in students, educators and the general public by teaching and demonstrating the stewardship of natural and agricultural resources.とある。シャンプレーン湖岸の約5.6 km^2におよぶ広大な敷地内に Inn, Farmsなど多くの施設が点在する。シェルバーンファーム社長アレック・ウエブ氏、副社長メーガン・キャンプ氏と面会し、メーガン・キャンプ氏に場内を案内してもらった。アレック・ウエブ氏は農場を開設したウエブ家の子孫に当たる人物である。

訪問者はゲート付近の駐車場から、トラクターを利用したシャトルでメインのファームへと移動する（図2）。ファーム内にはチーズ工場、パン工場や小学生が使える教室があり、鶏、ウシなどを飼育していた。学校単位での利用や家族単位でレクリエーションに対応できるようになっている。ここで、訪問者への説明を行ったり、ファームの仕事をしたりするのは高校生、大学生などで、インターンシップ生として夏休みに4週間程度滞在しているとのことであった（図3）。インターンシップ生の多くは女性で、米国でも環境や農業に興味を示すのは女性の方が多くなってきている

とのことであった。また、ファーム内には多くの農場もあり、本格的な農場実習や農業体験もできるようにしてあり、こちらの方は大学院生などが利用するとのことであった。

図2 シェルバーンファーム教育棟に向かう見学者

図3 鶏を説明する学生スタッフ

4 バーモント大学とインターベールセンター

バーモント大学で環境教育プログラムを担当しているトーマス・ハドスペス教授を訪問した（図4）。ハドスペス教授の担当する科目について24ページにもわたる講義計画書をもとに講義の狙いと目的、進め方、評価の仕方など2時間くらい話をうかがった。それは現代GPの「地域活性化総合実習」と同様に「環境教育プログラムを自分で立案し、実行すること」をTerm Projectとし、その実施報告をレポートすることを求めるものであった。環境教育に役立つホームページサイト、副読本や参考書を多数シラバスの中に明示してあり、学生が学習しやすいような配慮が多く見られた。また、サービス・ラーニングという講義ではアウトリーチ、インターンシップを通じて、学生を地域社会のかかわりの中で教育しようとする科目であった。

図4 水本准教授・西田教授・ハドスペス教授・寺嶋教授

その後、市内のNPO法人であるインターベールセンターを案内してもらった。ここは市内を流れるWinooski川に沿った地域に20年前に創設されたNPOであり、約1.4 km^2の農地、コンポスト工場などと2.8 km^2に及ぶハイキングコース、サイクリングコースやカヌー、魚釣りなどが楽しめる場所を有している。もともとこの地は川の氾濫に襲われる地帯であり、農場などに利用されたものの一時期は車などの不法投棄の場所にもなっていた。1983年にウィル・ラープ氏がガーデニング用資材会社を設立したのをきっかけに、不法投棄された車やタイヤの撤去（1986年）、コンポスト工場の設置（1988年）、農家育成インキュベーターの開始（1990年）と地域の農業振興、食育、環境教育に取組む場所へと変貌した。現在はインターベール堆肥製造工場、若者の職業、生活技能習得のためのユースファーム、河川沿いに健全な森林帯を復活させるための苗を育成する保全ナーサリー、その有効性が全米でも認知された新規農業者育成プログラムなど種々な取組を行っている。その中でも地域住民が春先に出資し、農作業を委託して出資金に応じて毎週農作物を受け取るシステムは日本でも行いうるもので、「地産地消」を促進するものとして非常に参考になった。

5 バーリントン市庁舎

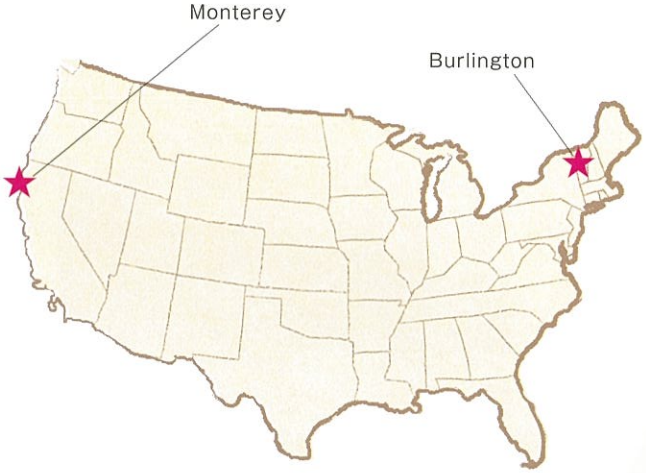
バーリントン市庁舎にバーリントン市が進める「バーリントン・レガシー・プログラム」の担当者ジェニファー・グリーン氏を訪ねた。シェルバーンファームのメーガン氏、シリロ氏、ダベル氏にバーモント大学のハドスペス教授を加えたミーティングにおいて、本学の現代GPの取組について寺嶋がパワーポイントを使って説明した。現代GPの取組の目的、方法などに強い興味を示してもらえ、市（行政）、NPO法人、大学が連携することの重要性を改めて確認することができた。また、今後、お互いの地域での取組を紹介し、研究して連携を図っていくことが大切であるという一致した認識をもつことができた。

6 おわりに

地域の人口や自然環境は大きく異なるが、地域住民が積極的に関わることで地域を活性化し、住みよい環境を創ろうとする姿勢は大変参考になった。我々から見れば、一見、大自然に囲まれた恵まれた環境で生活しているバーリントン市民ではあるが、経済的問題、人口の年齢構成、産業構造など多くの問題を抱えており、その中で地域を活性化するにはどのようにすればよいかを多くの人が考え、実行に移している姿を知ることができた。また、今回の調査旅行で多くの人と話をすることができ、相互に協力や連携を図っていく素地はできたといえる。

海外視察レポート2 ―アメリカ モントレー市・バーリントン市―

前列（左）Ramswamy学長　（右）川合真一郎学長



1 はじめに

2009年3月8日～14日に川合真一郎教授と寺嶋正明教授がカリフォルニア州モントレー市にある大学院大学Monterey Institute of International Studies (MIIS) とバーモント州バーリントン市を訪問調査した。MIISでは現代GPプログラムで学んだ学生が将来環境関係の知識を国際的立場から深めるような研修ができるインターンシップ先であるかを調べることが訪問目的である。また、西田教授、寺嶋教授、水本准教授が2008年8月にも訪問したバーモント州バーリントン市ではインターベールセンター、バーモント大学との交流をさらに深め、将来の教員、学生の訪問等が可能であるかを調べることを目的とした。

2 Monterey Institute of International Studies (MIIS)

MIISは語学教育、とりわけ同時通訳者養成を専門とする大学院大学である。神戸女学院とも協定を結んでおり、神戸女学院大学大学院文学研究科と同時通訳者養成に関連して交流を持ってきた。今回の訪問ではNon-Degree Program coordinatorのクリストファーソン氏の案内で施設見学を行ったあと、言語教育学部の学部長ジョーデナイス氏及びAcademic Advising & Career Serviceの部長であるミラー氏と同時通訳育成プログラム、環境政策に関する教育プログラムと将来の交流について意見交換を行った。MIISでは日本語ー英語、スペイン語ー英語、中国語ー英語、韓国語ー英語などの同時通訳者をめざす学生に高いレベルでの実践的教育を行うことに加えて、環境政策、経済政策に関して国際関係を視点に入れた幅広い見方のできる人材の養成を行っている。大学院課程以外にも短期間のコースも設けており、特に夏休みなどを利用したインターンシップの派遣先や受入れを拡大したいとの意向を持っていた。日本の環境政策について興味を持つ学生もおり、日本の環境政策と第二外国語として日本語を学んでいるとのことであった。主に、社会科学的な観点から環境に関することを学んでおり、神戸女学院大学でのフィールドワークを含む環境教育と補完性があるとの認識がもてた。双方の学生が夏休み期間中にそれぞれの大学で短期間学ぶことは十分に可能である。その後、学長のラマスワーミィ氏、東南アジア研究センター長のアカハ氏とも懇談した。

3 モントレー水族館

海洋環境に関する研究及び環境教育の分野で世界をリードするモントレー水族館を訪問した。生態毒性学を専門とする川合教授は魚類の収集と展示方法に関する観点から、現代GP取組責任者の寺嶋教授は子どもたちへの説明方法に関する視点から視察した。単に珍しい生物を多数集めるだけでなく、地域の環境に関連ある生物種をその生態がわかるように展示している様子には合理性と教育的配慮が見られた。例えば、食糧としての海洋資源を説明するコーナーではシーフードレストランでシェフから説明を受けるという状況設定で、子どもたちでも身近な問題として捉えられるように工夫していた（図1）。また、女性スタッフが、子どもたちや参加者にクイズや質問の受け答えをしてペンギンの生態を説明しながら、ペンギンに給仕している様子やAV機器を駆使した展示の仕方は大いに参考になった（図2）。高価

な設備はさておき、子どもたちが身近に感じられる状況を設定して、展示内容の要点を印象付ける方法は現代GPプログラムの中にも取り入れられる。

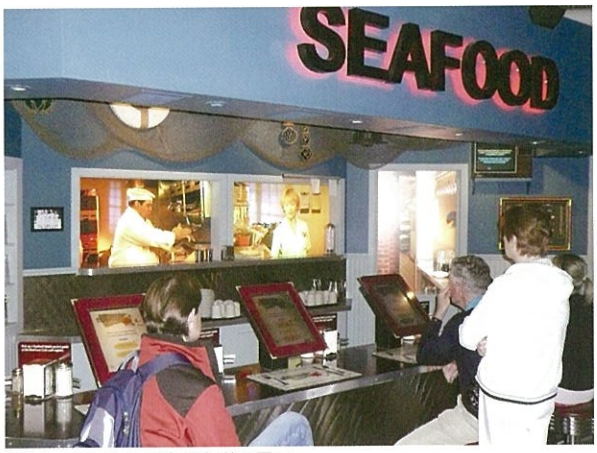


図1 レストランに見立てた説明展示

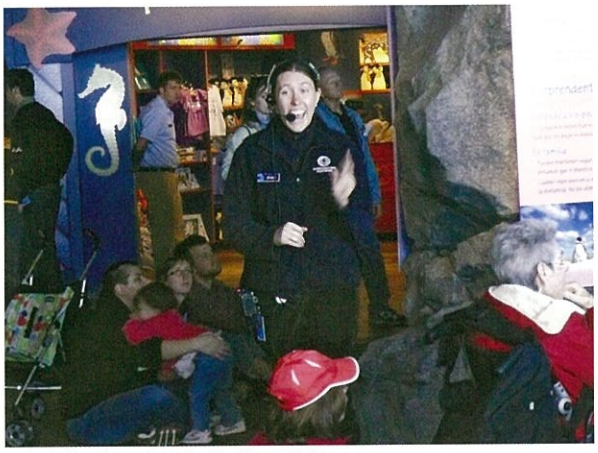


図2 女性スタッフによるペンギンの説明

4 バーリントン市

バーモント州、バーリントン市にあるインターベールセンターのミッチェル事務局長を訪問した。2008年8月に訪問した際に案内していただいたバーモント大学のハドスペス教授も同席して、インターベールセンターの概要と活動内容、バーリントン市での地産地消の進め方について解説してもらった（図3）。同センターを見学した後、8月に訪問したシェルバーンファームにも立ち寄り、ファーム内を車で見学した。早春とはいえ、気温は氷点下であったが、地域の幼児を対象にしたイベントが開催されていた。

バーモント大学の附置研究施設もあるECHO（Ecology, Culture, History, and Opportunities for stewardship）を訪問した。ECHOの概要については事務局長のフレッツ氏に説明を受け、施設の見学を行った。その後、8月に訪問した際には見学できなかった附置研究施設Rubenstein Ecosystem Science Laboratoryをマーズデン教授の案内で見学した。ECHOは環境教育のための施設であるとともに、水圏環境に関する研究施設でもあり、いくつかの研究室がECHOの建物内に設置してある。アメリカの5大湖につぐ6番目の湖であるシャンプレーン湖の生態系、環境汚染の現状と研究内容についてディスカッションを行いながら、研究施設をみてまわった。

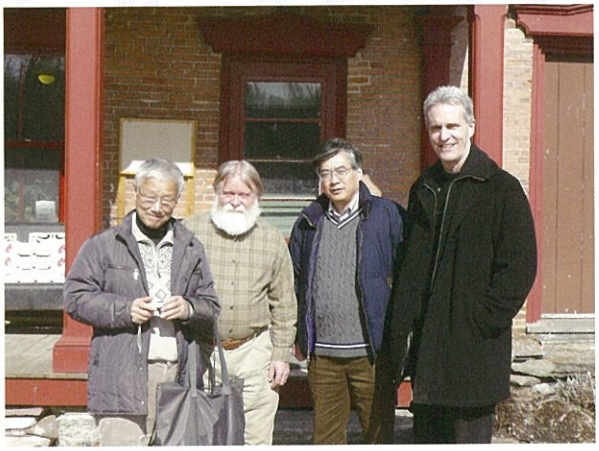


図3 インターベールセンターオフィスにて
川合学長・ハドスペス教授・寺嶋教授・ミッチェル事務局長

5 おわりに

MIISは環境教育に関しては環境政策など社会科学的な面に力をいれるとフィールドワーク、現代GPプログラムを通じて実践的、自然科学的な教育を進める神戸女学院大学とは補完性があり、学生のインターンシップを通じて国際性のある人材を養成できる可能性があることがわかった。また、バーリントン市の実践的環境教育、地域活性化を進める主要な人材との交流を深めることができ、GPプログラム履修後の4年生の夏休みに学生がインターンシップ生として滞在するには非常に良い場所であることを再確認した。モントレー市、バーリントン市とも治安面ではきわめて安心できる場所であり、学生が数週間を過ごすには最適であると考えられる。今後さらに、教員間の交流を深め、学生の交換を実現させたいと考えている。

海外視察レポート3　―アメリカ バーリントン市―

図1 シャンプレーン湖からみたバーモント市街

1 バーリントン市

2009年8月6日～12日、西田昌司教授、三宅志穂准教授、高岡素子准教授、奥田紗史美専任講師がバーモント州バーリントン市を訪れた。バーリントン市のあるバーモント州は、カナダ国境に接したアメリカ合衆国の北東部に位置しており、高緯度であることからスキー場が多く、アメリカ合衆国東部各州からのスキー客が訪れることで有名である。また五大湖に次ぐ全米第6位の湖水面積を持つシャンプレーン湖があり、水上スポーツを楽しむ避暑地として、夏季も多くの観光客がニューヨークやボストンから訪れている。しかし、観光業以外の産業としては、アイスクリームメーカーとして有名なベンアンドジェリーズを除いて有力な製造業をもたない。そのため農林畜産業のみが主要な産業となっており、地域の経済活動は活発とはいえない。そのために州民の所得も高くなく、貧困層が抱える様々な問題が明らかとなっている。さらにバーモント州は州の政策として紛争地からの避難民を受け入れており（Vermont Refugee Resettlement Program）、これらの難民居住地区でも貧困のもたらす様々な問題が顕在化している。

バーリントン市はバーモント州の州都ではないが、シャンプレーン湖の湖畔に位置するバーモント州で最も人口の多い都市である。古くは湖水を用いた運送業により、カナダとアメリカ東海岸を結ぶ交易の中心地となっていた。しかし水上輸送の衰退と共に、バーモント観光の中心地としての役割を果たすようになった。一方、バーモント州最大の人口を持つことから多くの農産、畜産物を受け入れ、一次産業が盛んなバーモント州で都市近郊の農業・畜産業を支える消費地としての役割も担ってきた。しかし全国的な輸送網の完備によって、いわゆる地産地消による地元産品に替わり、安価で画一的な大手食品メーカーにより全国的に展開された商品が消費されるようになった。そのために、農林畜産業が盛んでありながらも様々な食に関する問題が起こっており、また、結果として近郊農業の衰退をもたらしている。特に、前述の紛争地区からの避難民もバーモント近郊には多く、これらの人々の間では、伝統的な本国での食生活からの解離も含め食と健康に関する問題が頻発している。

2 バーモント大学

バーリントン市は、大学都市としても有名である。近郊を含めて多くの大学があるが、中でもバーモント大学はバーモント農業大学として創設され、バーモント州の農林畜産業と深い関わりを持ちつつ発展してきており、近年は生命科学領域での研究が注目を集めている。しかし、バーモント州全体の一次産業の地盤沈下に対抗すべく、如何に一次産業を支えつつ、地域を活性化させて行くかに関して様々な試みを始めており、全米におけるESDのセンターの1つとなっている。今回はRubenstein School of Environment and Natural Resourcesの環境プログラム担当トーマス・R・ハドスペス教授に、キャンパスを案内して頂きながらバーモント大学でのESDへの取り組みについて話を伺うことが出来た。

バーモント大学では、現在、計画的なキャンパスのリノベーションを行っており、その際、まず校地の本来の自然風土を生かした水利や植生を復活させるところから始めている。その上に建つ校舎も、ハード面での資材やエネルギー利用、水効率などへの配慮のほか、ゴミの分別や照明、換気など施設利用のソフト面でも様々な工夫が凝らされている。また、バーモント州でも外来種の侵入が問題となっていることから、庭園には教育用に外来植物を集めた一角があり、日本からの帰化植物としてスイカズラやクズなども植えられていた。このような取り組み全体への評価として、いわゆるグリーンビルディングの認証であるLEED(The Leadership in Energy and Environmental Design) のbronze認証を得ているとのことである。

図2 バーモント大学の地形を生かしたキャンパス設計

図3 大学カフェテリアにおけるゴミ分別の実例表示

3 インターベールセンター

ハドスペス教授は、大学と地域との連携の下に学生達が体験学習を行うサービスラーニングの中心メンバーとして、ESDに取り組んでいる。バーモント大学では“community-based learning”と命名しているが、地域の特定の企業、NPOと連携し、学生がインターンシップやアウトリーチ活動の実践を行うと共に、学問的な専門性を生かした大学での学びと連動させるプログラムである。サービスラーニングの1つとして毎年多くの学生が実践活動を行っているインターベールセンターを、専従コーディネーターの一人、Kate Westdijkさんに案内していただいた。

バーモント大学の北西約1kmに位置するインターベールセンターは、河口デルタ地帯を利用して新しく作られた農耕地にある営農施設であるが、主として2つの役割を担っている。1つは新規営農者を育成する施設としての役割で、農耕地は若い新規営農者に廉価で貸し出されると共に、中古の農耕機器がほぼ無償で提供される。さらに、施設には経験のある営農者も入所しており、その指導を請うことも可能である。もう一つの役割は、バーリントン市の巨大なコンポストとしての役割である。年間3万トンの廃棄物を処理し、堆肥を生み出している。これらの活動は、地域社会における一次産業を持続的に発展させる一連の試みであり、このほかにも、市民農園や収穫農園を運営しており、サービスラーニングの大学生のみならず一般市民も様々な形でこの施設と係わっている。

図4 市民農園（Community Farm）の看板

図5 市民農園でのブルーベリーの収穫

4 視察を終えて

このようなバーモント大学と地域NPOとの連携の中で、分断された地域と農林畜産業との絆が復活し、持続的可能な形で地域が活性化されつつあるように見受けられる。神戸女学院大学におけるGPプログラムにおいても、大学の専門性をどのように地域社会の活性化に還元して行くかが取り組みの重要なポイントの1つとなっている。バーモント大学では、大学教員の専門と関連した連携先の確保、個々の学生の学外活動と学内学習との連動がサービスラーニング成功の鍵になるとの認識の上に、ハドスペス教授の下で専従のコーディネーターがこれらの調整業務に当たっている。その結果、学生と教員、地域とが有機的に結びつけられ、実り多い成果が得られている。神戸女学院大学が中心となり西宮の地域と協働で行うESDにも、このような橋渡し役が重要な役割を担うと考えられることから、ESDのために大学と地域社会を結ぶコーディネーターの育成が重要となる。今後は、コーディネーターの育成にも重点を置いて、プログラム運営にあたる必要があることを痛感した。

学生手記

「現代GPプログラムを通して私たちが

平成20年度
「親子で作ろうベジタブル!」/リーダー

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
友田（ともだ） 麻子（あさこ）さん

困難を一つ一つ解決したことが、大きな自信に。

母が地域活動に参加しており、私も手伝うことがあったため、地域活性化に興味がわいたのが受講のきっかけでした。実際、参加してみると、他のイベントやお祭りの裏側、つまり企画や運営の部分が気になるように。今までも地域の活動に参加していたにもかかわらず、そんなことを考えたのは初めてだったので自分でも驚きましたが、ただのお手伝いから主催者側に立場が変わったことが大きかったのだと思います。

立場が変わると言えば、私たち学生は普段はどちらかというと「指示を受ける」「質問をする」立場にいます。ところが、イベントを運営していると全く逆の立場になり、参加者や協力者に「指示をする」「質問を受ける」ことが非常に多くなります。初めはとまどいましたが、いつしか甘えてはいられないと責任を強く感じるようになりました。特に私は、グループのリーダーであったため、その思いは強かったです。

このように主催者側になってみて初めて気づくことはいろいろありましたが、情報についての認識も大きく変わりました。実は、メンバー全員に正確に情報が伝わらず、変更があった時などは情報が錯綜し、混乱することも度々。そうなると物事が予定通りに進まなかったり、メンバー間の信頼感が崩れたり、ストレスを感じたりと、いいことがありません。そこで、全員で情報を共有できるようにメーリングリストを作成。たったこれだけのことで、いろいろなことがスムーズにいくようになり、情報の共有がいかに大切か、身にしみました。

このプログラムではさまざまな困難にぶつかりましたが、それを一つ一つ解決しながら進んでこれたことは大きな自信になりました。また、活動の中でさまざまな人と交渉したり接したりすることで、物怖じしなくなったり、物事を広く捉えられるようになったりしたこともプラスでした。今後はここでの経験を糧に、地域活性化につながる草の根的な活動をする準備をしていけたらと思っています。

平成20年度
「親子で作ろうベジタブル!」

人間科学部
心理・行動科学科 4年生
井手（いで） 恵（めぐみ）さん

責任能力を高めて、人とのつながりを守りたい。

心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科が共同で進めていく点に興味を持ったのが、このプログラム受講のきっかけでした。各学科の学生の考え方に触れ、混ぜ合わせ、新たなものを学んでいくというチャンスを逃す手はないと考えたからです。

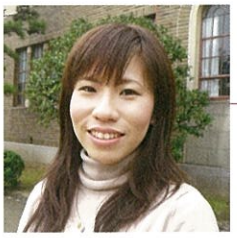
２年次の講義では、今まで目を向けていなかった分野、特に西宮市の子育て支援に興味がわきました。妊娠から出産後の具体的な子育て支援だけでなく、中高生を対象に正しい性の知識や意識を伝えていくことから子育て支援が始まるという内容に感心。これは社会問題である少子化にも関わりがあり、西宮市の活性化にも欠かせないと感じました。子どもを産み育てる可能性がある一人の女性としても、発達心理学を専攻している立場としても大変興味深く、今なお独自で学習を続けています。

このような意識を持ってから臨んだ３年次のイベントでは、地域の活性化に欠かせない家族の絆にも焦点を置きたいと考えました。最近は家族との交流の仕方がわからない人が多いと感じるからです。私たちのイベントは、なじみの薄かった農作業という領域に一歩踏み出し、ともに体験、感動することで家族との絆を深めたいと企画しましたが、少なくともそのきっかけにはなれたと思います。

そして、このイベントはまさに２つの学科の共同運営。想像通り、視点の違う意見には刺激を受けました。もっとも最初は緊張からスムーズにいきませんでしたが、消極的な人の意見もきちんと聞きながら話し合いを重ねるうちに、どんどんいいアイデアが生まれていきました。自分の意見が受け入れられることで自信も芽生え、お互いに素直に自分を出して理解し合えるようになり、イベントの成功につながったと思います。

このプログラムの経験は私を責任感の強い人間に成長させてくれました。人とのつながりの大切さを知り、それを守るには責任能力が重要です。今後も、ここで学んだことを生かし、成長していきたいと思います。

考えたこと」



平成20年度
「親子で作ろうベジタブル!」

人間科学部
心理・行動科学科 4年生
橋田（はしだ） 佳奈（かな）さん

自分で経験する重要性に気づき、夢へ一歩近づく。

臨床心理士を目指している私にとって、このプログラムは非常に有意義でした。臨床心理士には、論理や技法を学んだり、人から情報を得るだけでなく、実際に地域社会の中に入って、自分の目や耳で確かめながら地域の姿を知ることが重要であると気づいたからです。

３年次に全４回のイベントの企画・運営をし、次回へのフィードバックのために毎回アンケートを実施したのですが、この結果が私に課題を示してくれました。例えば、参加者の要望は想像をはるかに超えるものでした。要望に応えたい気持ちと、全てを飲み込むと本来の企画の主旨からずれる可能性があるという思いとが交錯し、私たちは困惑。何に応えて何を断念するか、試行錯誤を繰り返しながら、イベント運営には主軸と柔軟性の両立が重要だという教訓を得ました。逆に、私たちが苦労して考えたことが参加者の心に響いていると実感できたときは、本当に嬉しかったです。毎回の反応を知ることで一方通行にならず、企画側と参加側が感情を共有できたのだと思います。そして、自分の想像と現実とでは必ず相違があることを身をもって知り、自分で確かめる、経験する重要性を実感したのです。

私たちのイベントは地域の活性化への一つの架け橋になれたと自負しています。イベントに参加した子どもたちが将来、企画・運営する立場に立つかもしれません。自分の地域の良さや改善点を見つめるきっかけになったかもしれません。今すぐに結果が出なくても、地域を見つめる人の輪を広げるお手伝いはできたと思っています。

私自身も待っているだけでは何も始まらないと感じ、ボランティア活動を始めました。悪戦苦闘の毎日ですが、着実に自信にもつながっています。これらの経験を活かし、将来は、地域の中に自分が入って住民と同じ目線で見たり、逆に少し離れた位置から見たり、あらゆる角度から地域を観察し住民の心を潤していけたらと思います。

平成20年度
「早めのメタボ予防大作戦!!」/リーダー

人間科学部
心理・行動科学科 4年生
小西（こにし） くみこさん

リーダーとして未熟だった経験が、今の原動力に。

私は市民活動の中間支援を行うNPOに入っていたので、大学でも地域や市民活動のことを勉強したいと思い、このプログラムを受講しました。地域で活躍されている方々の講義は、想像以上に夢やビジョンにあふれ、私自身に「自分の住んでいる地域に対して何かアクションする」という気持ちを芽生えさせてくれました。

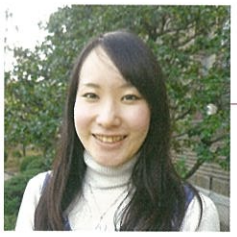
その第一歩として、３年生の総合実習でイベントを実施。しかし、企画の段階で苦戦を強いられました。当たり前のことですが、メンバーそれぞれ考えも個性も、モチベーションもさまざま。私はリーダーとしてそれをまとめなければなりませんでしたが、なかなか軌道に乗らず苦労しました。

実際のイベントは、周囲に支えられながら成功を収めることができましたが、これだけで地域の活性化につながるとは言い難いと思っています。しかし、このイベントでの私たち自身の経験が今後につながっていくのではないでしょうか。地域の活動に関心がなかったり、参加したことがないと、地域の活動に入っていくのは抵抗や戸惑いがあるかもしれませんが、一度経験している私たちにはそれがありません。地域に対して何かしていこうという、ひとりひとりの気持ちが地域活性化につながると思うので、今後もたくさんの人が何かしらのイベントに参加し、関心を持ってくれたらと願っています。

個人的にはリーダーとしてうまく動けなかったことが、今の原動力となっています。３～４年生のプログラムのときは「どうするのがいいか」「何が望まれているのか」「自分は何がしたいのか」と常に考えていました。マネジメントの難しさを痛感したり、自分のできなさ加減にうんざりしたり、いまだにああしておけばよかったと考えたり。私にとってのこのプログラムは決して楽なものではありませんでした。しかし、そうやって悩み、懸命にがんばったことに意味があり、次の活動や行動の糧になっていくと考えています。

学生手記

「現代GPプログラムを通して私たちが考えたこと」



平成20年度
「早めのメタボ予防大作戦!!」

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
笠松（かさまつ） 彩（あや）さん

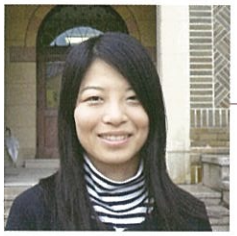
人の意見に耳を傾けることが、成長への第一歩。

もともとはNPOやNGO、地域活性化等の活動には興味がありませんでした。しかし、興味のない分野も学ぶことで、視野が広がり、新しい発見があるのではないかと期待し、このプログラムに参加しました。

すると、想像以上に興味の対象が広がり、今までは全く目に入ってなかった地域の行事のチラシや掲示に気がつき、さまざまな情報が入ってくるようになりました。不思議なもので情報が入ると自然に興味がわくように。そのおかげで、チャレンジ精神も旺盛になっていきました。

しかし、3年生で取り組んだイベントでは企画・準備段階から苦戦。チャレンジする気持ちはあっても、私もメンバーの大半もイベントの企画・運営は初体験で、何から始めたらよいのかもわかりません。毎週集まっても話が進まず、次週に持ち越しという繰り返しでした。そんな私たちに先生方やGP推進室の方々が意見やアドバイスをくださったおかげで、前に進むことができ、イベント終了時には参加者に「ありがとう」と言っていただくことができました。ゼロだった私が8ヶ月後には感謝されるまでに成長できたのを実感でき、本当に嬉しかったです。人の意見に耳を傾けることで、気づかなかったところに注目できたり、新しい視点に立つことができたり、1人ではできなかったことができるようになるのだと身にしみてわかりました。

このプログラムは始まったばかりで、まだ地域活性化につながったとは言い難いですが、今後もイベントを発信し続けることが活性化につながると思います。イベントを発信することで人が集まる機会ができ、人と人のつながりが生まれます。そのつながりが大きくなることで地域が活気づいていくのではないでしょうか。以前は全く興味のなかった私が、今では、将来はイベントを発信する側になりたいと思っています。こう思うようになったことこそ、私の成長の証かもしれません。



平成20年度
「みんなでecoクッキング!」/リーダー

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
植田（うえだ） 久珠子（くみこ）さん

仲間に支えられながら育んだ、行動力と責任感。

現代GPのこのプログラムの中で私の成長に最も大きな影響を与えたのは、やはり3年次のイベントの企画・運営です。最初は、学科も考えも違うメンバーが意見を出し合うばかりでイベントの主軸が固まらず、一進一退を繰り返すことに。GP推進室の方や協力先のNPO法人LEAFの方からのアドバイスを受けながら、ようやく実現にこぎつけました。この経験から、基礎をしっかり立てたうえでオリジナリティを出すことが重要であると実感。そのために様々な方の意見に耳を傾けることも大切だと知ることができました。

私たちは地産地消をテーマに、子どもたちと一緒に調理するイベントを行ったのですが、子どもたちの楽しそうな姿を見た途端、それまでの苦労が吹き飛びました。そして、この経験を機に家族と環境について考え、生産者の顔が見える新鮮で安全な食品を手に取ったり、無駄の少ない調理法を自分でも考えたりしてくれれば、小さくとも地域活性化に貢献できたのではないかと思います。

最初は興味本位で履修したこのプログラムですが、いつのまにか私も周りも本気でぶつかっていました。ゼロから何かを作り出すことの難しさ、それを形にし、成功させることの喜びを感じることができ、本当に貴重な経験となりました。

また、私は思いがけずリーダーになったのですが、自分に務まるのかと不安でいっぱいでした。しかし、仲間の存在に助けられながら、自分自身を成長させたいと奮起。自ら動き、考え、行動に移すことができるようになりました。一人ではイベントは成功しません。ともに一つのものを作り上げるには、仲間が信頼し合い、自らに責任を持ち、取り組むことが大切であると実感しました。

このプログラムを修了した今も、私はまだまだ未熟で、女性リーダーと呼べる存在ではありません。ここをスタートに、社会に出てから身につく経験値も得た後、地域に貢献し、活躍できる女性リーダーのような存在を目指していきたいと思います。

平成20年度
「みんなでecoクッキング!」

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
石田（いしだ） 未来（みき）さん

人に伝えることの大切さを知り、苦手意識を克服。

このプログラムの第一期で過去の実績がないなか、真っ白な状態からイベントを企画していくのは簡単なことではありませんでした。何をして、どう伝えたら理解してもらえるのか、なかなか良い案が出ず、前へ進むことができなかったため、ぎりぎりまでイベントの詳細内容が決まらない状態でした。そうやって迎えたイベント当日は、予想外にスムーズに進行し、逆に時間が余るというハプニングが発生。時間がおしたらどうするかしか考えていなかったため、即席のクイズでお茶を濁してしまいました。

イベントを企画するときは何を伝えたいのか、目的意識をしっかり持つこと、そして、あらゆる事態を想定して十分な話し合いをする必要があることを痛感。また、子どもの知識や感覚で理解できるように、子どもの目線で考える必要があることも学び、大変勉強になりました。

地域活性化には、この「伝える」ということが大切であると私は思っています。私たちがイベントで学んだことを後輩に伝えることで、さらに良いイベントができるはずです。子どもたちがイベントで学んだことを友達や家族に伝えれば、地域について考える人が少しずつ増えていくことが期待できます。伝えることから始まると思うのです。

4年生でのプレゼンテーション演習もやはり「伝える」ことがキーワードとなっていました。どうしたら、イベントに来ていない人に、イベントの楽しさや私たちの目的をわかりやすく、簡潔に伝えられるのか、最も伝えたいことをはっきりと印象づけるにはどうしたらよいのかを強く意識して行うことができました。

私は今まで、自分の意見を他人に伝えるのが苦手でした。ところが、このプログラムに取り組んでいくなかで、考えを他人に伝えている皆の姿を見ているうちに、自分も伝えたい、伝えようと意識が変化し、積極性も備わってきました。この経験を、これから仕事をしていく中で生かしていきたいと思います。

平成20年度
「みんなでecoクッキング!」

人間科学部
環境・バイオサイエンス学科 4年生
片山（かたやま） 翠（みどり）さん

自分がどうありたいかを常に意識するように。

2年次の地域活性化論で、さまざまな場所で働いている方々から直接お話を伺ったことで、私の中にある変化が芽生えました。それは、社会で働く方々の仕事内容や地域へのアプローチの仕方を学ぶうち、将来自分が社会に出たときに、どういった方法で社会に貢献することができるのかと考えるようになったこと。ちょうど就職活動を意識した時期でもあったため、社会人になったときの自分のあり方と、そのために、今、大学生として自分に何ができるのかを意識するようになりました。

また、3年次のイベントを企画する際には、経験していないためにわからない、決まらないということが多々あり、行き詰まることもしばしば。私は、自分が今までに経験していないということが悔しくてたまりませんでした。経験不足を補うために経験者のアドバイスを受けたりしましたが、なかでもLEAFが行っているイベントのスタッフを何回かやらせていただいたことが大きかったです。LEAFの方の話や動きをよく観察し、自分で体験することで、イベントの回数を重ねる度にできることも知識も増えていったのです。目の前のことだけでなく次のことを常に考えて動けるようになり、タイムスケジュールの立て方なども身についていきました。その結果、自分たちのイベントも無事成功させることができ、参加者が地域に関心を向ける初めの一歩につなげることができたと思っています。

自分にできることを見つけて一つ一つこなしていき、それを少しずつでも着実に増やし、新たなことに挑戦していく。それを繰り返していくことで、自分自身をもっと成長させることができるに違いないと、今、私は確信しています。これからも新たなことにチャレンジし、自分の可能性を広げていくという自分のスタンスを忘れずに行動し、このプログラムの第一期生として地域の活性化に貢献できるように、今度は社会に出て活動していこうと思います。

総括/今後の展望

NPO法人 こども環境活動支援協会（LEAF）

当協会は、地域の多様な主体や市民が連携し活動することで、地域課題や社会問題を克服していき、「西宮」が持続可能なまちとして発展していくことを目指し、「つなぎ役」として活動しています。こうした中で、大学との具体的な連携を模索していたこともあり、今回の現代GPプログラム「地域社会で活躍する女性リーダーの養成」に関する大学からの提案は、当協会や西宮市の環境まちづくりにとって将来の可能性を発展させる意義あるものと考えて、スタート時から外部支援団体の一つとして関わらせていただきました。

当協会事務局長が講師をした「NPOマネジメント論」や農地体験の支援を行った3年生の「地域活性化総合実習」は、西宮市や当協会が行っている諸活動や考え方を理解していた上で、次年度に地域とつながる具体的な活動をつなげるプログラムとなっており、2年間を通して学生の学びを理論と実践の両側面から継続的に支援を行うことができたことは、当協会にとっては大きな成果だったと考えています。

「地域活性化総合実習」での支援においては、当初不安に感じていたこともありました。例えば、学生の農作業体験に対する興味関心の高さや、イベント前の農作業を学生がどれくらい主体的にかつ継続的にできるのかということ。また、収穫物を栽培することや収穫する作業だけが目的化されてしまい、活動本来の目的や参加者に伝えたいことなどをうまく整理し運営できるだろうかといった点です。

しかし、農地での実践活動の中では、学生にとって初めて任される社会的な活動だということもあり、緊張した雰囲気でしっかりと話し合いを行っていたように思います。また、話し合いの経過報告と問題点に対する相談を持ちかけてくれていたことで、農地での作業スケジュールから、イベント当日の動きにいたるまで、当初考えていたよりも随分スムーズな関わりと活動ができたのではないかと思います。

2年間にわたっていくつかのチームに関わらせていただいた中で感じたことは、それぞれ特徴の異なるチームでしたが、それぞれのチームが特徴を活かした企画・実施と問題解決をできていたこと。どのイベントも、単なる農体験イベントに終わることなく、環境や食育といった分野も取り入れながら、参加者の方々とのコミュニケーションを大切にし、充実した内容になっていたと思います。参加された皆さんも大変満足されていたようです。また、このイベントを通じて参加者の方々の中に「神戸女学院大学」という大学に対する興味が生まれたことも、大きな成果の一つではないでしょうか。

一方、私たちにとっても、今回の提携は大変良い経験になりました。学生の方々との関わりの中で、自分たち自身の行っている活動を客観的にみることができたこと。また、これまでの農地の活動では関わりの薄かった世代である大学生の方々が農地に足を運んで、農作業をしているといった状況も、農地活動の活性化につながったと思っています。

そして、何よりも感謝していることは、この現代GPプログラムを受講した初年度の学生が平成22年度から当協会に就職してくれることになったことです。現代GPプログラムの終了後も神戸女学院大学では、このプログラムは継続されると聞いていますが、平成22年度の農地での実践活動などでこの卒業生が、支援する側として関わってもらうことができたということが大変良かったと思っています。

本プログラムは、2年生の時に学内で学んだことを、次の3年生では学外へ出て実践でき、とてもスムーズな流れで実践的学びにつながっていると思います。また、4年生で自分達の活動を振り返り、まとめた成果を第三者に伝えることで、客観的に自分達の活動を捉えることができるという部分も大変優れた部分だと思います。特に、3年生の「地域活性化総合実習」は、なかなか学生生活の中で関わる事のない人たち（スタッフやボランティアの方々）とコミュニケーションをとりながら、自分たちでイベントを企画し、問題解決しながら実践していくプロセスが大変重要な経験になると思います。また、子育て世代の家族との関わりも、今の地域社会の現状を理解する上で、またとない機会だと思います。

今後も、大学が「地域活性化」という課題を、NPOなどと連携しながら具体的な実践活動も盛り込んで授業の一環として取り組むことは、学生に社会を体験的に学ばせる極めて有効なことだと思われます。様々な主体と連携した今回の現代GPプログラムを今後も継続していただき、地域に根差し、地域に貢献できる大学として具体的な成果を地域に残していけるよう、さらに地域との密着度を高めたプログラムに向けて、協働の取り組みをさせていただければと考えています。より多くの団体との連携を進め、活動の広がりをつくることを通じて、持続可能な地域づくりに向けた人材育成と地域活性化を両立させるすばらしい活動へと発展していくと思われます。

現代GPプログラム取組責任者　人間科学部 教授　寺嶋 正明

神戸女学院大学人間科学部では「自然とこころと体を科学する」をモットーに西宮地域に関係の深い分野で学際的な教育・研究を行ってきた。例えば、親子関係、老人介護や西宮地域での環境調査、環境汚染問題などが卒業論文の研究テーマとして取り上げられてきた。この取組ではこれらの実績をもとに、学科を超えた学部共通の新しい教育プログラムを構築することとし、その教育目標を将来地域創りのリーダーとして、地域の抱える課題に積極的に取り組む活動ができるような人材を育成することとした。

教員個人レベルでの教育実績は十分にあるものの、学部共通の教育プログラムとしてどのように運営していくか、学生のニーズにマッチした教育内容を組むことができるか、外部の協力団体とどのように連携していけばよいのかなど、人間科学部として初めての取組であったため、課題も多く、手さぐり状態でのスタートであった。この取組では「学生が教員の指示通りに動くこと」ではなく、「学生が自ら考えて自らが動く」ことが最も重要な点であったが、学生は時には反発しあいながらもお互いに協力して、教育目標を達成してくれたと高く評価している。この取組において、外部の協力団体との関わりを深めていくにつれて、学生が成長していく過程が目に見えてわかった。また、GP推進室を設置し、専任スタッフを置いたが、学生へのサポートを献身的に行ってくれ、この取組を成功させる上で大きな力となった。

この取組では、西宮市、NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）、神戸女学院教育文化振興めぐみ会（本学同窓会）との協議会を設立し、学生の教育を進めるうえで多大な協力をお願いした。特に、NPO法人LEAFには農地の管理と学生に対する農業指導を担当していただいた。これらの団体の協力があってこそ、実り多い教育をおこなうことができたものを深く感謝している。この取組の特色は「学生が自ら考え、自らで動く」ことで「自ら学ぶ」ことである。外部の協力者に「自分たちの考え」を自ら明確に説明して、教えを請うことでも大きな教育的効果が見られた。3年生の「地域活性化総合実習」では体験学習プログラムに参加した西宮市民との交流によっても学生が大きく成長したことは予想を超えた成果であった。外部の協力団体にとっても、学生のみずみずしい感性に基づいたアイデアや企画に触れることがよい刺激になっており、外部協力団体との双方向的な協力関係が築けたこともこの取組の優れた点の一つでもある。

現代GPの助成期間終了後に、学部全体の教育プログラムとしてどのように定着させて、継続させるかが、この取組の進行とともに新たな課題として浮かび上がってきた。そのためには多くの教員が過重な負担とならない形で参画できる仕組みを作り上げる必要がある。2年生後期から始まるクラスに担当教員を一人決め、その教員が4年生まで持ち上がっていくことで、学生とともに3年間この取組に参画するような形にし、学科長を含む5名の教員がそれをサポートする体制を作ることにした。また、4年生の講義には3年生担当の教員が副担当として授業に参加し、3年生の講義には2年生担当の教員が副担当として授業に参加するようにした。こうすることで、その次の年度への引き継ぎを円滑にできるようにした。

本学大学院の人間科学研究科では平成21年度より文科省科学技術振興調整費の交付を受け「地域からESDを推進する女性環境リーダー」という教育プログラムを開始している。このプログラムではアジア各地から大学院生を研修生として受け入れ、日本人大学院生とともに、NPO法人LEAF、西宮市などへのインターンシップを通じて、将来アジア各地でESDを推進することのできる女性環境リーダーを養成しようとするものである。今後、現代GPの履修者の中から大学院に進学して、このプログラムに参加する学生が出てくることを望んでいる。また、現在は人間科学部の教育プログラムと位置付けているが、この取組を全学的な副専攻プログラムにすることで、文学部、音楽学部の学生も受講できるように改革する予定である。これにより、この取組が神戸女学院大学の人材養成プログラムの柱の一つになることを期待している。

（様式１）

整理番号	1	－	1	－	1	－	3	－	2	8

平成１９年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」申請書（様式）

申請区分	①単独　２共同	設置形態	１国立　２公立　③私立
大学・短期大学・高等専門学校名	神戸女学院大学 ※ 共同申請の場合は主となる１つの大学・短期大学・高等専門学校名を記入		

申請テーマ番号	１	取組期間	平成　１９年度　～　２１年度
取組名称（全角２０字以内）	活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成 副題（サブタイトル）－西宮市・同窓会・NPO法人と連携した実践的人づくり		
取組学部等	人間科学部		
キーワード（重要度の高い順に５つ以内）	地域創りリーダー　持続可能な開発のための教育　活力ある地域社会 自然とこころと体　親子で参加する体験学習		

取組の概要（＊４００字以内）

神戸女学院大学人間科学部は「自然とこころと体を科学する」をモットーに学際領域の教育を行っている。本取組では地域の多くの課題に積極的に取組む市民が沢山住む活力ある地域社会を実現するため、西宮市、NPO法人こども環境活動支援協会、神戸女学院教育文化振興めぐみ会（本学同窓会）と連携し、将来の地域創りリーダーとなる人材を育成する。環境学習都市宣言を行った西宮市は、「持続可能な開発のための教育（ESD）」促進事業地域に指定され、ESDを推進している。本取組では２つの学科で異なる専門科目を学ぶ学生が協働し、西宮市のESDに協力する「西宮市民が親子で参加する体験学習プログラム」を企画し、外部支援団体と折衝して実施する。本取組の実践的教育を受けた履修生は「地域の課題」を様々な視点から考える必要性を明確に自覚し、本学卒業後も「めぐみ会」の一員として日本各地で地域創りリーダーとして活躍すると期待できる。

（取組の概要文字数：３９７字）
（取組実施対象地域：兵庫県西宮市　　）
（地域再生計画との連動の有無）　有・㊥

（様式２）

１　取組について【６ページ以内】

（１）取組の趣旨・目的　［申請書作成・記入要領P.３参照］

神戸女学院大学人間科学部では「住みよい地域社会を作るために解決するべき課題に積極的に取組もうとする市民が多く住み、行政と市民が互いに協力し合っている社会」を活力ある地域社会と考えている。地域社会が抱える課題には、自然環境の保全、市街地での環境の維持と管理、ゴミや排水の処理などの「自然と住環境の健康」に関連すること、子育て支援と幼児の心の発達、対人関係、家族間コミュニケーション、学校教育サポートなどの「こころの健康」に関すること、食品の安全性や健康な体を作るための食事、病気や老人介護などの「体の健康」に関することがあげられる。人間科学部では１９９３年の発足以来、「こころと体と自然を科学する」をモットーに、様々な領域で活躍する教員（様式４資料１）が、本学の理念であるリベラルアーツ＆サイエンスに基づく教育を学生に行うことにより、多様なものの見方ができ、論理的な判断ができる人材を養成してきた。

〔本取組の社会的ニーズ〕　地域を活性化し、地域創りを推進する「人づくり」に関しては「地域づくり支援アドバイザー会議」から地域を活性化する人材養成に関する提言が発表されている（平成 16 年 8 月 23 日）。提言では『地域コミュニティを回復させ、活気ある地域を取り戻すためには、社会の問題を自分自身の問題として考える新しい「公共」の観点に立った自主的、自立的な地域づくりの取組みと、その地域に関わるあらゆる主体との協働による、地域づくりへ向けた継続的な活動が必要である。』ことが強調され、人材育成の課題として、『リーダーの専門性の欠如』、『リーダーを育成するシステムの無い』ことが指摘され、『専門的なリーダーを育成するための学習方法の確立』や『実践的な学習機会の提供、カリキュラムの開発』が必要な方策として提言されている。

〔西宮市との連携〕　本学が位置する西宮市は平成 15 年 12 月に我が国で初めて、「参画と協働の環境学習を通じて、21 世紀の世界に誇ることのできる持続可能な都市を実現」することを目的に「環境学習都市宣言」を行い、NPO 法人こども環境活動支援協会（LEAF：Learning and Ecological Activities Foundation for Children）を中心に地元企業の協力も得て、子供たちの環境学習を通じた地域創りを進めてきた（様式４資料２）。さらに、西宮市、NPO 法人 LEAF は文部科学省、環境省が中心に進めている「持続可能な開発のための教育（ESD: Education for Sustainable Development）」にいち早く対応し、環境教育を軸に福祉教育、こどもの人権教育にも教育内容を広げている。本学学長の川合真一郎（生態毒性学）は ESD 活動に協力する「環境計画推進パートナーシップ会議」の委員長を務めている（様式４資料３）。本学部では２つの学科が教育課程の中で、西宮市と緊密に連携した教育を行い、西宮市の活性化に継続的に協力してきた。環境・バイオサイエンス学科の教員・学生は環境調査や住民と一体となった環境保全の取組みや他大学とも連携した食品の安全と安心に関する市民対象セミナーなどを卒業研究や演習科目の一環として行ってきた。また、心理・行動科学科の教員・学生は近隣地域の児童相談所や病院福祉施設で学外実習を行ってきた（様式４資料４）。さらに、心理・行動科学科の大学院は臨床心理士養成課程としての役割も果たしているが、神戸女学院大学大学院人間科学研究科付属の心理相談室では担当教員・大学院生がこころのケアを必要とする地域の児童や家族の相談にあたっている（様式４資料５）。

〔本取組の目的と養成する人材像〕　本学部ではこれまでにも地域のリーダーとして活躍している人材を多く輩出してきた。本取組の申請にあたり、本学部の人間科学に関する教育の延長線上に「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」があることを学部内で再確認し、学部をあげて本取組を推進することを学部教授会で決定した。本取組では実践的な知を育むことで、（1）地域に根ざした課題を見つける能力、（2）幅広い視野から問題の解決を考える能力、（3）多くの人と協働して事に当たる能力、（4）地域のリーダー的役割を果たす能力を学生に身につけさせることを目的とする。そのために、定員30名の「地域創りリーダー養成コース」を開設することとした。このコースでは両学科の教員の専門的助言を受けながら、専門教育を受けている両学科の学生（３年生）が協働して、「西宮市民が親子で参加できる体験学習型プログラム」の企画と実施を行う。この実習では学生に、地域を活性化する事業の企画立案、外部支援団体・体験プログラム参加者とのコーディネート、活動報告などを実際に体験させる。そのため、西宮市、NPO法人LEAF、神戸女学院の同窓会組織でもある社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会（めぐみ会）の西宮中央支部・西宮西支部、西宮東支部とすでに提携を結んでいる。

〔本取組の成果と効果〕　本取組を通じて、ESDの理念を理解し、多様な面から地域創りに貢献するという明確な視点を学生に持たせることができる。西宮市の活性化に寄与できることは言うまでもないが、連携・支援団体の担当者にも本取組との連携を通じて「こころと体と自然を科学する」という視点から自らの活動を再認識してもらうという再教育・生涯教育の側面を持つ。さらに、卒業後、学生は社会経験、生活体験を重ねていくことになるが、めぐみ会のネットワークを通じて、日本全国で活力ある地域創りの女性リーダーとして活躍することで、本取組の成果を全国に広めながら、社会のニーズに応える効果を持つ。

（２）取組の実施体制等（具体的な実施能力）　［申請書作成・記入要領P.3参照］

・取組への参加予定人数（教員　10人・職員　3人・学生　30人）

【教育課程と教育方法について】

本取組の概要を図１に示した。本取組を「地域創りリーダー養成コース」と名付け、様式４資料６の授業科目から必修科目となる新規開講４科目（10単位）を含む24単位を取得した学生に修了証を与える。

２年生では「現状と問題点を知る」ことを教育目標として、２科目の講義を新規開講する。「地域活性化論」では、地域活性化に取組む連携・支援団体担当者の講義を聞き、地域活性化活動の現状を知る。講義には地域創り活動の見学などを含み、３年生の実習で取組む課題を自ら発見し、そのプランをレポートとして提出する。めぐみ会会員は学生にとっては身近なロールモデルとなるものであり、その果たす役割は大きい。また、「NPOマネジメント論」ではNPO法人の立上げ、マネジメント、広報活動に関する知識を学ぶ。

３年生では本取組の中核である「地域活性化総合実習」に取り組む。自然を合理的に説明する方法を学ぶ環境・バイオサイエンス学科の学生と「こころの働き」や人とのコミュケーション手法を学ぶ心理・行動科学科の学生が協働し、「西宮市民が親子で参加する体験実習プログラム」を連携・支援団体と共同で実施する。「自ら問題に取組む」ことを教育目標として、学生自らが企画し、体験学習プログラムの作成、連携・支援団体との折衝、

体験学習の実施を行う。通年の講義とし、講義時間にとらわれない教育活動を展開する。教員は国内の ESD 推進地域の状況を調査した上で、アドバイザーに徹して、学生が「活力ある地域を創る活動」を行うことの難しさ、楽しさを実践的に学習できるようにする。

4年生では「さらに深く研究し、成果を発表する」ことを教育目標に「プレゼンテーション演習」を新規開講する。ホームページのコンテンツ作成を通じて、自らの活動を広く発信する有効な方法を学ぶ。また、「地域活性化総合実習」実施報告を、西宮市が推進する生涯教育の拠点である西宮市大学交流センターで行い、西宮市民に向けて直接呼びかけ、討論することで活力ある地域社会の実現をめざす。さらに、それぞれの専門分野での卒業研究へと展開することも可能である。本取組を経験した4年生を TA として採用して2年生、3年生へアドバイスをすることでさらに理解を深める。

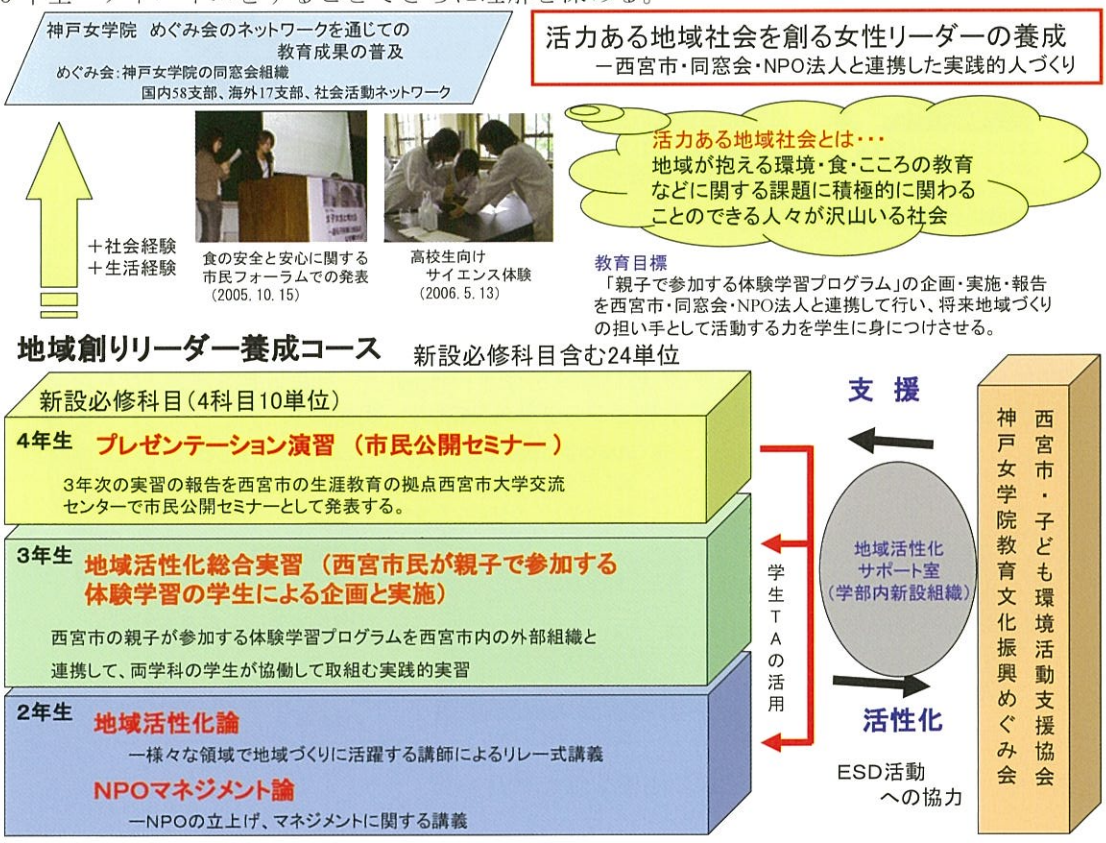


図1　本取組の概要

（地域活性化総合実習について）

「地域活性化総合実習」の概要を図2に示した。環境・バイオサイエンス学科の学生は自然観察、環境科学実習などの自然科学的手法を履修し、心理・行動科学科の学生は行動科学実験実習、臨床心理学実習Ⅰ（心理テスト実習）、臨床心理学実習Ⅱ（心理療法実習）など社会・心理学的な手法を履修している。異なる領域を学ぶ学生らが協働して取組む実習が「地域活性化総合実習」である。具体例として、「西宮市の環境調査に親子で一緒に協力するプログラム」があげられる。西宮市、LEAF では平成10年と15年に市全域で赤とんぼやタンポポなどの身近な生物の環境調査を行っており、平成20年にも同様な調査を行

うことが望まれている。身近な自然の環境調査に親子が一緒に協力することで児童の環境や生物への関心を高めたり、こころのケアを必要とする親子が自然の中での心の交流を深めたり、心の癒しを得たりすることが可能である。また、食の安全と安心、健康と食を考えるために簡単な理科実習と摂食障害予防のための教育を組み合わせた高校生と親のための体験実習やめぐみ会の社会奉仕活動と連携した老人と子供の交流を自然の中で行う体験実習などが考えられる。「体験実習の内容をどう伝えるか」、「どのようにグループを動かし、コミュケーションを効果的に行うか」については心理・行動科学の専門領域が大きな力を発揮する。学生たちは単なるボランティアリーダーとしてではなく、自主的に自分たちの感性と専門性を生かして、体験実習プログラムを作り上げると期待される。

図２地域活性化総合実習

【本取組の支援体制】

本取組を支援する学内体制としては、学部長、両学科長と各学科の教員数名からなる「地域創りリーダー養成コース」運営委員会を作る。地域活性化サポート室を開設し、現代 GP の補助金で採用する派遣職員を専従スタッフとする。本学には教育開発センターがあり、そこの専従スタッフが教育を効果的に行うための様々な活動を進めており、互いに連携して教育課程のマネジメントを行う。

西宮市、NPO 法人 LEAF は ESD 活動への本学部の参画を強く希望しており、本取組の申請に当たって、全面的な協力・支援を約束している。

めぐみ会は 1892 年に設立された神戸女学院の同窓会に端を発し、2000 年に社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会となったものであり、キリスト教主義に基づく本学の立学精

神を重んじ、教育振興、生涯教育、社会貢献を行うことを目的とする団体で会員数は約30,000名である。社会活動として「高齢者の介護」、「ベビーシッター」、「育児相談」、「手話通訳」などを行っており、めぐみ会は本取組を通じて、年配の会員と学生との交流が深まることを期待している。

【本取組の独創性と新規性】

本取組の特徴は自然科学系と心理科学系の異なる専門分野を学ぶ学生らが一緒になって、西宮市民とともに学ぶことで自らが成長できるプログラムとなっていることである。専門領域を超えた複眼的な視点を持つことの重要性を認識し、西宮市民が親子で参加する体験学習プログラムの企画と実施を担当することで、将来地域づくりに参画するのに必要な体験を得ることができる。

本取組には以下のような独創性と新規性がある。

①異なる専門を学ぶ両学科の学生が一緒に学ぶこと　異なる専門を学ぶ学生間で、講義でのディスカッション、実習の相談などを行うことで、お互いに違ったものの見方をしていることに気づき、幅広い視点で考えることの重要性を自然に学べる。

②幅広い世代の市民を対象とした体験学習プログラムの企画と実施を行うこと

地域活性化総合実習を通じて、西宮市が推進するESDへの貢献ができ、さらに、将来地域創りのリーダーとして活動するために要求される「各団体と市民との間をコーディネートする力」、「地域を活性化する活動をマネジメントする力」を持つ学生を養成することができる。

③神戸女学院の同窓会組織めぐみ会と連携すること　多くの卒業生が日本各地で神戸女学院の教育の精神を生かした様々な社会奉仕活動を行っている。学生は卒業後も本取組での教育を生かして様々な地域社会で「活力ある地域を創る活動」を実践すると期待される。

（3）評価体制等　［申請書作成・記入要領P.3参照］

本学では、全開講科目において、各学期中に学生による授業評価アンケートがFDセンターによって実施されている。その結果は各授業で公開され、受講する学生と意見交換を行っている。また、本取組では3年生の体験学習への学外の参加者に対するアンケート、4年生が行う市民向けセミナーでは市民と直接対話をした上でアンケート調査を行う。さらに連携・支援団体による学部評価も取りいれる。これらの結果を地域活性化サポート室で活動報告書にまとめ本学の教育開発センターに報告し、「地域創りリーダー養成コース」運営委員会を通じて本取組に反映させる。この体制は取組終了後も維持される。

（4）教育改革への有効性　［申請書作成・記入要領P.3参照］

本取組ではこれまで本学が追求してきた人間科学に関する教育を生かし、地域創りのリーダー（担い手）の養成、西宮市のESDへの協力という社会ニーズに応えるものである。学生自らが外部の連携・支援団体と協力して、西宮市民が親子で参加する体験学習プログラムの企画・実施に取り組むことは将来の地域活性化活動を推進するための貴重な体験となる。本取組で特に創意工夫した点は以下の4つである。①異なる専門分野を学ぶ両学科の学生が協働して、活力ある地域を創る活動に取組むための実地訓練を行う点、②西宮市

の推進するESDに協力する点、③西宮市の生涯教育プログラムと連携した市民セミナーを行う点、④めぐみ会会員を身近なロールモデルとする点。

本取組を通じて、自然科学と社会科学の学際的な領域での教育が進展するという教育改革が見込める。例えば、「食の安全と安心」では、残留農薬、環境汚染の農作物や魚への影響や遺伝子組換え食品に関する自然科学的な理解と、市民にそれをどのように説明するかというリスクコミュケーションに関する社会科学的な理解がないと一般消費者には説明できない。また、「こころのケアを必要とする人の自然とのふれ合いを通じた癒し」や「理科離れの進む子ども達の自然に対する興味の育成」なども学際的な視点が必要な教育分野であり、効果的な教育方法が確立されていない部分である。本取組をきっかけに両学科の教員が主体的に取組むことが大いに期待できる。また、本取組の終了後はＧＰプログラムに採択された他の２つのプログラムとも連携して本学のリベラルアーツ＆サイエンス教育の柱になると考えられる。

（参考）　［申請書作成・記入要領P.3参照］

①取組に関する今日までの教育実績

平成７年１月の阪神淡路大震災での物的被害、平穏な生活や肉親を失った精神的な被害から復興する過程で本学部は西宮市と「地域創り」で協力してきた（様式４資料７）。平成16年には４年生の卒業研究を基に西宮市「にしきた商店街」と連携し、兵庫県を動かし、津門川の魚道の設置を実現した（様式４資料８）。人間科学部４年生の卒業研究として取組んだ「津門川の環境保全に向けての調査・研究」は平成15年度環境学習都市にしのみや・パートナーシッププログラムに認定され、学生に環境科学を通じて地域に貢献することの大切さを学ばせることができた。「環境学習を通じた持続可能なまちづくりの推進」への貢献に対し、西宮市長から本学人間科学部に対し感謝状が贈られている（様式４資料９）。

両学科の卒業研究では多くの学生が親子の問題、こころのケア、摂食障害、自然環境、食と健康、都市開発と環境、地域社会の解決すべき重要な課題に取り組んでいる（様式４資料10及び資料11）。尚、環境・バイオサイエンス学科では平成17年度より地域とより密接に関わっていくために、卒業論文発表会に、共同研究を行っている西宮市職員（環境局環境緑化部、土木局下水道部）にも参加してもらうようにした。平成18年度は西宮市が進める生涯学習講座である60歳以上を対象にした「宮水学園」の受講者にも卒論発表会に参加して、質疑応答をしてもらうようにした。この地域と連携した卒業論文発表会は学生にとっても、新たな刺激となっている。

②実施体制等の今日までの経緯

人間科学部の２つの学科が独自に行ってきた西宮市を活性化し、「地域創り」をサポートする教育活動を集大成するものとして本取組がある。この現代GP申請に当たっては、西宮市、NPO法人LEAF、めぐみ会と協議し、どの団体も本取組に全面的な支援と協力を行うことを確認している。

本取組を先取りする形で平成19年３月21日に西宮市内の小学４年～６年の親子を対象に「こどもサイエンス体験教室」を行ったが、予定の25組を大きく超える申込みがあり、このような形の活動が強く求められていることが再確認された（様式４資料12）。

（様式３）

２　取組の実施計画等について【２ページ以内】［申請書作成・記入要領 P.3 参照］

次ページ表１に本取組の実施計画概要を示した。平成 19 年度後期から年次進行的に本取組の計画を実施していく。各学年に配当する新設科目は「地域活性化論」（2 年後期 2 単位）、「NPO マネジメント論」（2 年後期 2 単位）、「地域活性化総合演習」（3 年前・後期 4 単位）および「プレゼンテーション演習」（4 年前期 2 単位）の 4 科目 10 単位である。本取組に参加希望の学生 30 名を募集し、「地域創りリーダー養成コース」の講義課目（様式 4 資料 6）の中から必修の新設科目 10 単位を含む 24 単位を取得した者には修了証を発行する。

平成 19 年度　後期

①「地域活性化論」と「NPO マネジメント論」の新規開講
　NPO 法人 LEAF が、一連の講義と視察から構成される「市民版 ESD セミナー」を計画しており、その一部への出席を講義に組み入れる。
②派遣職員 1 名の雇用と地域活性化学習サポート室の設置
③「地域創りリーダー養成コース」運営委員会と西宮市、NPO 法人 LEAF、めぐみ会による協議会の設置
④情報発信サーバーシステムの導入とホームページの作成（外部委託）
⑤リレー式講義である「地域活性化論」の講義録作成（外部委託）
⑥担当教員による全国の ESD 推進地域の実地調査
⑦本取組を紹介するパンフレットの作成（外部委託）

平成 20 年度

前年度の活動に以下の活動を追加する。

①「地域活性化総合実習」の新規開講
　5 月末までに実施テーマを学生間のディスカッションで決める。人間科学部の教員がアドバイザーとして参加する。前期の間に企画の概要を決定し、外部団体との折衝を行う。後期はプログラムの細部を検討し、市民参加プログラムを実施する。
②派遣職員を 2 名追加雇用し、地域活性化サポート室を拡充
③教員による米国バーリントン市の環境学習、ESD 活動状況の実地調査
④地域活性化総合実習活動記録の映像化（外部委託）

平成 21 年度

前年度までの活動に以下の活動を追加する。

①「プレゼンテーション演習」の新規開講
　1）ホームページで公開するコンテンツの作成技術、講演でのプレゼンテーション技術の講義と実習
　2）学生が取組んだ「地域活性化総合演習」の西宮市大学交流センターでの報告
②3 年間を通じての活動報告書の出版

取組終了後も派遣職員の人件費を神戸女学院大学が負担することで本取組を継続し、西宮市の推進する ESD に協力するとともに、人間科学部の両学科を横断する教育コースとして充実発展させていく。様式7に記載したように本学では平成16年度に「通訳プログラム：通訳トレーニング法を活用した英語教育」が現代 GP に採択されている。西宮市では米国バーモント州のバーリントン市と環境都市学習都市宣言の共同調印を行っているのをはじめとして、環境に配慮した地域づくりの視察で海外からの訪問者もが多く、ESD による国際協調やＪＩＣＡの研修生受入も始めており、これらの機会に上記の通訳プログラム履修生が OJT として通訳を行っている。本取組と通訳プログラムの履修生が西宮市に協力することで西宮市が推進する ESD を海外に広めることが期待できる。本取組が採択された場合にはバーリントン市を初め ESD に取組む諸外国の都市の状況も研究調査して、本学部の教育に生かす計画である。また、平成 17 年度には「音楽によるアウトリーチ」が特色 GP に採用されている。これは大学を離れて学校、福祉施設、病院などで演奏活動を行うことで、社会に貢献し、学生は社会から学ぶことを目的としている。本学部の心理・行動科学科には音楽文化や音楽を利用した心理療法を専門とする教員もおり、「音楽によるアウトリーチ」も本取組の「こころのケア」と連携することができる。このように取組終了後は本学における３つの GP プログラムがリベラルアーツ＆サイエンス教育の中で互いに連携して、大きな教育改革効果が発揮できると期待される。

表１　取組の実施計画概要

		平成 19 年度開始		平成 20 年度開始		平成 21 年度開始	
月		２年生	支援体制	３年生	支援体制	４年生	支援体制
4 5 6 7	前期	既設科目の履修	●講師手配 ●学内手続	地域活性化総合実習（前期） 課題選定 実習企画	派遣 職員３名 ●企画助言 ○外部機関との交渉	プレゼンテーション演習 発表準備 セミナー実施	派遣 職員３名 ●発表助言 ○セミナー準備 ○アンケートの実施と集計
8 9	夏休				○プログラム参加者募集		
10 11 12 1	後期	地域活性化論 NPO マネジメント論	派遣 職員　１名 ○講義録作成 ●レポート評価	地域活性化総合実習（後期） 内容検討 実習実施 レポート作成	○外部機関との連絡 ○プログラム実施支援 ○参加者へのアンケート		○　報告書作成
2 3	春休						

●教員によるサポート、○派遣職員によるサポート

（様式４）３　「データ、資料等」【５ページ以内】［申請書作成・記入要領 P.４参照］

資料１　人間科学部教員の教育・研究分野

心理・行動科学科			環境・バイオサイエンス学科	
教育・研究分野	担当教員		教育・研究分野	担当教員
生涯発達心理学	森永　康子　教授		生態毒性学	川合　真一郎　教授
認知情報処理	三浦　欽也　准教授		水圏環境科学	山本　義和　教授
認知心理学	山　祐嗣　教授		動物生態学	遠藤　知二　教授
マルチメディア	出口　弘　教授		植物生態学	野寄　玲児　教授
音楽文化	田島　孝一　准教授		環境社会学	金沢　謙太郎　准教授
家族臨床心理学	國吉　知子　教授		健康医学	西田　昌司　教授
心身医学	生野　照子　教授		応用生命科学	塩見　尚史　教授
深層心理学	山口　素子　教授		食品分子機能科学	寺嶋　正明　教授
精神医学	水田　一郎　教授		基礎食品科学	高岡　素子　准教授
発達臨床心理学	石谷　真一　准教授			
学校臨床心理学	小林　哲郎　教授			

資料２　西宮市環境学習都市宣言

平成 15 年 12 月全国に先駆け環境学習都市宣言を行い、環境学習サポートセンターを設置している。西宮市は神戸女学院大学や NPO 法人 LEAF ともパートナーシップに基づき連携をしている。

西宮市環境学習都市宣言

いま、地球は危機に瀕しています。これまでの社会経済活動や私たち人間のくらしが、地球温暖化や砂漠化などの問題を引き起こし、自らの生存基盤でもある環境を脅かしています。

西宮市では、市民が主体となって、六甲山系の緑の山並み、武庫川・夙川などの美しい河川、大阪湾に残された貴重な甲子園浜・香櫨園浜をはじめとした豊かな自然を守るとともに、公害問題にも取り組むなど、良好な環境をもつ都市を目指してきました。また、阪神・淡路大震災の体験を通じて、自然の力の大きさとその中で生かされている私たちの存在を改めて学びました。

西宮の環境を、そして地球の未来を次世代に持続可能な状態で引き継いでいくためには、私たち一人ひとりが社会のありかたやくらしを見直さなければなりません。

環境学習とは、私たちのくらしが自然にどう支えられ、自然をどう利用してきたかを考え、環境に対する理解を深め、自然・歴史や文化・産業・伝統といった地域資源を活用しながら、地域や地球環境との望ましい関係を築いていくために学びあうことです。

私たちは、世代を超えて、家庭・地域・学校・職場などの様々な場所で、市民・事業者・行政の協働によって、人と人との新しい交流を生み出し、環境学習活動を支えるしくみをつくっていきます。

西宮に住み、学び、働くすべての人々が、文教住宅都市宣言（1963年）、平和非核都市宣言（1983年）の精神とあゆみを再認識し、環境学習を軸とした21世紀の持続可能なまちづくりを進めることをここに宣言します。

〔　行　動　憲　章　〕

私たち西宮市民は、参画と協働の環境学習を通じて、21世紀の世界に誇ることのできる持続可能な都市を実現します。

1　私たちは、自然のすばらしさを体験し、歴史、文化や産業と環境との関わりを学びあい、環境に配慮した行動を実践できる市民として育ちます。

2　私たちは、市民・事業者・行政・各種団体・ＮＰＯなどとのパートナーシップの精神に基づいて、地域社会に根づいた環境活動を進めます。

3　私たちは、くらしと社会を見直し、資源やエネルギーを大切にした循環型都市を築きます。

4　私たちは、健康で文化的なくらしの中で、人と自然、人と人とが共生する、公正で平和な社会を実現します。

5　私たちは、すべての生物が共存できる豊かな地球環境を次世代に引き継ぐため、環境学習を通じ、世界の様々な地域の人々とのネットワークづくりを行います。

西宮市環境学習サポートセンターパンフレットより

資料３　ESD（Education for Sustainable Development）

2002 年第 57 回国連総会において、2005 年からの 10 年を「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」とすることが決議されたことに基づいて進められている活動。単なる環境教育にとどまらず、

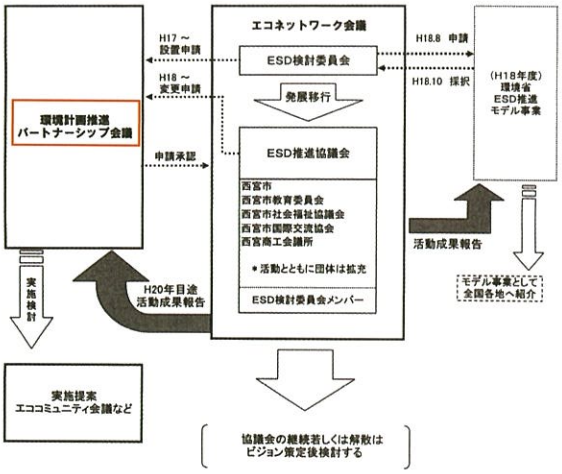
人権、男女間の平等、健康、持続性のある都市化などの事項を含み、様々な年齢層、地域の団体が協力して「持続可能な開発を達成するための教育」をおこなう。
(文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm より抜粋)

環境省は平成 18 年度に西宮市をはじめ、全国の 10 地域を ESD 促進事業地域として採択した。

西宮市では ESD 推進協議会の設置準備を進めている。環境計画推進パートナーシップ会議は西宮市の環境計画の推進に協力する市民、事業者、行政、専門家から構成される会議で神戸女学院大学　川合真一郎学長（生態毒性学）が委員長を務めている。

（右図は平成 19 年度国連持続可能な開発のための教育の 10 年促進事業計画書（NPO 法人 LEAF）より抜粋）

ESD推進協議会設置にあたっての整理図



資料 4　臨床心理学実習Ⅲ　学外実習先施設と実習生延べ人数（平成 13 年～平成 18 年）

実習先	延べ人数（人）	活動内容
こども家庭センター	１６	こどもとの面接、観察、発達検査
教育センター	9	学校に行きにくい子供に対する勉強・レクリエーションのボランティアサポーター
情緒障害児短期治療施設	5	こどもの相談相手、ケア、サポート
老人保健施設	2	高齢者の話相手、 施設のボランティアスタッフ
病院	２８	デイケア・プログラムの補佐、予診
企業	6	企業内のメンタルヘルス事業の補佐

（神戸女学院大学　心理・行動科学科教務資料より）

資料 5　心理相談室の相談件数（延べ回数）（西宮市および周辺地域からの相談）

	平成 14 年	平成 15 年	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	合計
初回面接	45	42	55	55	47	244
親面接	442	215	198	167	186	1,208
プレイセラピー	413	196	197	179	208	1,193
カウンセリング	247	349	336	182	261	1,375
合計	1,147	802	786	583	702	4,020

（神戸女学院大学　心理相談室資料より）

資料６　地域創りリーダー養成コースの講義科目

	両学科の学生が共通して履修する科目	環境・バイオサイエンス学科の学生が受ける実習	心理・行動科学科の学生が受ける実習科目
１年 前・後期	女性学（理論編） 女性学（実践編） 環境科学概論 生物の適応と進化 人権論 認知科学概論 情報科学基礎演習	環境科学基礎実習（前期） バイオサイエンス基礎実習（後期）	
２年 前期	食品環境学 ジェンダーの心理学 認知心理学 情報科学応用演習Ⅰ	生命の科学実習	心理行動科学実験実習 a
２年 後期	植物生態学 動物生態学 消費者問題論 認知心理学 健康心理学 家族臨床心理学 「地域活性化論」（新設） 「NPO マネジメント論」（新設）	微生物学実習	心理行動科学実験実習 b
３年 前期	環境生態工学 食品学 文化心理学 集団力学 「地域活性化総合実習」（新設）	食品機能解析実習 生態学実習	臨床心理学実習Ⅰa 臨床心理学実習Ⅱa
３年 後期	環境保護論 文化と人間行動 食文化論 都市環境論 「地域活性化総合実習」（新設）	食品学基礎実習	臨床心理学実習Ⅰb 臨床心理学実習Ⅱb
４年 前期	環境政策学 健康医学 「プレゼンテーション演習」（新設）		臨床心理学実習Ⅲ

（神戸女学院大学　学習便覧2006）

※赤字は必修の新設予定科目　　※必修を含む 24 単位を取得した履修者には修了証を発行する。

資料７　西宮市との地域再生に関連した連携の新聞記事一覧表

日付	新聞	タイトル
平成 14 年 7 月 8 日	神戸新聞	津門川の美　次世代に「川」をテーマに環境を考える
平成 15 年 7 月 18 日	朝日新聞	津門川の自然、近年豊か　西宮で網打ち生態調査
平成 16 年 5 月 2 日	読売新聞	遡上アユに復興の思い重ね「どぶ川」浄化熱意通じ県が魚道整備
平成 16 年 6 月 2 日	産経新聞	西宮市環境学習事業　９団体に感謝状
平成 16 年 7 月 7 日	神戸新聞	指導用資料集が完成　西宮の川辺学習のお供に
平成 17 年 10 月 18 日	神戸新聞	メダカの成育促したい　神戸女学院　池に 1500 匹放流
平成 17 年 10 月 22 日	産経新聞	「希少種を身近に」西宮・神戸女学院大　池にめだか放流
平成 18 年 4 月 9 日	毎日新聞	「津門川の自然を守る会」「水環境文化賞」を受賞

平成 19 年 1 月 15 日	神戸新聞	コウノトリの郷公園 昔の自然環境戻す工夫を学ぶ 神戸、西宮から視察

資料 8

神戸女学院大学山本義和教授研究室の学生が行った
卒業研究をもとに「にしきた商店街」と連携して
魚道の整備を実現する（平成 16 年 5 月 28 日　読売新聞）

年(平成16年) 5月2日(日曜日)　読売新聞

遡上アユに復興の思い重ね

「どぶ川」浄化 熱意通じ県が魚道整備

西宮北口駅前 商店街スクラム

アユの遡上を夢そうと、兵庫県西宮市の「にしきた商店街」を流れる津門川（約三・五キロ）で、県が魚道などの整備を進めている。生活排水やポイ捨てで「どぶ川」と言われたが、阪神大震災からの復興を目指し清掃を続ける商店主や住民らの熱意が県を動かした。小学生らが浄化への願いを込めて岸辺に水生植物を植え、工事はほぼ完了。住民らは装いも新たな川をのぼるアユに復興への思いを重ねる。

津門川は六甲山のわき水と武庫川が水源。阪急西宮北口駅前にある同商店街の西側を南北に流れ、農業用水などに利用されてきた。

震災後、不況もあって商店街周辺のにぎわいは半減。そんな中で「あれ、アユちゃうんか」と目撃が相次いだのは数年前。同商店街会長の矢田貝充彦さん（60）も半信半疑でのぞき込んだ川に鮮色の輝きを見つけ、胸を躍らせた。

アユは稚魚期を海で過ごし、春、川を上る。矢田貝さんらは「川をよみがえらせ、もっとアユの躍動を」と、四年前から月一回、川の掃除を続けてきた。

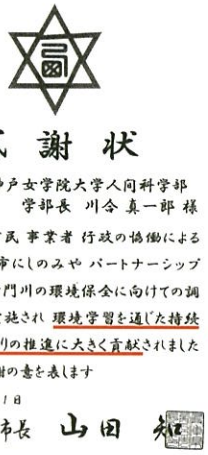
神戸女学院大の山本義和教授（環境科学）らが昨年行った調査で、アユやカワムツ、カワヨシノボリなど約二十種を確認。下水道の普及などで水質が向上し、魚が住みやすい環境になってきたこともわかった。

住民らは「魚が住みやすい環境を」と陳情。県は昨年、甘露の段差（約一・四）を緩和する簡易状の魚道を整備、今年三月には、水生植物を増やすため、くい・柵囲いを囲った育成場を二十四か所設けた。

稚魚はアユの遡上を待つばかり。矢田貝さんは「みんなの憩いの場にしたい」と言い、「にしきた川を守る会」会長の桑田運三さん（63）も「シジミをすくい、ホタルが飛び交った昔を思い出す。これから楽しみ」と期待している。

浄化を願い、津門川に水生植物の苗を植える子どもたち（兵庫県西宮市で）

資料 9　4 年生の卒業研究に対し、西宮市から感謝状を受ける



感謝状

神戸女学院大学人間科学部
学部長　川合 真一郎 様

貴学部は 市民 事業者 行政の協働による
環境学習都市にしのみや パートナーシップ
プログラム「津門川の環境保全に向けての調
査・研究」を実施され 環境学習を通じた持続
可能なまちづくりの推進に大きく貢献されました
ここに深く感謝の意を表します

平成16年6月1日

西宮市長　山田 [illegible]

資料 10　過去 5 年間の本取組に関連した卒業研究の件数

	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度
親子関係	1	5	6	4	6
学校教育	8	3	7	1	6
子供の心のケア	3	9	4	2	6
摂食障害	2	6	1	2	2
老人・介護	5	5	0	0	2
西宮市との共同研究	4	6	6	4	4
環境科学	9	7	10	9	7
生態学	7	10	5	11	8
食と健康	10	13	14	10	11
都市開発	6	7	7	6	9

（神戸女学院大学　人間科学部　教務資料より）

資料 11　本取組に関連した卒業研究の例（平成 16～18 年度）

平成 16 年度

・子どもの放課後と地域に対する愛着度の研究～都会と地方の小学生の比較を通じて
・施設における被虐待児の一事例研究 - 職員との愛情形成過程において -
・甲山湿原の昆虫相
・津門川と東川の環境を水質から評価する

平成 17 年度

・小・中学生の抑うつ傾向と生活習慣について
・青年期における家族機能のバランスと精神的健康との関連
・都市河川における植物相の動態ー津門川を事例としてー
・水生植物の水質浄化能力に関する研究ー下水処理場での現地実験と止水式実験
・西宮市の河川における農薬等化学物質の濃度

平成 18 年度

・障害児、家族に対する就学支援、社会的支援のあり方について
・女子中高生におけるソーシャルサポートと摂食障害傾向の関連について
・ユスリカの幼虫駆除を目的とした殺虫剤の散布と河川水中の殺虫剤濃度の変化
・甲子園浜はなぜ残されたのか
・西宮市下水処理場の礫間接触処理による環境ホルモンの除去

資料 12 こどもサイエンス体験教室

平成 19 年 3 月 21 日　於神戸女学院大学

2007年(平成19年)3月22日　木曜日

キャンパスで自然観察

近くの小学生ら　春の野山満喫

神戸女学院大

春の草花や鳥などを観察する「こどもサイエンス体験教室」が二十一日、西宮市岡田山の神戸女学院大学であり、近隣の小学生三十人と保護者らが、学内のあちこちで身近な自然を体感した。

同大のキャンパスは一九三三年の建設以来、自然な状態の林が保たれ、約十四万の敷地では約六百種にも多様な植生が観察できる。都市に残る貴重な自然に目を向けてもらおうと、これまでもフィールドワークで自然に触れる子どもたち―西宮市岡田山、神戸女学院大

高校生対象の体験教室を実施してきたが、今回初めて近隣の小学生向けに開かれた。

同大人間科学部の野崎玲央教授の案内でキャンパスを探検、子どもたちは希少植物のコモウセンゴケやガスに似た強いにおいを放つヒサカキの花を探し、イカルやコゲラなどの野鳥を観察。一年の井上大志朗くん(2)は「面白かった。タヌキのふんの中に、カキとかクテンみたいなにおい」「あ、あそこや」と歓声をあげていた。

参加した市立広田小二年の井上大志朗くん(2)は「面白かった。タヌキのふんの中に、カキとかヒノの実が入っていて、びっくりした」と話し、フィールドワークを満喫した様子だった。（山崎　竜）

神戸新聞（平成 19 年 3 月 22 日）

岡田山キャンパス探検隊

平成１９年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定取組の概要及び選定理由

大学等名	神戸女学院大学	整理番号	1069
テーマ番号	1	テーマ名	地域活性化への貢献（地元型）
取組名称	活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成－西宮市・同窓会・ＮＰＯ法人と連携した実践的人づくり－		
取組担当者名	寺嶋　正明		

（取組の概要）

神戸女学院大学人間科学部は「自然とこころと体を科学する」をモットーに学際領域の教育を行っている。本取組では地域の多くの課題に積極的に取組む市民が沢山住む活力ある地域社会を実現するため、西宮市、NPO 法人こども環境活動支援協会、神戸女学院教育文化振興めぐみ会（本学同窓会）と連携し、将来の地域創りリーダーとなる人材を育成する。環境学習都市宣言を行った西宮市は、「持続可能な開発のための教育（ESD)」促進事業地域に指定され、ESD を推進している。本取組では２つの学科で異なる専門科目を学ぶ学生が協働し、西宮市の ESD に協力する「西宮市民が親子で参加する体験学習プログラム」を企画し、外部支援団体と折衝して実施する。本取組の実践的教育を受けた履修生は「地域の課題」を様々な視点から考える必要性を明確に自覚し、本学卒業後も「めぐみ会」の一員として日本各地で地域創りリーダーとして活躍すると期待できる。

（選定理由）

本取組は、環境・バイオサイエンス学科と心理・行動科学科の２学科にまたがる「地域創りリーダー養成コース」を新設し、地元自治体西宮市、NPO 法人 LEAF、本学同窓会（めぐみ会）と連携しながら、「市民が親子で参加できる体験学習型プログラム」の企画・実施を体験することによって、地域活性化を担うリーダー的人材を養成するプログラムです。本取組は地域貢献度、教育プログラムとしての完成度、実現可能性、そして新規性などの視点から優れたプログラムであると評価できます。

「地域創りリーダー養成コース」は２学科にまたがる専門の異なる学生に対して、２年次から必修科目４科目（１０単位）を含む２４単位でカリキュラムが構成されており、本コースを修了すると修了証が与えられます。２年次に地域創り活動の見学や連携・支援団体の担当者から話を聞きくことで課題発見に取り組みますが、３年次に配当される中心的科目「地域活性化総合実習」のもとで、連携・支援団体と共同して、身近な自然を題材とした環境問題、食の安全や安心、子供のこころの問題などをテーマとしながら、「市民が親子で参加できる体験学習型プログラム」を企画して実施するというものであり、これまでの本学の地元における活動からみても十分に実現が可能です。

また、地元の卒業生の協力による取組の実施という、女子大ならでは新規性もあり、地域社会の子育てに十分貢献するとものと評価できます。

読売新聞　2007年8月8日

地域担う女性育て

神戸女学院大 10月新コース

2学科連携　NPO講演、環境調査

神戸女学院大（西宮市）の人間科学部で、学生が地域を活躍する女性リーダーに育成しようと「地域創リーダー養成コース」を10月から新たに開講する。同学部の環境・バイオサイエンス学科と環・行動学科の学生がそれぞれの専門を生かして連携する試みで、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選ばれた。講師を務める神戸市出身の俳優で、「説得する力を育てたい」と意気込んでいる。

神戸女学院大（西宮市）の人間科学部は、学生が地域を活躍する女性リーダーに育成しようと「地域創リーダー養成コース」を10月から新たに開講する。同学部の環境・バイオサイエンス学科と環・行動学科の学生がそれぞれの専門を生かして連携する試みで、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選ばれた。講師を務める神戸市出身の俳優で、「説得する力を育てたい」と意気込んでいる。

環境・バイオサイエンス学科は廃棄物処理や食品の安全と安心に関する問題対策のセミナーを開き、心理・行動学科は近くの児童相談所や障害福祉施設への外出実習などへ、個々に地域とかかわって貢献、今回初めて連携することになった。

また、同大学周辺の地元のNPO法人、同大学同窓会（めぐみ会）など周辺団体から積極的に協力を得るのが3つ目の特徴。寺嶋教授は「現場の声や課題を成熟できるし、卒業後も地域で活動するために不可欠な人的ネットワークも築けると思う。

コースの定員は1学年30人。2年生春期から4年生前期まで、必修の4科目10単位と合わせ、2年間で24単位を取得する。2年生は講義中心で、NPO法人や同窓会のメンバーら講師に招いた「地域活性化論」と「NPOマネジメント論」。3年生では1年間かけて地域活性化事業計画を作成し、地域の市民団体に参加する体験学習を学生が企画する。子どもの環境、生物への関心を深め、朝ごはんが自然の中で関係を深めることなどできる環境調査などを試む。

寺嶋教授は「学生が活躍でき、専門を生かし、協力して実習プログラムを作り上げて欲しい」と期待する。4年生は、3年生時の実習を市民公開セミナーで発表する「プレゼンテーション講演」を行うという。

読売新聞　2007年8月2日

現代GP 119件選出

神戸女学院大　「お遍路」単位認定

地域リーダー養成

鳴門教育大

現場で養育法開発

大阪薫英女子短大

端末で双方向教育

阪南大

立命館大

「映画の街」再生の拠点

人造湖で水環境学ぶ

岡山大

文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」グッド・プラクティス（GP）の選定結果が発表され、全国の国公立大、私立大、短大、高専など119件が選ばれた。今年度の応募は、過去最多の600件を超す。今回は、地域リーダーの養成や、地域の市民団体と連携した教育など、多様な取組が目立つ。

「神戸女学院大」は、2年生から3年生までの1年間、地域創リーダー養成コースを新設する。学生たちは、学内の講座や、地域の市民団体などに参加し、地域の課題を見つけ、解決策を考える。大阪薫英女子短大は、地域の高齢者などを招いて、「共育」プログラムを実施する。

「鳴門教育大」は、地域の「お遍路」を通じて、地域の歴史や文化、地域の人材を学ぶ。

「阪南大」は、地域の市民団体などと連携して、子育て支援センターを開設する。

「大阪薫英女子短大」は、地域の高齢者などを招いて、「共育」プログラムを実施する。

「立命館大」は、「映画の街」再生の拠点を目指す。

「岡山大」は、人造湖で水環境学ぶ。

産経新聞　2007年8月25日

教育の質の充実、人材の育成を目的として

5年目、よりユニークに

今年新たに「社会人学び直しプログラム」も

地域と連携した取り組み目立つ

近畿における平成19年度の現代GP選定校

	大学名	取り組み名称
国立	京都工芸繊維大	京都ブランドによる人材育成と地域創成
	大阪大	デンタルスキル養成実体感シミュレータ学習
	〃（名古屋大と共同）	プロジェクト型大学間交流連携ゼミの構築
	神戸大	アートマネジメント教育による都市文化再生
		アクション・リサーチ型ESDの開発と推進
	奈良教育大	職業意識育成プログラムのリメーク
	奈良女子大	古都奈良における生活観光
	和歌山大	紀ノ川流域をフィールドとする自主演習
公立	大阪市立大	インタラクティブ型キャリア教育方法の確立
私立	京都光華女子大	学生個人を大切にしたキャリア教育の推進
	阿志社大	アクションプラン主導型発見的キャリア教育
	立命館大	映像文化の創造を担う実践的教育プログラム
		琵琶湖で学ぶMOTTAINAI共生学
	龍谷大	学生力と地域力を相互に高めあう教育実践
	大阪樟蔭女子大	学生による地域協創型子育てモデルの開発
		総合的人間力を育てるサイクルプロジェクト
	追手門学院大	地域と連携した起業家的人材の育成
		過大型自主自立キャリア支援モデルの展開
	関西大	農山村集落との交流型定住による故郷づくり
	阪南大	実学指向型総合的キャリアシステムの構築
		ICTを活用した双方向教育システムの構築
	甲南大	実践的経営シミュレーション複層プログラム
	神戸女学院大	活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成
		女性のライフステージに応じたキャリア教育
	大阪薫英女子短大	遊び力を育成する地域資源型の保育者養成
	神戸山手短大	地域・大学インタラクション型の学習事業

「地域と連携した起業家的人材の育成」プログラムで、地元商店街の復興などに参加する追手門学院大学の学生たち

朝日新聞　2008年8月29日

告知板

◆女性限定「メタボ」予防イベント参加者募集

9月13、27の両日、神戸女学院大（西宮市岡田山）第3体育館。同大学の学生が企画した。教員が講師となり、食事や運動、生活習慣について学んでもらうプログラム。13日はメタボリックシンドロームの内容と自分の身体を理解するため、体脂肪やBMI、筋肉量を測定し、27日は運動によるメタボ対策を解説。27日はトランポリンを使ったエアロビクス実習がある。いずれも午後1時から。参加無料。定員20人。申し込みは31日までに神戸女学院大人間科学部GP推進室（079 8・51・8591）へ。

読売新聞　2008年8月30日

メタボ早期予防

女性に無料講座

来月、神戸女学院大

神戸女学院大（西宮市）は9月13、27日に女性限定の無料講座「早めのメタボ予防大作戦」を開く。教授らによる講義や実技を通し、食事や運動、生活習慣などメタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）に関する基礎的な知識を学ぶ。

同大学が取り組む「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成」事業の一環。授業でメタボについて学んだ人間科学部の学生6人が、家族や自らが健康的な日々を送るきっかけにしてもらえればと企画した。

13日は同大学の高岡素子准教授（食品科学）が、食や運動に関するメタボ対策を講義。27日は井上紀子教授（体育学）が監修した、ミニトランポリンを使った体に負担がかかりにくいエアロビクスに取り組む。

定員20人で両日とも参加できることが条件。応募者多数の場合は抽選。申し込みは、31日までに同大学人間科学部GP推進室（079 8・51・8591）へ。

PROJECT STAFF 一覧

地域活性化論

担当講師

有吉 直美（株式会社チクマ キャンパス事業部）／浅倉 景子（川がきクラブ）／林 裕美子（てるはの森の会・ひむかの砂浜復元ネットワーク）／狭間 恵三子（サントリー次世代研究所）／石割 初子（社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会）／児嶋 みち子（NPO法人テクノシップ）／小山 智朗（宝塚市立教育総合センター 教育支援課）／的場 直樹（西宮市 環境緑化部 環境学習推進グループ）／内貴 研二（サントリー株式会社 CSR・コミュニケーション本部）／織田 泰史（宝塚市立教育総合センター 教育支援課）／小川 雅由（NPO法人こども環境活動支援協会）／大成 広毅（西宮市 環境緑化部 環境都市推進グループ）／齊藤 隆（NPO法人シニア自然大学校）／佐々木 秀樹（西宮市 環境緑化部 環境学習推進グループ）／側垣 一也（社会福祉法人三光事業団）／杉本 雅代（社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会）／杉田 水脈（西宮市 こども部 子育て企画・育成グループ）／武地 秀実（有限会社とともも）／筒井 恵子（社会福祉法人鴻仁福祉会 特別養護老人ホーム愛光苑）／植村 弘巳（西宮市社会福祉協議会 地域福祉課）／浦邊 純子（社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会）／山田 賀世子（社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会）／山本 佐登子（宝塚市適応教室Palたからづか）

担当教員

寺嶋 正明／水本 誠一／遠藤 知二

NPOマネジメント論

担当講師

小川 雅由（NPO法人こども環境活動支援協会）

地域活性化総合実習 平成20年度 親子で作ろうベジタブル!

学生

友田 麻子／橋田 佳奈／畑田 真紀子／井手 恵／森元 智子／中田 有美／坂本 美菜子／瀬尾 磨諭／東郷 菜穂子／山口 真里奈／安本 有希

担当教員

寺嶋 正明／小林 哲郎／山本 義和／水本 誠一

NPO法人こども環境活動支援協会

久世 竜／小川 哲生／有野 康夫／有野 良子／佐伯 康夫　他数名

地域活性化総合実習 平成20年度 早めのメタボ予防大作戦!!

学生

小西 くみこ／平山 智子／笠松 彩／尾野 安希子／塩見 嘉奈子／安廣 琴恵

担当教員

井上 紀子／高岡 素子／西田 昌司／山本 義和／水本 誠一

協力

松平 智子／山崎 阿友美（体育研究室）

地域活性化総合実習 平成20年度 みんなでecoクッキング!

学生

植田 久珠子／別枝 茉紘／畑 冴子／伊賀 梓／池本 成美／石田 未来／礒部 泰菜／片山 翠／曽我部 智子／寺坂 悠

担当教員

寺嶋 正明／小林 哲郎／西田 昌司

NPO法人こども環境活動支援協会

久世 竜／小川 哲生／有野 康夫／有野 良子／佐伯 康夫　他数名

地域活性化総合実習 平成21年度 親子で収穫体験♪

学生

岩崎 有美／青山 恵／岡本 真奈／砂川 絢香／上山 祐佳莉／山口 友理／山本 文子／八束 絵美／糞田 唯

担当教員

水本 誠一／遠藤 知二／寺嶋 正明／奥田 紗史美

NPO法人こども環境活動支援協会

久世 竜／中村 裕一／有野 康夫／有野 良子／佐伯 康夫　他数名

地域活性化総合実習 平成21年度 自然と考えよう!

学生

萩原 淳／堀 仁美／金城 京子／岡田 佳奈／重本 万里子／田村 典子／安田 朱里

担当教員

水本 誠一／西田 昌司

協力

久米 正彦（神戸市立六甲山牧場）／ドギーバッグ普及委員会

地域活性化総合実習 平成21年度 わくわく!ぶんぶん!はちみつ採集

学生

山崎 慧／北川 真理子／森本 静／西條 衣美／山本 佳奈／山崎 有美子

担当教員

水本 誠一／遠藤 知二／西田 昌司

プレゼンテーション演習

学生

別枝 茉紘／橋田 佳奈／井手 恵／小西 くみこ／中田 有美／坂本 美菜子／瀬尾 磨諭／塩見 嘉奈子／曽我部 智子／安本 有希／畑 冴子／畑田 真紀子／伊賀 梓／池本 成美／石田 未来／礒部 泰菜／笠松 彩／片山 翠／森元 智子／尾野 安希子／寺坂 悠／友田 麻子／植田 久珠子／山口 真里奈／安廣 琴恵

担当教員

寺嶋 正明／水本 誠一

株式会社 オレンジフリー

吉田 ともこ／蒲原 久美

GP推進室

北川 真優美／西原 光恵／周防 彩子

（一部を除きアルファベット順、敬称略）

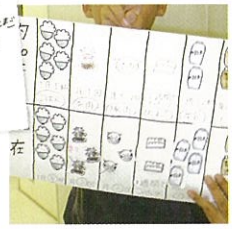
平成 20 年度
総合実習
Project 1

平成 20 年度
総合実習
Project 2

平成 20 年度
総合実習
Project 3

School of Human Sciences
Kobe College

平成 21 年度
総合実習
Project 1



平成 21 年度
総合実習
Project 2

平成 21 年度
総合実習
Project 3

平成19年度　文部科学省採択「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」選定取組
「活力ある地域社会を創る女性リーダーの養成
～西宮市・同窓会・NPO法人と連携した実践的人づくり～」
最終報告書　平成22年3月

発行　神戸女学院大学
〒662-8505　兵庫県西宮市岡田山4－1
http://www.kobe-c.ac.jp

発行日　2010年3月

印刷・製本　大伸社

お問い合せ先
神戸女学院大学 人間科学部GP推進室
Tel /Fax　0798 - 51 - 8591
e-mail　jinkagp@mail.kobe-c-ac.jp
HP　http://humangp.kobe-c.ac.jp/

無断での転載・複写を禁じます。

KOBE COLLEGE

ミックス品
FSC認証林及び管理された
森林からの製品グループです
www.fsc.org Cert no. SA-COC-001220
© 1996 Forest Stewardship Council
FSC

PRINTED WITH
SOY INK